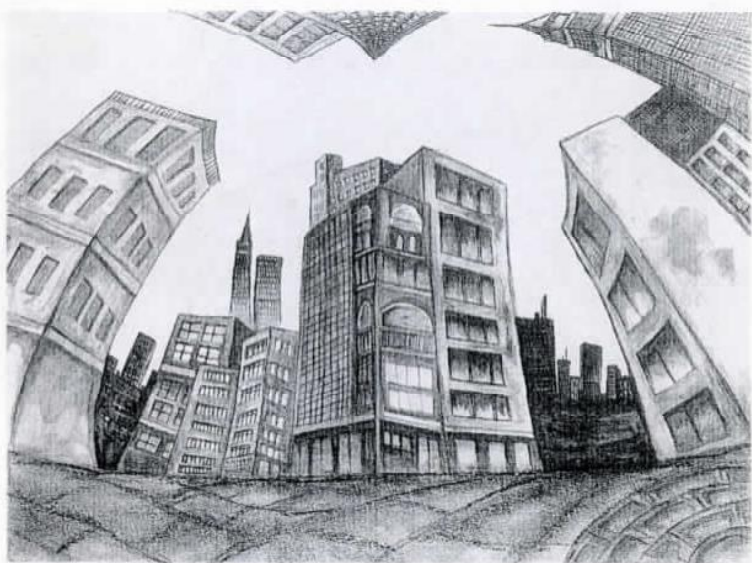


# 演劇会議

Vol. 95 1997年11月



今日のリアリズム シリーズ⑦

リアリズム? (その3)

「スタニスラフスキー・システムの見直しから」

全日本演劇フェスティバル IN KOBE

戯曲『老人と赤いポスト』

中本信幸

梶 武史

東川宗彦

全日本リアリズム演劇会議

大阪新劇団協議会プロデュース  
フェスティバル25周年記念  
合同公演

日本芸術文化振興基金助成事業  
大阪府芸術文化補助金事業  
大阪市舞台芸術活動助成事業

原作/手塚治虫 脚色・演出/内藤裕敬(南河内万歳一座)

## 陽だまりの樹

● 3月13日(金) 18:30 14日(土) 14:00/18:30 15日(日) 14:00

■ 一般 前売 ¥4500 当日 ¥5000

割引 中高生・老人 前売 ¥3500 当日 ¥4000

道頓堀 中座 06-211-1566

お問い合わせ先 〒546大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7 TEL. 06-695-6401

劇団コーロ内 大阪新劇団協議会

—— 砂の女 ——

97年度オールロシアゴールデンマスク賞!!

最優秀演出家賞、最優秀女優賞、最優秀男優勝独占!!

かつてのソビエトロシア時代、砂の穴にとじこめられた  
ロシア文化の担い手たち、ロシア演劇人の安部公房作「砂の女」  
に想う心が熱い。

—— 三人姉妹 ——

人はなぜ苦しみ、生きるのか

チェーホフがよびかける劇的なものへの道程。

ロシア国立オムスクドラマ劇場来日公演 来年3月 割引チケット  
お問い合わせ・チケット申込/Rohオフィス 03-3401-6038

## ◆ もくじ ◆

グラビア (舞台) .....	1
今日のリアリズム シリーズ⑦ .....	9
リアリズム? (その3) — 「スタニスラフスキー・システム」の見直しから	
シンポジウム 検証・リアリズム (その2) 「今日の創造のために」 .....	21
台風の中、熱い討議 「西日本劇作家の会」第15回総会 .....	27
全リ演東西合同総会ひらく .....	31
大成功だった全日本演劇フェスティバル IN KOBE .....	35
演劇フェスタに参加して .....	42
舞台を観て 神沢和明/阿部好一/平田 康 .....	45
97年夏に受けた衝撃 .....	49
李 相龍 .....	49
顔 .....	52
藤原重孝/松井光義/松下 朗 .....	52
さようなら清洲すみ子さん .....	58
北林谷榮 .....	58
ロシア演劇レポート⑩ .....	60
桜井郁子 .....	60
北京レポート .....	68
坂手日登美 .....	68
北から南から 〈劇団通信〉 .....	74
劇 評 .....	92
きづかわ『勲章の川』 .....	92
今泉おさむ .....	92
関西芸術座『お母さん疲れたよ』 .....	92
銅鐘『池袋モンパルナス』 .....	94
中澤研郎 .....	94
阿修羅『証言』 .....	96
佐藤逸平 .....	96
潮流『続・夢幻乱歩館』 .....	99
神沢和明 .....	99
コーロ『家裁の人』 .....	100
戯曲『老人と赤いポスト』 .....	102
東川宗彦 .....	102
情報BOX・伝言板 .....	122
事務局だより・読者のページ .....	124
12月以降の公演&行事 .....	125
全日本リアリズム演劇会議 住所録 .....	126
『演劇会議』発行の実務が西会議に移行するのにもなって .....	132

表紙 『ウエストサイドストーリー』 坂元聖子



◇劇団銅鐘  
『池袋モンパルナス』 9月12〜15日  
原作・宇佐美承 作・小関直人  
演出・山田昭一



◇劇団埼玉  
『奇跡の人』 6月8日  
作・ウイリアム・ギブソン 訳・額田やえ子  
演出・金剛寺照五郎



◇劇団コーロ  
『家裁の人』 9月12・13日  
作・毛利甚八・魚戸おさむ  
脚色/演出・平石耕一

◇劇団潮流

『続・夢幻乱歩館(狂恋篇)』 9月5〜7日  
作・葛山耿介 演出・藤本栄治



◇劇団はぐるま

『王子と乞食』 7月19〜21日  
脚色・こばやしひろし  
演出・こばやしひろし/波田正子



◇仙台小劇場

『オズの魔法使い』 8月23・24日  
脚色・浅野公藏 演出・石垣政裕



◇劇団きつがわ

『敷章の川』 6月28・29日  
作・本田英郎 演出・林田時夫

◇劇団弘演

『海と日傘』 9月16〜21日  
作・松田正隆 演出・高田 潔



◇劇団やませ

『賢治の世界』 Vol.2 6月20・21日  
構成・梶谷伸夫 演出・加藤健太郎



◇劇団すがお

『石取祭りよ夜空にゆれる土』張 8月10日  
作・栗木英章 演出・加藤武夫／吉良史郎



◇劇団海鳴り

『祭よ、今宵だけは哀しげにく銀河鉄道と夜』  
6月28・29日  
作・加藤純／清水洋史 演出・相澤 哲



◇劇団名去

『七つの子』 8月29・30日  
作・栗木英章 演出・久保田明



◇劇団上野市民劇場

『私が私と出会う時』 9月13・14日  
作・ふじたあさや 演出・杉森正美



◇劇団コロロ

『朝やけ色つてどんな色?』 9月6・7日  
作／演出・西田豊子



◇演劇集団あり

『五里ヶ浜の緋娘は...』 9月18日  
作／演出・宮倉義文

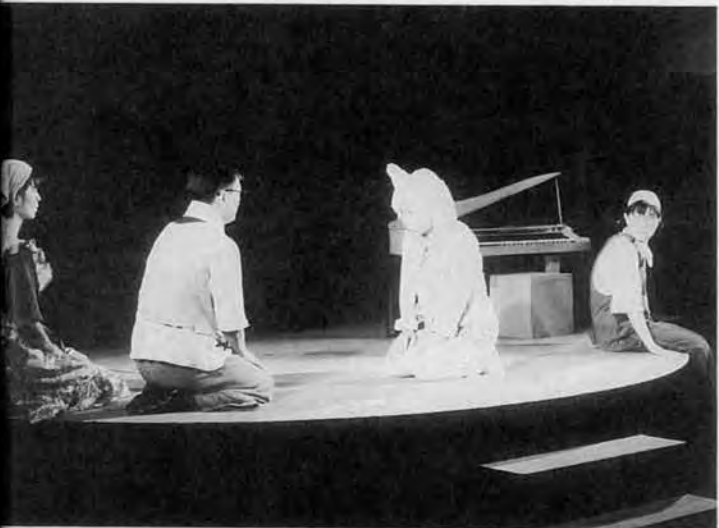
◇関西芸術座

『おかあさん疲れたよ』 8月29・30日  
作・田辺聖子 脚色・ふじたあさや  
演出・道井直次



◇劇団道化

『ピアニヤン』 8月30日  
原作・小川英子 脚本・中村芳子  
演出・熊井宏之



◇劇団阿修羅

『証言』 9月5・6・15日  
作・岩瀬 孝 演出・杉木 圓



◇劇団名芸

『地蔵ものがたり』 6月21・22日  
作・粟木英章 演出・佐野秀明

◇テアトル・ハカタ

『ピトルギの鈴』 9月27・28日  
作・千葉多喜子 演出・野尻敏彦



◇東京芸術座

『死んだ海』 8月31日〜9月1日  
作・村山知義 演出・稲垣 純



## ◇青年劇場

『翼をください』 8月11～14日  
作/演出・ジェームス三木



## ◇神戸職演連

『オレンジ色の光がはしった』 5月16日  
作・本多弘志 演出・松本昌浩



## ◇劇団四紀会

『頭痛肩こり樋口一葉』 6月6～8日  
作・井上ひさし 演出・梶 武史



今日のリアリズム シリーズ⑦

## リアリズム? (その3)

—「スタニスラフスキー・システム」の見直しから

中本 信幸

## 「遺書」の波紋

「はじめは久保システム—ぼくらはそう呼んだ。久保栄はロシア・ソビエトにおけるスタニスラフスキー・システムに対応する日本型を目指して、演技の理論的体系化を試み、ぼくらはそれを学んだ—とスタニスラフスキー・システムのちがいにについて、てまえ勝手な概念論争に花を咲かせていた。当時、ぼくらははずびず叢書のスタニスラフスキー「身体的行動」ののっつって、スタニスラフスキー・システムを研究し、演技の基礎単位を身体的行動と考え、実践していたのに対し、久保栄は翻訳上のまちがいであるとして、演技の基礎単位を“動き”とした。この“動き”行動”めぐって論議し合っ

たのだ」。

以上は「久保栄演技論 講義」(三三書房、1976年)の編集同人代表山田善晴「まえがきに代えて」からの引用だ。1956年4月から翌年にかけてほぼ1カ月、久保栄は劇団民芸附属水品演劇研究所で20回にわたって講義をおこなった。

スタニスラフスキー著、土方与志訳「身体的行動」(未来社、1953年)は、1948年にソ連の演劇雑誌『テアトル』第8号、第11号にはじめて公表されたスタニスラフスキーの「遺稿」の邦訳である。この「遺稿」は、未完の『俳優修業』第3部のために書かれたものの一部であった。戦前から日本の演劇界はモスクワ芸術座やスタニスラフスキー、スタニスラフスキー・システムに絶大な関心を寄せてきた。終戦直後から1950年代半ばにかけてスタニスラフスキー・システムがブームになっていたにもかかわらず、スタニスラフスキーの著作では、『俳優修業』第1部と『芸術におけるわが生涯』が英語版から邦訳されているにすぎなかった。もつとも、肝心の本国でも『スタニスラフスキー全集』全8巻が刊行(1954-1964年)されるまで、スタニスラフスキーの基本資料が紹介されていなかったのだ。

前述のように、英語版から訳出された山田肇訳『俳優修業』が戦前に刊行された。この『俳優修業』が1951年

に再刊され(創元社刊)、ラボポルト著、山田肇訳「俳優の仕事」(未來社、1951年)、スタコフ著、山田肇訳「俳優の創造」(未來社、1952年)、ミローノフ著、土方与志訳「演出教程」(五月書房、1951年)が出た。

中・高校で、そして大学で素人芝居に関係していたとき、ぼくは千田是也、村山知義の本を頼りに、演劇の勉強を始めた。スタニスラフスキー・システムこそが演劇における社会主義リアリズムリアリズムの正統派とみなされ、スタニスラフスキーとネミロヴィチ・ダンチェンコの仕事を教条的に、ゆがめて解釈されていた時期である。活字を通してのスタニスラフスキー・システムの受容が始まり、関連する本がその当時の演劇青年の必携本になっていた。1952年11月、舞台芸術学院の学生だった後藤陽吉と知り合い、かれに招かれて舞台芸術学院に行き、土方与志、土方先生の助手をつとめていた長谷川誠らに紹介された。以来、土方先生のリハ・サル・演出に足しげく通うようになった。先生は、スタニスラフスキーの「身体的行動の方法」にもとづいて舞台作りを試みていたのである。ぼくが編訳した「シェイクスピア研究」(未來社、1961年)の著者モローゾフのことを知らせてくれたのも、舞芸座の「ヴェニス商人」公演パンフレット(1958年5月)に拙文「ソヴィエト・シェイクスピア学へのプロローグ」を寄稿するようすすめてくれたのも、土方先生であった。

### 岡倉士朗の確信

岡倉士朗は、木下順二によれば、戦前から「スタニスラフスキー・システム」というものを、いかにして日本の劇術として創造的にとらえなおすかに力を傾けていた。

1955年に訪ソしてきた木下順二や、中国を訪れた千田是也らの話をきいて、岡倉は「どうやら私たちのスタニスラフスキー・システムの勉強を、まちがった方向に進めてきたわけではないということが判って安心した」と書き、「歌舞伎と新劇の創造方法がまるで断絶している」日本で、「システムがどう育つか、むしろつくり上げられるか」ということこそがこれからの課題であると考えた。

スタニスラフスキーの「遺言」が日本に紹介されてから、



故 岡倉士朗

岡倉は、「・・・身体的行動がスタニスラフスキーの探究の最後の到達点であったというのは、そこから遡って過去の段階を図式的に理解することではない。この到達点より身体的行動をどう発展させてゆくかという行動の

1956年の「スターリン批判」以降、形式主義・反リアリズムの汚名を着せられていたマイエルホリド、ワフタングフ、タイロフらがソ連で再評価されるようになる。土方先生が演出した一連のシェイクスピア劇には、先生



アレクセイ・ポポフ

が「恩師」と呼ぶアレクセイ・ポポフの演出技法が、亡くなる前年の1958年に演出した花田清輝作「泥棒論語」には、若き日に傾倒したマイエルホリドの影響が見てとれた。

「遺書」(「身体的行動」)が公表(1948年)されてから、スタニスラフスキー晩年の弟子たちの手になる回想記・論考が相次いで発表され、国際的にも注目され、日本にもいち早く邦訳紹介されるようになる。その頃の日本は、スタニスラフスキー文献の翻訳・紹介の点では欧米諸国より先んじていた。1949年にトボルコフの「稽古場のスタニスラフスキー」がモスクワで刊行され、1954年に邦訳が出た(馬上義太郎訳、早川書房刊)。ドイツ語訳が1952年に、英訳が1979年に出ている。



トボルコフ(オルゴレ)『タルチュフロ』(スタニスラフスキー演出)

中に於いてのみ、スタニスラフスキーの足跡を発展的に体得できる」(プロコフィエフ、牧原純訳「舞台的形象」の解説、1953年)と、考察をすすめる、次のような結論に達する(「どよみの会通信」1956・3・1)。

「新劇の現在の大きな課題は自然主義からの脱却だといえる。スタニスラフスキー・システムは一見写実主義のようにはみられることがあるようだが、事実はそれとははるかに遠いものにちがいない。それなのに私たち日本におけるシステムの適用——勉強は、翻訳劇風の傾向か、私小説風な自然主義に基礎をおくかということにおちこみそうな気がする。その一方では、自然主義をぬけ出すという旗印のもとに、抽象的な条件性の演劇が流行っている」(岡倉士朗演劇論集 演出者の仕事 未來社、1965年、223ページ)

1958年12月から翌59年1月にモスクワ芸術座が来日公演した。多くの演劇人が「システム」の成果を確認でき、「システム」についてモスクワ芸術座の人たちと意見を交換できたのである。ぼくもこのとき、演出家ラエフスキー、俳優ヤンシンはじめ多くの座員と知り合った。

来日したモスクワ芸術座の生の舞台にふれてから、岡倉は「スタニスラフスキー・システムが写実主義的方法論だと理解されていることは、その本質とおよそ遠いものだ」と確信する(「演劇」への胎動、「新劇」1959・2)。

## 「身体的行動の方法」、反社会主義リアリズム II 反リアリズムとして槍玉に

「30年代が始まってから、ソヴィエト作家により書かれたすべての著作は、程度の差こそあれ、不誠実なものである。多くの才能ある作家は、どうしたら嘘をつけるかを学ばず、沈黙した」。

「作家たちのやったお手本を見習って、演劇もまた、嘘をつき始めた。実際、劇団は、時流に身を処した作家たちによりこしらえられた嘘を、戯曲形式の立派な作品として受け取った」。

ユリー・イェラーギンが、「芸術家慣らし——スターリン政権下の芸術家の生活——」（遠藤慎吾訳、早川書房、1953年刊、99ページ）で警告していることは、旧ソ連時代に公刊されたものについては真実である。その時代の刊行物をよむときには、文字どおりの「眼光紙背（しはい）に徹する」姿勢で、活字の背後にひそむ著者の真意を、文章やことばの「ボドテキスト」を読みとらなければならぬのだ。30年代になって確立されたスターリン体制が、「社会主義リアリズム」のみを公認の芸術形式としたことは、ロシア・ソビエト芸術の最も悲劇的事件である。そして、スタニスラフスキー・システムだけが、演劇における「社

会主義リアリズム」

の正統派とみなされ、教条的に解釈され、政治的に利用されるようになった。

スタニスラフスキーの死後、スターリン体制下の不自由な状況のもとでも、その弟子たちによってその遺訓が、舞台や俳優教育の現場で創造的に実践され、研究されていたのである。

土方与志編訳「スタニスラフスキー・システム論争」（未來社、1955年）は、1950年8月から翌51年9月まで「ソビエト芸術」誌で展開された論争を紹介している。

同誌の編集部が、当局の意向をくんで、「身体的行動の方法」派を「身体的行動を偶像化し、社会主義リアリズムから逸脱するやから」として批判し、ケードロフ、トポルコフをはじめとしてモスクワ芸術座の幹部や国立演劇大学、全ソ演劇協会の教師たちを槍玉にあげた。

この「論争」を機に、雑誌や新聞で「身体的行動の方法」をめぐって多くの論者が意見を開陳した。日本で紹介され



『タルチュフ』のリハーサル  
(1枚の写真にミザンセーヌの妙!)

た多くの文献もこの時期に発表されたものである。「論争」には約40名の関係者が参加し、結局、当局の路線にそうかたちの「総括」をもって幕を閉じた。

この時期の関連資料は、今日でもきわめて興味ぶかい。この検討は、別の機会にゆずろう。

「論争」のおかげで、スタニスラフスキーの「遺訓」が晩年の弟子たちの独占物ではなくなったのだ。ともあれ、「論争」後に多くの演劇人が妥協的な発言をするようになった。

1953年3月5日、スターリンが脳出血で亡くなった。その頃から国内で徐々にスターリンにたいする批判的な空気がひろまってくるが、56年2月にソ連共産党第20回大会

で「スターリン批判」が打ち出されるまで

は、言論・表現の自由は凍結されていた。その後、文化界はいわゆる「雪解け」の時期を迎え、「社会主義リアリズム」の批判的な検討がはじまり、「形式主義」の汚名を着せられてきたメイエルホルドらの名譽が回復され、

人気を集めるようになる。

「スターリン批判」とその後の「雪解け」によって、「社会主義リアリズム」としてのスタニスラフスキー・システムにたいする関心が、ソ連国内はもとより諸外国でもおとろえてくる。

1958年、レニングラード・ポリシヨイ・ドラマ劇場首席演出家トフストノーゴフが旧ソ連で最も権威があるレーニン賞を演出家としてはじめてもらったことは、きわめて象徴的な事件であった。モスクワ芸術座の出身でないトフストノーゴフが、「スタニスラフスキー・システムを創造的に発展させ、実践している」ことが公認されたのである。

いま、世界では？

「アメリカのアクターズ・スタジオも、ピーター・ブルックも、グロトフスキーも、現代演劇の巨匠の大多数がスタニスラフスキー・システムから出てきているんですね」。

「このところ時間ができたので、外国の芝居をよく見ているんだが」とことわって、友人の年配の俳優が、さきごろほくに、スタニスラフスキーが世界の演劇界で絶大な権威をもっていることを改めて知った驚きを伝えた。

戦前から一貫してスタニスラフスキー紹介に貢献してきた山田肇も、「私自身のモスクワ芸術座のテクニクについての理解は、リチャード・ボレスラフスキーと、マダム



ケードロフ（タルチュフ役）トポルコフ（オルゴン役）  
モリエール『タルチュフ』



〈文献リスト 1〉

書名	著者	訳者	出版社	発行年
1 現代ソヴェトの演技	コヴァリョフ	馬上義太郎	五月書房	1951
2 演出教程	ミローノフ	土方与志	五月書房	1951
3 俳優の仕事	ラポポルト	山田 肇	未来社	1952
4 俳優の創造	スタコフ	山田 肇	未来社	1952
5 舞台的形象	プロコフィエフ	牧原 純	未来社	1953
6 身体的行動	スタニスラフスキー	土方与志	未来社	1953
7 俳優修業の実際	クリスティ	倉橋 健	未来社	1954
8 稽古場のスタニスラフスキー	トボルコフ	馬上義太郎	早川書房	1954
9 スタニスラフスキー・システム論争		土方与志	未来社	1955
10 スタニスラフスキー「俳優修業」解説	クリスティ	野崎韶夫	未来社	1956
11 モスクワ芸術座の演劇修業	ゴルチャコフ	野崎韶夫	筑摩書房	1958

〈文献リスト 2〉

書名	著者	訳者	出版社	発行年
1 演出家の仕事1	トフストノーゴフ	牧原 純	理論社	1970
演出家の仕事2	トフストノーゴフ	中本信幸	理論社	1970
2 スタニスラフスキーシステムによる俳優教育	クリスティ	野崎韶夫・佐藤恭子	白水社	1971
3 演出家の仕事1	トフストノーゴフ	牧原 純	理論社	1983
演出家の仕事2	トフストノーゴフ	中本信幸	理論社	1983

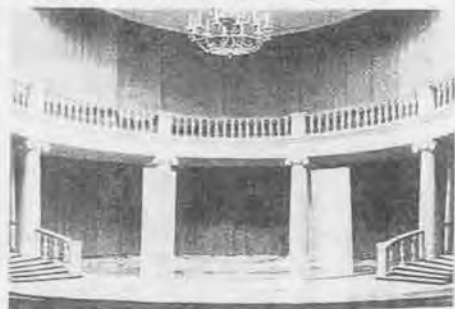
・マリア・ウスペンスカヤとが、一九二六年から一九三〇年にかけて、アメリカの実験劇場で教えたことを基礎にしている」と一九六八年に書いている(『山田肇演劇論』、1995年刊、148ページ)。

日本はもとより、諸外国のスタニスラフスキー紹介書のほとんどすべてが、スタニスラフスキーが最晩年に到達した成果を正当に位置づけていないのである。アメリカを中心とする「メッソード」も、もっぱら前期スタニスラフスキー・システムにもとづき独自に、創造的に発展させ、練りあげられてきたものであり、スタニスラフスキー・システムの総体に依拠してはいないのである。「ブーム」が去つてからの日本では、そうした傾向が顕著である。

ソ連崩壊以後のロシアでは、ワフタンゴフ、ミハイル・チェーホフら前期スタニスラフスキー・システムの「体現者」や、欧米の「メッソード」にたいする関心が強くなっている。最近のロシアの舞台を見ると、自然主義・写実主義・超心理学的なスタニスラフスキー・システム理解が浸透しているようだ。

一九六一年秋にモスクワに留学したぼくは、演劇学校のなかではモスクワ芸術座付属演劇大学、演出家として最も私淑したのは「スタニスラフスキー・メイエルホリド・ワフタンゴフの弟子」をもって任じたザヴァツキーだった。

(グロトフスキーもザヴァツキーに教わった。ルーベン・シーモノフ、リュビーモフ、エフレーモフ……多くのひとの稽古を見せてもらった。ザヴァツキーとは、一九六四年シエイクスピア400年を祝うロンドンでも再会した。かれは、欧米の写実主義的演劇を痛烈に批判してよくに持論を披露した。



『知恵の悲しみ』ゴリーキー大ドラマ劇場(1962年)のトフストノーゴフの装置

「ロシア人の美意識には、自然主義・写実主義はない……ロシアの舞台美術は、みんな抽象だ！」トフストノーゴフは、「すぐれた俳優になれる3つの条件」として力説している。

- (1) 現代性をとらえることのできる「知性」
- (2) 「舞台的眞実」を感得できる能力
- (3) 「即興」の才

「学校で学ばなくても、その能力を身につけているものもいる、数は少ないが」と、トフストノーゴフは付言することを忘れない。

始まりに向かつて—むすびにかえて

かつてのスタニスラフスキー・システム・ブームは、泡のごとく消えた。過去の轍を踏むことがないようにしたい。演劇・舞台のリアリズムとはなにか?という点からスタニスラフスキー・システムを改めて勉強しよう。まず、始まりに向かつて出発しよう。

スタニスラフスキーは、いわゆるスタニスラフスキー・システムにかんする数巻の本を書くつもりであった。「芸術におけるわが生涯」がその第1巻で、その導入部にあたる。第2巻が「俳優修業」第1部(原題「体験の創造的な過程での自分にたいする俳優の仕事」)、第3巻が「俳優修業」第2部(原題「体现の創造的な過程での自分にたいする俳優の仕事」)、第4巻が「俳優修業」第3部(原題「役にたいする俳優の仕事」)である。

久保栄流にいえば、「俳優修業」第1部は「俳優の自己の内部に向かつての仕事」、「俳優修業」第2部は「俳優の自己の外部に向かつての仕事」、「俳優修業」第3部は「俳優の役にたいする仕事」である。

スタニスラフスキーは生前、1936年に「芸術におけるわが生涯」ロシア語改訂・第2版を出版し、「俳優修業」

巻)の第1巻が理論社から刊行され、1971年に第4巻が出て、ようやく「俳優修業」第1部・第2部が邦訳されたのである。

「わが国では、かつて不完全な抄訳と一面的な紹介入門書によって、一時的にスタニスラフスキーブームなるものがまき起こり、そのあげくに泡のように消えてしまった。スタニスラフスキーを批判する場合に、しばしばB・プレヒトの理論が利用された。ところが、まさにプレヒトによって、プレヒトの後継者によって、プレヒトの国でスタニスラフスキーは高く評価され、わが国でのプレヒト紹介の第一人者たる千田是也によって、スタニスラフスキーの『俳優の仕事』が完訳されようとしているのである。」

以上は、「俳優の仕事」第1巻の巻末に付された「編集部より」からの引用である。

同書の「訳者のまえがき」で千田是也が、「ドイツ語版からの重訳という甚だ迂遠な方法をとってまで」「俳優修業」の日本語版をつくらざるを得ない羽目になった理由を書いている。

プレヒトも指摘しているように、「スタニスラフスキーの演劇活動のあらゆる段階での彼の学説と方法を」「彼がその活動過程で、その間違いや不充分さを自分でみとめている点を、彼が最後の段階(ソ連の社会主義建設——千田)で教えたことを」確かめる必要がある、と訳者は述べる。



スタニスラフスキー(左)とダンチェンコ(右)  
(1928年)

第1部・第2部のロシア語版を完成し、1938年にはじめて刊行された第1部の印刷準備にあたることしかできなかった。未完の第3部は、使はずだった資料や、晩年のかれの実践活動の記録などから構成されることになる。

「日本では第1部第2部は訳されているが、第3部がない。書ききれなかったのですね、彼ほどの人でもなかなか。第1部第2部は早い時期にできあがっているが、第3部を書こう書こう、これができればと、おそろくたいへんあせりながら、結局理論的に完成できなかった。自分ではわかったつもりでいて、やはり書けない根拠があったんだね」(久保栄演技論講義、19〜20ページ)。

しかしながら、「俳優修業」第1部・第2部が邦訳されていたとはいえ、英語版からの重訳にすぎなかった。1968年に千田是也訳「俳優の仕事」第1部・第2部(全4

訳者の千田は、プレヒトの真意をつかめないで、スタニスラフスキーの「最後の段階」を「ソ連の社会主義建設」と捉えている。プレヒトとドイツの演劇人たちは、ソ連ではじめて公表されたスタニスラフスキーの「遺言」II「身体的行動の方法」の観点からスタニスラフスキー・システムを再検討する必要があると力説しているのだ。

1953年、プレヒトは、「身体的行動についてのスタニスラフスキーの理論は、恐らく、新しい演劇にたいする彼のいちばん重要な貢献だといえよう。彼はこの理論を、ソヴェートの生活とその唯物論的傾向に影響されながら完成した」と書いている(『俳優の仕事 2』、310ページ)。「身体的行動」の方法は、私たちベルリーナ・アンサンブルのばあいには、なんの困難もひき起こさなかった。(中略)とくにスタニスラフスキー晩年の言葉をきくと、おそらく、全然意識はしなかったろうが、リアリストイックな形象方法の探究という点で、プレヒトとひじょうに似ているような印象を受ける」(同上、311ページ)。

千田にいわせると、「ところが奇妙なことに日本では、一時スタニスラフスキー・システムがあれほどもてはやされ、その入門書や註釈書がやたらに紹介されたにもかかわらず、その主要著作の完訳は、「芸術におけるわが生涯」以外はひとつも本になっておらず、「とくに彼の方法を知るうえで一番大切な」ものは、「著者が晩年に行った補足

や修正がちつとも反映されていない、量からいっても半分  
 そのその英語版からの重訳『俳優修業』第一部・第二部  
 —山田肇氏訳—があるだけだ。」そして、「スタニスラフ  
 スキーブームが跡形もなく消えてしまった今日では」ロシ  
 ア語から直接に訳してくれる「篤志家の出現をべんべんと  
 待っていたのでは、毎日の授業にさしつかえる」というよ  
 うなわけで、ドイツ語からの重訳をひとまず活字にするこ  
 とにした、というのである。

千田是也の訳業は貴重である。重訳であるが、牧原純氏  
 がロシア語版と細かく照合してできあがっている。ただし、  
 ドイツ語版から読みとった意味や感じを生かして訳出され  
 ているという。

「ドイツ語版はドイツ民主共和国における二十年ちかい、  
 一貫したスタニスラフスキー研究の今日の到達点を示すも  
 のだし、それを私が日本での俳優・演出家・俳優教師とし  
 ての四十五年近くの実践をもとに読みとった」という点に  
 も、千田訳の意義がある。

スタニスラフスキーを本気で読みかえし、舞台のリアリ  
 ズムとはなにか？ を考えてみようではないか。

そのためには、まず、資料と情報を集め、整備し、関心  
 のある人びとが自分の実践の結果をもちより、虚心に意見

と経験を交換することこそが、必要である。スタニスラフ  
 スキーもいうように、ゆめゆめ「システム」を教条化すべ  
 きではない。「システム」を学ばない俳優も「システム」  
 の体現者になりうることを忘れてはならない。

ほくは千田是也先生から託された仕事を、まだ、果たせ  
 ないでいる。スタニスラフスキーの『俳優修業』第3部を  
 創造的に編訳する仕事である。先生は、ほくにドイツ語の  
 関連資料を渡し、出版社に交渉したが、まったく採算にあ  
 わないという理由で計画は中断している。ちかき将来に第  
 3部の邦訳（関連資料の邦訳も含む）と研究の、ひいては、  
 新しい観点からの『俳優修業』全体の創造的な改訳版の刊  
 行も望まれる。



### スタニスラフスキー 略年譜

- 1863 コンスタンチン・セルゲーヴィチ・アレクセーエフ  
 (スタニスラフスキー) 生まれる。
- 1877 アレクセーエフ・サークル結成。
- 1883 マールイ劇場の名女優グリーキヤ・ニコラエヴナ  
 ・フェドートワに初めて出会い、彼女の家に出入り  
 する。新しい演劇学校に入るが、3週間もいたか  
 ないで去る。
- 1887 アレクセーエフ・サークルが実兄ヴェ・エス・アレ  
 クセーエフ演出でサリヴァン作曲のオペレッタ『ミ  
 カド』を上演、ナンキ・ブー役で出演。
- 1888 アレクサンドル・フィリポヴィチ・フェドートフが  
 ラシーヌの『訴訟狂』とゴーゴリの『賭博者』(ス  
 タニスラフスキーが主役)を演出。
- 1890 マイニンゲン一座の第2回ロシア公演。
- 1896 オセロを演ずる。
- 1897 6月、「スラヴァンスキー・パザール」でネミロー  
 ヴィチ・ダンチェンコと会談。午後2時に始まり、  
 休みもなく18時間続き、翌朝8時に終わった。新し  
 い劇団・劇場の創設。

- 1898 10月18日、モスクワ芸術公衆劇場(のちのモスクワ  
 芸術座)、スタニスラフスキー演出によるア・カ  
 トルストイ作『皇帝フォードル』で発足。
- 1899 12月『かもめ』をネミローヴィチ・ダンチェンコと  
 共同演出(トリゴリン役)。
- 1900 2月、イブセンの『ヘッダ・カーブラー』演出(レ  
 ヴポルク役)。
- 1901 10月、『ワーニャ伯父さん』をネミローヴィチ・ダ  
 ンチェンコと共同演出(アーストロフ役)。
- 1902 10月、イブセンの『民衆の敵』演出(ストックマン  
 役)。
- 1903 1月、『三人姉妹』をネミローヴィチ・ダンチェン  
 コと共同演出(ヴェルシーニン役)。
- 1904 9月、イブセンの『野鴨』演出。
- 1905 10月、ゴリキーの『小市民』演出。
- 12月、ゴリキーの『どん底』をネミローヴィチ・  
 ダンチェンコと共同演出(サーチン役)。
- 1906 1月、『ジュリアス・シーザー』のブルータス役。
- 1907 1月、『桜の園』をネミローヴィチ・ダンチェンコ  
 と共同演出(ガーエフ役)。
- 1908 3月、イブセンの『幽霊』演出。
- 1909 『疑いと探求』の時期始まる。
- 1910 5〜10月、メイエルホリドと共同で『ボワルスカ

## 「今日の創造のために」

## 西会議「リアリズム研究小委員会」

会場 大阪 旅館「あい象」にて 日時 1997年5月11日午前10時～午後3時  
 パネラー 熊本 一(劇団大阪) 猿渡公一(福岡現代劇場) 藤沢 薫(劇団京芸)  
 司会 栗原 省(劇団いこら)

## 討論に参加された方

赤松比洋子 (きづがわ)	阿部 好一 (演劇評論家)
岩井 里子 (月曜会)	小笠原町子 (関西芸術座)
岸本 敏朗 (四紀会)	清原 正次 (大阪)
久語 孝雄 (劇作家)	楠本 幸男 (演集和歌山)
合田 幸平 (どろ)	清水 巖 (劇作家)
田中 実 (息吹)	中谷 稔 (劇作家)
長谷川伸二 (劇作家)	畑野 稔 (こじか座)
早川 昭二 (銅鑼「演劇会議」編集長)	
藤原 重孝 (トラム)	栗原 省 (文責)

ヤ街の演劇スタジオ」。

1906

10月、ゴリキの「太陽の子」演出。

1月、モスクワ芸術座が最初の国外巡演に出发、まずベルリンへ。3月、ドレスデン、ライプチヒ、プラハ、ウイーン、4月、フランクフルト・アム・マイン、カルルスルエ、ヴィスバーデン、デュセルドルフ、ハノーヴァー、ワルシャワ、5月3日帰国。公演演目「どん底」「ワーニャ伯父さん」「皇帝ヨードル」「三人姉妹」「民衆の敵」。

自信喪失におちいり、深刻な自己反省。

1907

フィンランドで夏の休暇、「システム」の探求始まる。2月、クスト・ハムスンの「人生のドラマ」演出。

12月、アンドレーエフの抽象的、非現実的な戯曲「人の一生」演出。

1908

4月、ゴードン・クレীগとの文通始まる。

1909

12月、ツルゲーネフの「村の一月」演出(ラキーチン役)。

1910

3月、オストロフスキーの「どんな賢人にもぬかりはある」にクルチツキー役で出演。

1911

12月、モスクワ芸術座でゴードン・クレীগ演出「ハムレット」初演。

1915

3月、プーシキン作、ネミローヴィチ・ダンチェンコ/A・エヌ・ベヌア演出、ア・エヌ・ベヌア美術「モーツァルトとサリエーリ」にサリエーリ役で出演。

1920

4月、バイロンの「カイン」演出。

1922

3月、モスクワ芸術座のアメリカ公演。

1924

「芸術におけるわが生涯」(『My Life in Art』)のアメリカ版。

1926

「芸術におけるわが生涯」の改訂・ロシア語版。

1930

「オセロ」の演出プラン。

1932

ゴリゴリ作、ブルガーコフ脚色「死せる魂」演出。

1935

オペラ・ドラマスタジオ創設。

1936

「俳優修業」(第1部) (『An Actor Prepares』)のアメリカ版、「芸術におけるわが生涯」のロシア語改訂・第2版。

1938

「タルチュフ」のリハーサル。初演を前に逝去。「俳優修業」(第1部、第2部)のロシア語版。

## (六) 学校公演で「受ける作品」の条件

— 関西芸術座の場合 —

司会 関西芸術座の場合はどうですか? 「演技におけるリアリズム」の問題などについてどんな意見が交わされていますか?

小笠原 うちはまだ……芝居のデパートみたいなものから……(爆笑)。だってねえ、ほら団員が110人もいるでしょう。うち演技部が80人ぐらいで、その中で創立メンバーが18人おられますが全部60歳をすぎているんですよね、当然。ですけど戦力の中心は20代30代の人たちで、彼らがいなければ高校公演や中学校公演はまわれないわけです。

うちは創立以来ずっと中学校公演・高校公演は続けてきているし、そこでいちばん問題になってくるのはまずそのレバのことです。で、学校で本当に受け入れてくれる作品というのは「再演」が多い……ということ。は要望が多い……ということでもありますが、「大阪城の虎」とか「奇蹟の人」とか、ですね。

で、それはなぜかと私なりに考えれば、脚本(ほん)が非常に緻密に、人間の生き方とかぶつかり合いとかが大変よく書かれている、ということと、それから展望が

ある……ということですね、やはり。……学校の先生がレパトリーを選ぶわけですから。

ですから「よく書かれていて」「展望があつて」「そして生徒が舞台そのものに魅（ひ）き付けられる作品」……あまり「啓蒙」したり「お説教」したりするのはなく、演劇として完成度の高い作品がやっぱり長生きしているなあと・私自身、ずーっと中学公演・高校公演をやってきた者として自信をもって言えますね。

### (七) 坂本真貴乃作『木の咲くとき』をめぐる新旧団員の評価

小笠原 ですが「一般公演」となると、これはもう……。(笑い)でも、この頃「関芸」も変わりましたよ。まだまだ変わらばえせんといわはるかも知れませんが。

幹事会というのがありそこからレパなどだされるのですが、幹事も世代交代して……いちばん古いのが私ですけど他はみんな若い人たちで、これがもう本音で何でも言うてやろうという、ええ傾向になりましたね。(笑い)これまではほら、関芸を創立した指導者の方が幹事会をやつてはつたでしょう？そんな人の前ではあんまり言われへんかったでしょう？われわれも……ね。

それが世代交替して、今では創立のころ赤ちゃんやっ

「新しい作品（『木の咲くとき』）を座内の新しい作家が書いたことは大変喜ばしい。またほとんどのお客さんが好感をもって受けとめてくれて、それはそれで良いんだけれども、やっぱりテーマの抽出があまりである。テーマ性が弱い」ということですね。

「……決して（反戦劇にしろ）などというのではないが、掴み出してくるものが、非常に弱いのである……。」と、リアリズムの洗礼を受けた人たちは言うのですね。

演出している子も三十代の若い団員でね。でね、「これでええねん」と言い切るわけですよ。

「そんなリアリズムやらシュールリアリズムやらやこしいこと私はやったことなかったし、この作品は生も死も同次元であいまいに演じられるところが素晴らしいのだ。そういう演出をしたから、若いお客さんも阿部さんも清水さんもええていうてくれる（笑い）んやないか！（爆笑）」と実にはつきり言うてるんですよ。

私もどちらかと言うとあれはあれで良かったと思うてますが、ただ古い人の評価で若者にとっていちばん屈辱的と受け取られた言葉は、

「観客はみなええと言うとるけど、あれは本当に感動したんではなくて、感情を刺激されたのに過ぎない」という評価ですね。

た人が執行機関の三分の二ですから、それはもう自由に忌憚のない意見を出しあつて、どんどん新しい作品が出てくるようになりました、横内謙介とか鈴木俊郎とか……。特にスタジオ公演なんか、ついこの間も『木の咲くとき』（坂本真貴乃作・大井敦代演出・3月19日から23日・関芸スタジオ）をやつて阿部さんや清水さんにもほめてもらいましたよね。(笑い)そんな時、私が司会して「ほれ、阿部さんもええ言うてるやないか、清水さんもどこそこがええちゆうて褒めてくれたでえ」ちゆう具合に（笑い）褒めまくつて皆をええ気分にするんですよ、ぱーつと。(笑い)さ、そして、今度は古い人が、「お前は何や、若者の味方みたいなことばかり言うてほめあけて……あれはリアリズムから言うて全くない作品で、ナチュラリズムに過ぎないではないか」つて云うてね、古い人が……。そこが今論争になつてい

んで、ね……あの作品は生と死の世界をあつたつてい

るんですが、「生と死の世界が同次元でだから演じられて

いるのはあれは何やね？もつとシュールリアリズムの手法があるやないか……。なんて言うの、古い人は。そんな、シュールリアリズムなんて若者は全然知らへんがな。

結局その古い人たちが言うのは、

藤沢 面白いですねえ。そういう議論がたくさんあつた方が

がいいと僕は思うねえ。阿部 お話聞いててね。そんなこといったら、例えばワイ

ルダの『わが町』なんか死んだ奴が生きた奴と同時に

出てきて平行してたら話合いますよ（三幕）。

そういう作品はさらにありますよ。

小笠原 だからああいう、死んだ人が黒い傘さしてお墓の

とこで……。ああいう手法をとれつていう人がいるんですよ、『わが町』みたいな……。

阿部 新しい人の作品で混乱が起ころるのはその辺だね。僕

ですが、解説めいたことはできて「わかつたか？」と言

えば、現在若い演劇評論家も含めわかつてへんのやない

か？しかし間違いなく若い人の作品から生き生きした刺

激を受けたら、ありきたりの常識とか既成概念にない劇

世界を発見することがありますよ。感情の刺激」つ

てのは大変重要な要素ですからね。

清水 僕はね。若い書き手の新しいスタイルの作品といわれるのを見せてもらって、最後は案外浪花節に終わっているのがまことに多いんですよ。スタイルは新しいが中身は古いのかなとも思っていたのです。ところが、あれ（『木の咲くとき』）はね、何かそういう点では新しさを感じたね。

幽霊とか死人を芝居に出すのは昔から当たり前のことですが、仏家でいう四十九日ですか？死者がまだあちらへも行かないで、あちらとこちらをフラフラと途中でさま迷っているという世界を描いたものですよ、あの作品は。その着眼点が非常に面白いと思った。こちらへ帰ることはできへんとして、あちらへ行くことに価値があつて行きよる……ああいう描き方がすごく面白かったね。「よく書けた作品」ではないが、新鮮である、という点と作者が求道的な精神を持っているという点、人間を追求しているような精神がある作品だ。

### (八) 芝居のリアリテイは「観客との関係」で うまれる — 四紀会の久語さん —

司会 ええと、だいぶ関芸の『木の咲くとき』をめぐって「古い人」と「若い人」の作品評価の違いが話されてき

自分の朝起きて夜寝るまでの、あるいは職場での働く話題とか緊張感とか、怒りとか哀しみとか、そういうものが創作の動機となっていたんですよ。

そしてまた、それを見た観客も、見たことで自分の感情とか認識とかを増幅されたんでしょうかね。だから、芝居を見ることで、同じ道を進んでいる仲間がたくさんいるという連帯感を深めたり、自分の気持ちをさらに高揚させ増幅させる、といったような、そうした観客と舞台をつくる側との関係も有機的だったと思います。

ただ、その関係が今は失われてしまった。失われてからも、観客と演劇をつくる側との共感、共通の意識がそこなわれているのに、それがあるかのような観念的な作品づくりをずるずるやっているものだから、何か虚ろな舞台になつてしまふ、……ということではないか？

どうしたら観客との緊張関係を保持できるか？そういう、今の観客の生き生きとした生活意識や感覚を自分が共有できるか？ということに尽きるのかなあ………と思つています。「生活者としての感性の問題」というか、何にリアリテイを感じ、どういう怒り、どういう喜びや感動を観客のそれとして受けとめ、書けるか、という点。

それと観客の側からどういう舞台にリアリテイを感じるかということ、一つは内輪話で恐縮ですが、昨夜家内と娘がある芝居を見て……それはなかなかウエルメイ

たのですが、作品を読んだり見たりしていい方にはちよつと入りにくいところがあったかと思ひます。

四紀会の久語さん。最近では神戸の阪神大震災直後に大空襲と震災をダブらせて書いた久語さんと桜井さんの作品『火の華・サイタ』は西日本劇作家の会編著『ドラマの森』の第二集に掲載されていますが、あれを書きながらどんなことをお考えでしたか？

久語 別にリアリズムのために芝居を書いたわけではありませんから………（笑い）

自分が書きたいものを書いて、で、書いたものがリアリズムであつたとかなかったとか批判されるんでしょうが、ただ、今は政治的な内容を持った芝居は排除され、否定されているような雰囲気議論……。

藤沢 それは違います。

久語 そうですか。ただ、僕らが芝居を始めた頃は「社会を変えるため芝居をしたい」とか、そういうことを思った若者はずいぶん多かつたですよ。だから……。

藤沢 僕は今もそう思ってます。

久語 いえ、若い人が、です。そういう世の中を変えるために芝居をやりたいという共通の思いばかりで芝居づくりをやってきたため、作品の内容の検討や作品としての完成度に対する甘さが生まれたのかも知れません。でもそういう……生活……でもありません。だから

ドだが、おもしろいけれど何ということはない芝居です  
が……

娘の方は、

「内容がどうでも、楽しければ芝居だ」

と言ひ、家内は、

「内容がないものなんか芝居じゃない」

と反論し、二人でおそくまで飲みながら大喧嘩したらしいんですね。で二人とも泣いて帰ってきましたね。私は仕方なく寝た振り……（爆笑）。

もう一つは、今岸本さんが書かれている作品で、

「被災者の仮設住宅に住んでいる爺さん、婆さんが生田神社の神様の伝手で本家の伊勢神宮を頼つて行つたり、さらに地獄を遍歴したりして自分らの現状を何とかしてくるよう頼むのですが、神も仏もダメ。そこで田中角栄に出会い、田中角栄なら即断実行型だから角栄の実行力にたよつて我々の生活を建て直すことに希望を託す……」

といった内容の、パロディ風の作品を今論議しています。暗い、出口がない被災後の現状に思い切り荒唐無稽でエネルギーを切った口で突破口を開きたい、という作意からですが、完成してみないとわかりませんが、私など角栄という個人名が出てくると……「即断実行型の現状打破の起爆力」とか「神戸の状況に展望を」という



後列左から 東川宗彦・阿部好一・熊本 一・広島友好  
芳地隆介・楠本幸男  
前列左から 久語孝夫・清水 巖・栗原 省・森安二三子

## 台風の中、熱い討議

より、こっちの歴史認識の方によく左右されて拒否反応を感じてしまいます。ですから作品がリアリティを持つかどうかのキャスティングボードを握るのは、あくまでも作品と劇団、舞台と観客の関係にある……。当然のことですが……。合田さんもいいましたが「観客の問題」をもっと大きく論議に乗せたいと思います。

どっちにせよ作家は「書きたいものを書き、書きたいように書く」しかありません。

こういう言い方は逃げ……。かな？

小笠原 私は最近、もっぱら観客の側でようけ芝居を観るんですわ。この安月給で8万から9万観るかな。で、ようけ観た中で最近いちばん心を打たれた作品は、今度8月にやらはる「五十年目の戦場」(註)でした。

あれは「ああ、リアリズム演劇会議に参加している以上、こういう仕事を私はせなにかんない」と思いましたね。あの感動はなまぬるい感動ではなくて、ほんまに自分は行動を起こさなにかんない、というぐらいすばらしかった。

厳密に言うたら本当のドラマとは言えないでしょうし、役者も市民参加で、朗読という形式をとっています。構成・演出・照明・音楽も非常にすぐれていたと思うしね。

私らが演劇をやるといふことは、行動を起こすといふ

ことのためにやっていると思っているわけだね。行動を起こすといふことは「今何をやらなあかんか？」が優先してこないかんと思うんですよ。

だからうちの若い人らが成井豊とか横内とかいっばい出してきたも、その中で「今、関芸は何をせんらんか」という論議を、常に現実とからみあわせながら、自分たちの生き方の問題としてやっていたいと思っています。

午後からの討議では「五十年目の戦場」がどうして生み出され、どう評価されているか？そんな論議もやってほしいと思います。

司会 時間がまいりました。まだ発言をいただかなかった方のほうが多いのですが、午前中は「リアリズム演劇」をめぐって否定し、克服すべき点を中心に、問題の所在を探ってきました。

午後は小笠原さんからすでにご指摘もいただきましたが、「これからの我々の創造」をめぐって論議をお願いします。

(註)「五十年目の戦場・神戸」

作・車木蓉子／構成・梶 武史

### 「西日本劇作家の会」第15回総会

7月26・27日 奈良・生駒山荘

西日本劇作家の会第15回総会が、7月26・27日の両日にわたって、奈良県の生駒山荘で開かれた。折しも台風が近畿地方を直撃し、列車の運休、飛行機の欠航、山荘までのロープウェイの運休など、悪条件ものともせず、会内外から11名が参加。

また、講師には演劇評論家の阿部好一さんを迎え、「井上ひさしをめぐって」という演題で講演していただいた。今回、研究台本として取り上げられたのはベテランの2人、清水巖「玉座ものがたり」、東川宗彦「老人と赤いポスト」、そして若手として今、絶好調の、広島友好「ちとせ、ふたたびの」の3作。栗原省の新作「姉弟」も研究台本にあげられていたが、時間の都合で討議できなかった。この作品は小品ながら、現代の家族の危機と希望を示唆する、栗原氏の久々の新作だけに、またどこかでじっくりと研究したいものだ。

以下、研究台本3作の討議内容を作品のあらすじを含めて、久語孝雄さんにまとめていただいた。

## 〈戯曲をめぐる〉

### 清水 巖 『玉座ものがたり』

遊牧民と農耕民をおさめる王ラーバーは、將軍バグツシユを派遣して、反乱した遊牧民を制圧させる。凱旋の日、遊牧民の王妃とその息子ケトラは、草原の王の娘ムーサーの願いを受け入れ、命を助け召仕とする。平和を望む王は、一つの神を信仰する理想主義者サドウルをもって平和を実現せんとして、従来祭司の意見を退け布教を許す。やがてムーサーとケトラは結ばれ、子供も生まれる。

王は、国の軍隊を3つに分けてケトラと前妻の子シャバニ、バグツシユの三者に分けてお互いの牽制をもって平和を維持しようとする。しかし、すぐにケトラとバグツシユは気持ちを通じ合い、ケトラはかつてシャバニが恋した娘クリナを操り、判断を誤ったシャバニは、サドウルを祭司の部下に殺させ、軍を草原に向かわせる。草原での戦いは逆転、ケトラの軍の大勝となるが、ケトラは祝いの席でバグツシユの手のものに殺される。その勢いでバグツシユは王の警備隊も攻め、王も殺害される。しかし王座についたバグツシユはクリナの盛った毒薬で死に、王国はケトラとムーサーの子によって人の英知に希望を託して、受け継

がれることになる。

「作劇がうまい」「性格がかき分けられている。民族、権力、平和と意図もわかる」「要所にいいせりふ。バグツシユがおもしろい。権力と宗教の問題、平和の問題を座標軸にして作者の危機感がある。なにが平和なのか、なにが自由なのかが開示されている」「ラーバー王の苦悩を照らし出してほしい」「一幕では王が主人公で、二幕ではわきになる。サドウルが殺されて平和の構想が崩れるが、王を主人公として通した方がいいのでは」。

作者はおりおりに発言され、「遊牧民と草原の民の相克を神戸の演劇祭で上演、評判をとった。当時は平和を歌いあげた。その後、日本の戦後が、なにか平和でありさえすればそれでいいという風に見えてきて、民主主義の危険を感じた。いちばん言いたかったのは、『平和も危ないんだ』ということ。核兵器で滅亡することは遠のいたが、豊かさが滅亡させる。平和を真剣に考えなければと思って書いた」「人間は医学的には非常にわかっているが、思いはどうなるか」など作品の意図を話され、また、問題を提起された。

### 東川宗彦 『老人と赤いポスト』

主人公は、手作りの赤いポストを組み立てる。そこで自分宛の手紙を投函して、局員が来るのを待ち、現れた郵便作者から作品について、三公社五現業が、日本の社会を通過する過程の出来事として、どうしても書いておきたかった。成田委員長も、NHKの委員長も、人妻と心中した話もすべて「実話」と説明される。

「天衣無縫で、内容が深い、アイデアが豊富。労働運動が激しかった時代を感じる」「奇妙におもしろい、書き方も自由奔放」「客の立場で言う、当時の組織が実名で出てくるが、一般の客にはわからない」「不条理風のおもしろさがある。内容が堅く、回想場面も長い。老いのこと、死のことがあって、身辺の整理という状況のなかでビールを飲みながらゲームをしているようなおもしろさがある」「愛憎こもこもものところがあり、郵便局が好きなのところがあって、愚痴みたいなのところもあつたりおもしろい、エピソードの入りかた出しかたは、もうひと工夫」など意見がだされた。

### 広島友好 『ちとせ、ふたたびの』

私小説家嘉村磯多の未亡人ちとせは、学生の下宿人を置く。下宿人の田原和也は卒業してここを出ていかなければならない。ちとせと和也は普通の関係ではない。卒業式を終えた和也は旅に行く。ちとせと養父は、磯多の思い出を話し、前妻の子どもに心を注いでくれたちとせに感謝する。

局員にいやみを言う。手紙には「猫は大嫌いなのに5匹もいてる。そのわけは、心の優しいお嬢さんの置いていった猫を引き取って、私は地獄と鬼のところでず」とか、「冷凍パンをチンして暮らしています」とかが書かれている。そして、今度は自分の家の前でポストを作り、郵便が配達されるのを待つのである。現れた郵便局員には苦情を言う。「なんぞ郵便局に恨みでもあるのか」と食ってかかれ、「ある、ある、あるんじや」と泣く。こうして主人公の思いの丈が語られる。ええ雰囲気職場だったのが、当局の介入が始まり、気まずい雰囲気。事情があつて「全郵政」に移ると挨拶もしない関係に、仲間がノイローゼになる行方不明になるなどして、また「全通」に。今度は「全郵政」から総攻撃：自転車はパンク、ロッカーには痰唾。局長に訴えると、自ら努力せよ。机の脚を蹴って懲戒免職。「人間一生の問題なんや。なんと思てくさるね」と泣く。「おれの人生はごみ屑のようになってしまった」。

気がつく郵便局員はいない。残りの物語を手紙に書いて、ぜひ思い出していただきたいと、人妻に恋した男の話を書いて、自分のポストにまたもや投函するのである。そして、郵便局員をいじめ、NHKの委員長の「日本が危ない！」の話や、社会党の成田委員長の「君たちは正しいのだ」と言われた日々を思い出し、「いま死ぬべきか？もうちょっとビールを飲んでからにするべきか」と悩むのである。





## 全り演東西合同總會ひらく

●1997年8月29日(金) 午後1時～4時 ●シーガル会館(神戸)

### 16年の全り演の歴史で 初めての合同總會です

今年の總會は、全り演16年の歴史で初めて東西合同で開かれたもので、画期的といえます。

参加劇団は、東会議23集団、西会議21集団の合計46集団に個人会員6人を加えて、参加者は74人にのびりました。総会議長は岩井里子(月曜会)、石垣政裕(仙台小劇場)のお二人。

フェスティバルの開催中もあり、地元の高校演劇部による公演と重なるなど、少々慌ただしく、それぞれの報告、問題提起、発言などを受けての討論は不十分でした。しかし、1年をふりかえり、今後の方針を決めるうえでは意義のある總會になりました。

(文責 大八木克樹)

しかし、ちとせは「ただもう自分の罪が恐ろしい」と言い、養父は「磯多と相性が合わなかったんちゃ」と慰める。

和也の母が、ちとせを訪ねてくる。銀行への就職が内定していること、縁談のあることを打ち明けられる。和也は実家には寄りつかず、耳を貸さない。「母が子を思う気持ちを話して下さるだけでも」と頼まれるのである。数日後、旅から帰ってきた和也は、ちとせに磯多の原稿や、資料を次々見せられる。が、結婚を申し出る。ここに住んで家は帰らないという。銀行の話を通るための旅行だったのだ。ちとせはここは引き払い満州に行くつもりだと言い、和也は母の差し金だと思ふ。

ちとせが「なにかもいやになった」と言えば、「あの人が忘れられない」ので「逃げていく」と受け取る。和也は磯多の原稿を目の前で破ってくれと言いだし、ちとせは破れない。「この手も、この身体も、あの人の代わりだったのか」と迫られる。和也の手はついにちとせの喉にかかる。激しい吐き気にそれがつわりであり、自分の子どもが宿っていることを知る。…こうして、満州は2人にとって希望の地となるのである。

「非常にうまい。東川さんとは別のうまさだ。対話劇で事件は舞台の裏で起こる。上演すると結果が気になる」ところ。「嘉村磯多という小説家は、見栄っ張りや暗い性格、自分に閉じこもって書き続けた人で、劣等感などを赤裸々

に書いた人だ。ちとせは磯多に尽くした人だ。この芝居では、和也と出会いの『抱き合う』ところから、『つわり』へと、ストリートに展開していく。最終的には満州に逃げようとするが、見事に進めている。非常にいい芝居をつくっている。「新派調を進めていって、最後は新派でないところを見せるが、完璧なくらいにできているので、この作り方に広島さんがなじんでしまおうとかえって心配だ」「磯多の影がもつとほしい」「今回の研究会の収穫だ」などの意見が交わされた。

作者は「ちとせは天涯孤独な人で、磯多を頼って生きていた人。駆け落ちして満州へ行ったのは事実」「頼まれて書いたものだけに、モチーフに弱さがあった。磯多は現地でもほとんど無名で、磯多を書くよりも、どこにでもいるちとせを書く方が、より広い人に共感されると思った。本当のちとせはこうではなかったかも知れない」などの意見を討議のなかで発言された。

(久語孝雄)

## 議長からの問題提起

〈西会議 仲武司議長〉

現在、国の政治は、ゼネコン奉仕やバブル崩壊を引き金に、財政擁護によって起こされた金融不安などの経済破綻を、多額の税金、新たな収奪など、国民的犠牲による辻褃合わせに躍起となっている。こうした社会状況の中で、私たち演劇人は何をなさねばならないのだろうか。

私たちは東・西リ演創立以来、リアリズムを標榜してきた。現在リアリズムといえは否定的に使われることが多い。しかし、リアリズムとはきわめて多様で広いものである。具体的な作品を通し、繰り返し討議を重ねていく習慣が大切なのであろう。全リ演の活動の基本的な柱として今後論議していきたいものである。

昨今、演劇界では国際的な交流が日常化している。京浜協同劇団、劇団あしづえ、劇団銅鑼、劇団上野市民劇場等の国際交流は演劇会議にも紹介されている。ただ、劇団として海外公演をすることは、見聞を広げ、創造的、技術的、経験交流の意義も大ではあるが、同時に全リ演参加の劇団が、地域を土壤に生まれた舞台を通じて、海外の人々と肌

をふれあい、日本国民の生活の息吹や真実を伝える、文化、演劇による国民外交でもあろう。あるいは平和を願う演劇人外交といえは言い過ぎだろうか。

全リ演として、演劇による国際交流の有効な活動を意図的に図っていきたいものである。

〈東会議 こばやしひろし議長〉

演劇にはいろいろな流派があつていいと思う。いろいろな流派から刺激を受けることも大切である。二者択一で全否定してはいけない。そこから創造者としての私が刺激を受けるのであつて、私の後ろには私の観客がいるから、その刺激が私の観客との対話に発展し、対決となり、その中から私の新しい創造が生まれればと思う。

現在、日本の演劇は「どうだわかるか!」というような上から見るようなものになってきている。日本は金が手に入るなら方法をいとわない文化になってきている。これは戦後50年、一貫して追求された経済主義、それによつてもたらされた効率主義、合理主義、自己中心主義による人間崩壊の結果である。それをそのまま見つめる以外表現する力はないのだ。リアリズムに頼る以外に方法はないのだ。そして率直にその苦しみを観客と分かち合うことが私の思想であり表現なのである。

私たちの集団はそれに共鳴し、私たちのメッセージを観

客の心の琴線に響かせるために集まっているのである。どの創造がより多く響かせるか、何をいおうがそれがすべてである。それ以外ない。

両氏の問題提起は、日本全体が抱えている病魔をどのようにならちで克服すべきか、演劇によりどのように関わっていくかを考えさせるものであった。

## 1年間の報告と活動方針

城谷護事務局長

加盟のしおりを作り運動をしたところ、今年も全リ演の仲間が3集団増えた。東では福井県武生市の劇団たけぶえ。西では2集団、神戸市の神戸ドラマ館ボレロ、もう一つは京都府の自立の会。私たちは3集団の加盟を心から歓迎する。一方、東のアポストロフィーはこの数年活動しておらず、会費も未納のため退会扱いとした。これにより休会集団を除く加盟集団、東は37集団、西は30集団、合計で67集団、個人加盟は10名となった。

今年度はリアリズム演劇論についての論議が西会議を中心に行われたこと。神戸でのフェスティバル開催に神戸の仲間たちの奮闘によりこぎつけたこと。全国の仲間消費税反対声明を新聞、テレビ、政党などに送付したこと。N

PO法案の制定に向けPAN（芸術文化振興連絡会議）とともに集会、署名、国会請願などの多彩な活動を行ったことなどが報告された。

### 〔1998年度の活動方針〕

- 地域劇団としての特色を生かし、オリジナル創作劇を生み出そう
- 劇団間の交流、支援をしあい、仲間劇団の良さを生かそう。
- 「演劇会議」の新しい編集、発行体制を支援内容も充実させよう。
- 全リ演加盟劇団を引き続き増やそう。
- その他、関連団体とともにNPO法案の制定、憲法改悪反対、消費税撤廃なども活動していこう。

# 大成功だった 全日本演劇 フェスティバル IN KOBE



1997年8月29～31日 神戸 アートビレッジセンター、シーガルホール

梶 武史(実行委員会事務局長・劇団四紀会)

第7回全日本演劇フェスティバルは、実は難産だった。開催地は若者に人気がある神戸と早くから決まっていたが、震災のために会場も宿泊所もまったく目処が立たなくなったのだ。

だが議長団会議では神戸開催案を捨てなかった。むしろ何なんでも神戸で開催しようということになった。阪神大震災を一地方の不幸なできごとにと終わらせずにそれぞれの街の運命を重ねて考えよう、被災地の仲間を激励しよう、との思いが溢れた。私もまた、「文化を街づくりの基本に据えることが震災の教訓であり、「地域に根ざす」演劇を語り合うには、いま神戸がもっともふさわしい」と考えていたので、あらゆる可能性を探って奔走した。

1年延期して、ようやく宿泊所に目処が立ち、会場も2箇所を移動する不便を我慢して予約した。不透明だった公的助成も、神戸市の芸術文化活動助成制度に希望をつなぎ、芸術文化振興会へは城谷事務局長とともに2度も上京し陳情した。今春になって神戸市の助成が内定し、芸術文化振興基金の方は出演劇団の一部に内定通知が届いて、やっと愁眉を開いた。

参加費はこばやし議長の大声と城谷事務局長の笑顔で決まった。2泊3日で16000円では宿泊料で消えてしま

## 特別報告

### リアリズム演劇論について

栗原 省

例年の総会ではここで特別講演が行われるところですが、今年は東西合同ということもあり、最近、西会議を中心に「演劇会議」紙上でも話題になっているリアリズム論の総括が栗原氏により報告された。これまで展開されているリアリズム演劇論に対する反論、意見がもっと必要であり今後も続けて論議していきたいとの意見がだされた。

### 「演劇会議」の発行所移行について

赤松比洋子編集委員から、「演劇会議」の発行所の西会議移行が、「演劇会議」発行の手引き」とともに報告され確認された。東会議の編集体制と異なるため全国のみなさんの協力を得て頑張っていきたいとの報告であった。

## 劇団活動報告

各劇団持ち時間約10分と短縮して行われた。劇団道化は児童劇を通じた学校教育の問題点、ドラマシアターどもは創立15周年を迎えた活動状況、劇団あしぶえは八雲村自治

体と一体となった活動状況を報告した。最後に、「演劇人会議」の最近の動きと、その地方版とも位置づけられている仙台における気になる動きが報告された。

1. 西会議 劇団道化
  2. 東会議 ドラマシアターども
  3. 西会議 劇団あしぶえ
- 東会議 演劇人会議について

### 今回のフェスティバルについて

梶 武史フェスティバル事務局長

今回のフェスティバルは大震災のためにやむなく延期。一時は他都市での開催が検討されたりと数々の困難があったが、全国の仲間の熱い励ましとその後の関心、同時に災害にもめげず奮闘する地元の兵庫の諸団体の協力でここまでこぎつけた。今回のフェスを私たちのリアリズムを互いに深め、確かめ合う実りの祭典にしよう。

(1)

うので、と私。参加者の懐具合を最優先に考えるべきだ、とこぼやし議長。沈黙した私を氣遣って全劇団にカンパを訴えよう、何とかなるさ、と自信にあふれた城谷事務局長。やがて全国からカンパが相次ぎ、実行委員会も連日駆け回って運営経費もどうにか見通しがついた。

いつもは難航する出演劇団は意外にあっさり決まった。東も西も、神戸開催へ思いを馳せてくれたのだろう。最終決定した劇団以外にも実はいくつかの劇団が名乗りをあげてくれたのだ。高校も3校に増えた。こうしてバラエティに富んだ力作、話題作が勢揃いした。

あとはどれだけの間が集まってくれるかだったが、杞憂はたちまち吹き飛んだ。締切日以降も続々とFAXが届いて予定していた宿泊所では溢れてしまう。結果、3個所の分宿になってしまったが、追加したホテルでは宿泊料金だけで会費をオーバーするありさまで、嬉しい悲鳴であった。

実行委員会は4月から本格的に始動した。委員長には西会議の仲議長。西の事務局と兵庫ブロック5劇団が、企画・渉外、舞台スタッフ、申込受付と宿泊所折衝、交流会、広報、駐車場確保を分担し、万全を期した。この活動のなかで「神戸ドラマ館ボレロ」が新加入した。

(2)

こうして幕が開いた。

在なのだが、エレベーターが狭くて大きな張り物は4階まで人力で担ぎ上げるのが辛い。この会場は初日の地元公演以外は劇団はぐるまに使ってもらって屈強の男たちの人海戦術に期待した。

高校の部の開会式は午後1時、仲議長の挨拶。ちやうど東西合同総会と重なったために総会参加者は高校の舞台を見損なうことになったが、その水準の高さには毎年驚かされる。一時の観念的な舞台から様変わりして3校ともに見応え十分。こりゃ油断がならない、と思った全り演の仲間も少なくないだろう。



市民がつくる朗読劇「五十年目の戦場・神戸」

夜はシーガルホールで、市民がつくる朗読劇「五十年目の戦場・神戸」。応募した市民が出演して専門家が裏を支える舞台である。震災1周年に上演し、その後も奈良、東京で上演したり、全国から自主上演の申し出がたえまない作品だ。神戸をほんまの文化

メイン会場の神戸アートビレッジセンターは、戦前までは映画館や芝居小屋が軒を連ねる神戸第一の繁華街だったが今はその面影もない。そこで神戸市が、若者のための演劇センターを

設けて街の活性化を図ろうと、一石二鳥を狙った建物である。1階がギャラリーと軽食コーナー、2階が

ホール、3階が会議室、4階がリハーサル室と事務所、そして地下が稽古場と小さなシアターという構造だ。

2階ホールはロールバック椅子(電動格納式)144席、パイプ椅子88席の計232席、すべての椅子を格納すれば平土間303平方米で舞台と客席を自由に作れる。仮設舞台を組むと両袖が窮屈だが、照明・音響設備は申し分がない。フェスティバル規模では手狭だがいい建物だ。助成制度制定といい神戸市は時々いいこともする。今回これらの設備をフルに使用した。

もうひとつの会場はシーガルホールで収容人員450名。神戸駅から至近距離にあって使用料も安くて貴重な存



歓迎風景

都市にする会が2日前から上演し、3日目にフェスティバルに上演参加した。

(それぞれの劇評は講師3氏が寄稿されるので省略)。

一般の部の開会式は、観客には一般市民が多いことを配慮してこの作品の上演後で、こぼやし議長が挨拶。地元の兵庫県劇団協議会から歓迎の辞。開会式の後、番外編の劇団どろ稽古場で「眠っちゃいけない子守歌」。自由参加で交流会つきの有料だが満員の盛況だったらしい。

宿泊所のタワーサイドホテルはメリケン波止場にあつて、窓からの眺望がすばらしい。朝もやに佇む六甲山脈と船舶のシルエット、遠く大阪湾を隔てた生駒山系から昇りゆく朝日、やがてキラキラと輝きはじめる海面、と神戸港の早朝は絶品なのだ。芝居屋は朝寝坊が相場。猫に小判。早くも二日酔いで朦朧とした男どもがいる。

そんな眠気を覚ましたのは京浜協同劇団の太鼓だ。ホテルの傍、通称アベックの散歩道の一隅で威勢のいい音が響く。やがて郊外にある仮設住宅の慰問に出發していったのだが、仮設の老婆から「あんた方のことは一生忘れへんで」と言われて感動したそうだ。嬉しい。日程上、舞台に出演してもらえずに心苦しかったが、神戸に来てもらってよかったとつくづく思う。

朝食をすませるとメイン会場のアートビレッジセンターへ10分間の電車通勤だ。駅までの道々では、事務局の自称

麗人たちが「演劇フェスティバル」と書いた小旗を片手に笑顔で案内してくれる。こちらは照れる。けれどもこれがなかなか評判がよかったらしい。

アートビレッジセンター2階ホールでは劇団道化『ピアニアン』が始まる。椅子をすべて格納した平土間に回り舞台が作られていて、仮設舞台が観客席になっている。地元のおやこ劇場の観客も加わって立ち見が出る超満員だ。ピアノが好きでニューモラスな博多弁の猫、歌と軽快な動きも楽しい。

次は地階のシアターへ移動して、劇団さつぽろプロデュースの一人芝居『ナウマン象』だ。練られた作品らしく舞台と客席との掛け合い漫才で賑やかだ。この作品、本来



道化『ピアニアン』



狂言『素袍落』

お目当ての狂言が終わったせいにか少々疲れたか観客席にゆとりがあった。ちよつとサボって喫茶店、あるいは市内観光という不埒千万な輩がいるようだが、まあいいか。そんなことも予想して市内観光地図を配ったのだから。

ミニ新聞「演ふえす」の記者が駆け回っている。劇団さすがに竹内編集長と地元劇団から選抜した記者たちだ。芝居に関する記事はもちろんだが、会場近くの食堂案内や地図が重宝がられている。4月の第1号に始まって最終14号まで、まさに紙爆弾、紙面のレイアウトはプロ級だ。「演劇会議」にもこんなページがあってもいいと思うが。

夕刻、第2会場のシーガルホールまで徒歩15分。例の小旗と麗人に先導されて、初秋の街並みを散歩しながら劇団はぐるま「カンナの咲き乱れるはて」に到着する。10年ほど前にも観た舞台だが洗練されて見応えがある。日本人の戦争責任にこだわる作者と劇団の姿勢に頭が下がる。

午後8時、交流会会場のホテルへ。  
実は、実行委員会の討議の大半は予算編成と交流会の会場探しであった。野外か屋内か、すつたもんだのあげく、神戸港の夜景を楽しみながらリッチな気分を味わえる格好の場所を予約していたのだが直前に断られ、やむなく豪華ホテルの立食パーティーに落ち着いたのだが、会計係は内心ハラハラしていた。

そんなことは関係なしに、そして関係者の挨拶もそこそ

は総勢3人の小編成らしいが今回はカンパを携えて大挙13人が参加してくれた。にもかかわらず映画専用の小さな会場なので、事務局スタッフ一同感激したり恐縮したりで、現地調達を依頼された小道具の古自転車、尼崎から神戸まで約30キロを2時間、汗だくになって漕いできたのがある。

2作品連続で床に座っていたのでお尻が痛くなる。昼休みになってホッと一息だ。

1階のギャラリーでは、全リ演の生みの親とも言える京浜協同劇団の故黒沢参吉、月曜会の故土屋清の両議長、それに元「演劇会議」編集長の故萩坂桃彦氏の遺影が飾られている。各劇団から寄せられた稽古場写真やパンフレット、それに装置のモデルや凝ったバザー商品までギッシリだ。舞台写真やビデオテープとモニターテレビも備えている。

地元からは震災風景や義援金への礼状を掲示した。

午後からは4階リハールサル室で期待の狂言だ。茂山千之丞さんの講演と狂言に笑いが絶えない。演技の心と型、台詞、日本の伝統演劇から学ばねばならないことが多い。会場設備にこだわらずに気軽に上演を引き受けて下さった茂山千之丞さんにあらためて感謝する。

再び2階ホールに戻って、右るつ「鍋屋の紐はなぜ朱い」。やつと会場常備の椅子席になる。小集団だとは聞いていたが実験的で意欲的な舞台だ。役者が鳴物を奏で、語り、演じて、観客の想像力をかきたてる。



チサンホテルでの大交流会

こに会場はたちまち盛り上がる。芝居を見るよりも交流会目当てに参加するんだと宣言する者もいて大広間は喧騒の渦だ。しばらくして突然静かになったと思ったら、城谷さんの腹話術が始まっている。負けじと劇団あしぶえの門脇さんが首と手足を器用に使用して人形使いの秘術を披露する。どちらも見事な芸だ。この2人たちがまち意気投合して、翌日、京浜協同の太鼓とともに須磨区高倉台の仮設住宅を訪問したそうである。

翌日の舞台の仕込みで交流会に参加できなかった劇団大阪のために宿泊所での2次会を準備した。この2次会も大いに盛り上がり、例によって猛者たちが朝方まで続けたらしい。宿泊所担当の事務局メンバーは降参して案内所は2時閉店。よくやるで、ほんまに。

最終日はアートビレッジセンター2階ホールで劇団大阪「タッチューから吹く風」。沖縄戦後の庶民の歴史を描いた新作創作劇だ。大がかりな舞台、30名を超える出演者、琉球舞踊もあって、掉尾を飾るにふさわしい渾身の力作だ。



はぐるま『カンナの咲き乱れるはて』



大阪『タッチューから吹く風』

(3)

閉会セレモニーは昼食抜き。

まず3人の講師からそれぞれの舞台の寸評をいただいたが、あまりにも時間が窮屈で、講師には失礼、観客には不親切だったことに悔いが残った。とくに上演劇団と観客との対話。それも仲間内への遠慮や、その逆の呵責のない一刀両断の舞台批評ではなく、例えば稽古の課題と実践、再演の場合の新しい発見と自らの変化、あるいは地域観客との関係など、お互いに創造者として参考にした課題や興

味ある事柄を話題にしたかったのだが、残念ながら次回への課題として残ってしまった。

今回はやはり過密スケジュールであった。ホールは2箇所を移動し、3日間で、高校を除いても全6本と特別出演。しかも舞台条件としてはふさわしくない小ホールに2時間近い大作を組み込んだり、同じ建物であっても休憩時間も十分に取れないまま地下、2階、4階とせわしく上下したりで、観客も忙しかったが裏方もキリキリ舞いだった。

このスケジュールをさばいたのは前田総合舞台監督と兵庫ロックの面々だったが、緻密な事前準備があったために予定時間に狂いもなく舞台に齟齬もなかった。会場の館長以下全スタッフが親身になって協力してくれたことも大きかった。けれども、互いの舞台を見合せて経験交流をする、という演劇フェスティバルの目的を考えれば、いまま少日程のゆとりがほしい。

その点で、参考になったのは番外編の劇団どろ稽古場公演だろう。せっかく遠い所までやって来たのだから多くの舞台を見たいという参加者の期待にも沿える、少人数で対話も容易だ。都市部で開催する場合、複数の劇団がそれぞれ小ホールや稽古場で上演し、参加者はお目当ての作品を選択して一定の時間そこで観劇し交流する。その間、メイン会場では東西からの出演劇団を仕込む、といった具合にすればどうだろう。これなら地域や劇団の特徴も把握でき

## ◆全日本演劇フェスティバル IN KOBEの記録◆

参加者数：54劇団367名

東=30劇団187名 個人2名

西=24劇団166名 個人12名

一般客=250名

上演劇団：さっぽろプロデュース『ナウマン象』

石るつ『鍋屋の紐はなぜ朱い』

はぐるま『カンナの咲き乱れるはて』

大阪『タッチューから吹く風』

道化『ピアニャン』

神戸をほんまの文化都市にする会

『五十年目の戦場・神戸』

高校：兵庫県立日高高校『見ざる言わざる聞かざる』

兵庫県立姫路工業高校『ビー・ヒア・ナウ』

兵庫県立加古川北高校『サービス』

特別参加：京浜協同劇団『日本の太鼓』（仮設住宅訪問）

特別出演：茂山千之丞氏

講演『狂言の演技』・狂言『素袍落』

講師：阿部好一、平田康、神沢和明、各氏

るし親密にもなれる。柱になる東西からの出演は2〜3劇団でいいから出演劇団の選定に難渋しないだろう。事務局が多少手薄になる心配はあるが、関東、中部、阪神なら十分可能だ。また、視野を広げる、あるいは連帯する、といった点では、全リ演加盟劇団や友好劇団以外の、例えば小劇場系と言われる劇団とのジョイント公演はどうだろう。高校演劇の参加を一步進めて、開催地で注目されている集

団と交流したいと、かねがね思っているのだが、いい機会ではなからうか。

それに最大関門はやっぱりお金。参加者の会費だけでこれだけの規模の催しを賄うのは到底不可能であり、出演劇団の負担も大きい。各劇団からのカンパにも限界がある。都市部では駐車場料金も馬鹿にならない。今回も慣習に習って地元事務局スタッフも一定額の参加費を納めたが、公的助成や企業・民間メセナの支援がないと次回開催は難しいだろう。それらの支援を受けるには何といたって魅力的な企画、言い換えれば行政を動かせる宣伝力と舞台の魅力、つまりは私たちの総合的な力量アップが問題なのだ。いま文化に対する行政の関心も高まっている。「地方の時代、文化の時代」にふさわしい私たちの事業なのだ。容易ではないが、次回開催に向けて、いますぐあらゆる準備を始めねばなるまい。

三々五々会場を去っていく仲間たちを見送りながら、ありがとうを繰り返した。今回のフェスティバルは何よりも神戸を想う仲間たちの熱い思いがあったからこそ開催できた、成功したのだ。それぞれの地域の観客とともにいい舞台を創り続けよう。そして3年後に元気で再会しようと思

## 演劇フェスタ IN 神戸に参加して

## くそつ負けた!

演劇サークル トラム 中島 晴一

とにかく、良かった!ほんとに、お疲れさまでした。でもこの疲れは大変気持ちの良い疲れです。神戸の皆さん、ほんとうに、ほんとうにありがとうございます。

フェスタが閉会し、山口県に帰って10月26日の公演「夜の来訪者」に向けて最初の半立ち稽古で演出が、「何か吹っ切れた感じがいいね」といつてくれた。とてもうれしく、そこで私は「フェスタがきいたんですよ」とみんなと笑っていた。確かにフェスタでそれぞれの公演を観るたびに私の頭の中で「くそつ、負けた!みんな頑張ってるな!おれも頑張らなきゃ!」と奮起していたし、皆さんから力をもらっていたことを実感しています。

さて、フェスタの公演についてお話しします。

高校演劇では「見ざる言わざる聞かざる」が印象に残っている。目標を見つけるために行動を起こす。また、どんな人でも必要とされており、無用な物はないということ強く感じた。

「五十年目の戦場・神戸」は、朗読するたびにイメージが走り、頬にも何か走り、震災の被災者自身の方、自らが

この朗読を朗読することはできないだろうと思う。だってあまりにもすごすぎるから。文化人は語り継がなきゃいけないと感じる。

「ピアニャン」は時間を忘れ、とても暖かい気持ちにさせてもらった。それに回り舞台が舞台を大きく見せ、太猫さんが舞台をより引き締めた。また見たいと思う。

「ナウマン象」では、権力者と労働者の立場が明確で、いかに権力者が人間性を喪失させるものかを強く感じた。「狂言」は、「よつ、千之丞、日本一」……。ただただ恐れ入りました。

「鍋屋の紐はなぜ朱い」これは良かった。黒衣殿たちの活躍は私にとつて、衝撃的で印象深く素晴らしい芝居でした。また見たい。秘伝薬がじよるやのシラミがヒントだったのはおもしろい。つまり、ちよつとしたことを商品化し、人殺しまでして秘密を守るといふ権力者は許せないと感じた。

「カンナの咲き乱れるはて」これも良かった。ラストの中国人のおじいちゃんの中国語での絶叫。カンナの花と、兵隊さんと、埋められたお孫さんが浮かんできて、これはたまらなかつた。争いなんてさせないためにも文化人は演じなければいけないと強く感じた。

「タッチューから吹く風」これは今ある現実で、まさしくホットなりアリズムだ。

「権兵衛太鼓」これは表情がリアルだ。仮住まいされて

いる2地区へ行かれたそうですが、この権兵衛太鼓の時だけはいやなことを忘れられたと確信しています。

よし、おれも頑張るぞー!では、また!

## 4年前の人たちとの再会

だいこん座 門脇 由紀

4年前に東のフェスティバルで聞いた時から、「ぜったいに行きたい」と思い続けていたので、参加できた喜びは人一倍でした。私はまだ未熟で、恥ずかしいことに、芝居を見ることがまだ少なく、見ることに、聞くことに、そして感ずること、すべて、私の心を奮い立たせました。

初日の夕方「五十年目の戦場・神戸」という朗読劇を見ました。神戸に暮らす市民が震災の体験を語るることによって、生々しく、悲痛な思いが、私の心の奥底まで響いて、あふれる感情が素直に涙となり、止まりませんでした。

翌日からのスケジュールはとてハードなものでした。1日で5本も芝居を見たのは、私の初めての体験でした。朝から楽しませてくれた「京浜協同劇団」の「権兵衛太鼓」。体に響く太鼓の音色が、とてもこころよく、エネルギーで、元気になれるというか、見るものを惹きつけ、「やっぱリスゴイ」としみじみ感じさせられました。そんな1日の始まりが、1日中私をウキウキさせてくれました。東と西と一緒に作り上げているなあって。そして、私も、

それに参加できたという喜び。私の大切な財産だなあって感じました。

4年前に東のフェスティバルで出会えた人々との再会も、私には今度の参加の楽しみでした。こんなちっぽけな私のことを忘れずに覚えていてくれたこと、そして、新しく出会えた人たち。もちろん東だけでなく、交流を通して西パワーを「もらったなあ」とひしひしと感じることができました。寝る間を惜しんで語り合った交流会の二次会。

自分の考えをみんなと語り合いました。ある人が言った言葉が今でも心の中に残っています。「プロとかアマとかじゃない。楽しいものは楽しい。つまらないものはつまらない」他人事じゃないなあと思いました。観客は期待して劇場に足を運ぶ。舞台が終わったとき、期待より上回っているか、少なくとも期待通りの芝居にしたいものだ、私も心がけています。演じる方が楽しければ観客に伝わることも。

今回の芝居は、一つ一つが真剣に演じられているので、どれひとつとつてみても、あますことなく、真剣に見ることができました。神戸に集まった人たちは皆、キラキラ輝いていました。この感動はその場にいたものしか味わえない……いいものに出会えました……。

演劇に、劇団だいこん座に、神戸に集まってくれた皆さんに、ありがとう。

## 10年目の夏

演劇集団土くれ 石塚 幹雄

1987年7月、ここにいた。

劇団創立20周年記念公演第1弾、「太陽の子」の上演許可を作者である灰谷健次郎氏に断られたために、当時氏が居を構えていた淡路島の山の上まで頭を下げにやってきました。そのついでに、原作に描かれた神戸の街や、主人公「ふうちゃん」の「お父さん」が「沖繩の南部の海岸線に似ている」と通った、須磨から山陽電鉄で20キロほどの「江井ヶ島」を辿った。暑い夏の日だった。

ことのほか印象に鮮明に残っているのは「ふうちゃん」の生活の舞台でもあった「新開地」のアーケード街。小さな店が肩を寄せ合って、昼間でも薄暗く、手書きの大きな看板を掛けた大衆演劇の小屋があった。その時はタイムスリップしたような一抹の不安と、不思議と懐かしさに似た安堵感が交錯した。朝は朝で夜勤明けの労働者が、夜は夜で労働から解放された人々が、ゆったりした深呼吸で己の「生」を確かめる街、「新開地」。

10年目の夏。同じ場所に立っているのに気づかなかった。フェスティバル2日目の上演会場「アートビレッジセンター」に向かう途中、というよりすぐ向かいに立派な大衆

演劇の小屋ができており、大きな手書きの看板が出ていた。そう言えば10年前「新開地」にもこんな看板が出ていたな、と思いながら角のお菓子屋さんで尋ねてみた。「かつて新開地のアーケード街がありましたね。どの辺りですか?」「ここです」「えっ……!」。

松が取れるか取れないうちに襲った大地震。「新開地」のある長田区は被害が比較的大きい地区。それから2年後の夏。街は震災の面影がほとんど残らないくらいに復興し、新しい街が出現していた。仮設住宅を除けば神戸にその形跡を探すのは難しいくらいに復興しているのだろう。早い。それが故に、街の華麗な様相と裏腹に深い傷が癒されないうまま残っているのだろうか。そんな思いを抱きながら、震災と復興が粉々にしてしまった街の角かどに、かつての「新開地」の微かな匂いを探していた。

フェスティバルは、現地実行委員の感動的なきめ細かな対応と、おおむね充実した舞台、予想を超える参加者数など「成功」といってよいと思う。当日までの情報不足、カンパによる運営方法などは今後の検討課題とすべきでしょう。

好演が続いた上演作品の中では劇団道化の『ピアニアン』が押しつけではない風刺と、リズムミカルな舞台運びが観客を魅了していた。終演後の拍手が掛け値なしの「好演」を証明していた。話の自身が「たいしたことではない」と言

## 舞台を観て

## 『鍋屋の紐はなぜ朱い』

神沢 和明

(演劇評論家)

## ついできた男の子

劇団 道化 篠崎 省吾

えばそれまでだが、「たいしたことのある」話で観客を退屈させる舞台より、観客に、観終わった後なんとも言えない爽やかな風を感じさせた『ピアニアン』に拍手を送りたい。

夏のフェスティバル、とても楽しかったです。

あれから、あの夜の交流会で出会った男の子が、山口県内の『ピアニアン』の公演、9日9ステージについてきてくれました。

バク転も、玉乗りも、ピアノもすべてOKの若い男性だったので、みんな早く入団してほしいと、のどから手が出ています。

「演劇会議」の誌面を使って訴えさせて下さい。

『森川君、早く福岡において//劇団員一同』

江戸時代にシラミ除けとして名高かった鍋屋の紐。その店に年季奉公に入った少年が、入り婿になり、妻の不行跡がもとで追い出され、死ぬまでの話を、小説の文章をほとんどそのまま舞台化してゆく。

黒子たちが語り手となり、また時に幾役をも演じる。地の文、会話文、心理を語る言葉がうまくかみあっている。語りをリズムミカルにするために、打楽器でリズムを刻む。それも長箸や紙を貼ったバケツなどを楽器として使い、小道具にもする。たとえば箸を役人の十手に見立てる。ささらの音を算盤の音に見(聞き)たてる。そうした工夫で作られている舞台だ。プレヒトの『コーカサスの白墨の輪』みたいで、内容と形式が溶け合い、テンポも快調でおもしろい。

ただ、打楽器によるリズムが単調なために、次第に退屈になってきたことは否めない。リズムパターン、テンポ、ビートに変化をつけ、さらに複数の楽器の組み合わせによるハーモニーが聞かれると良かった。語りも朗読調になっ



てしまったが、狂言の「語り」、講談の「修羅場読み」のようなものを混ぜてはどうか。

## 『ピアニヤン』と『ナウマン象』

阿部 好一

(演劇評論家)

フェスティバルで私が見た2本について書く。  
福岡の劇団道化の『ピアニヤン』。ピアノの弾ける猫ピアニヤンが主人の転勤で博多から上京、ベット禁止の杜宅から自立しようとピアニヤンは職探しをはじめめるが、博多弁しかしゃべれないため苦労する。ひとこと言えば子ども向けの博多弁ミュージカル。

ピアニヤン役の大瀬美恵をはじめ若い出演者が張り切って演じているが、見るべきはまず熊井宏之の演出。舞台中央に幕で仕切った方形の空間があり、役者はその両側から登場するが、それが鼻につきはじめたところ、今度は中央の幕を割って役者が顔を出す。何気ないが、そういう変化のつけかたが悪くない。

ピアニヤンが出会う先輩のノラ猫の歌がブルース調で、これもキャラクターにピッタリ、音楽(上田亨・天利英跡)のセンスが光る。衣装(松下悦子)もイメージ豊かだ。

ピアニヤンはテレビに出ようとしますが、そこは(標準語)の世界。ピアニヤンは博多弁を断固変えない。中央集権文

よに考えたいという意味で申し上げたつもりである。これもまたリアリズム演劇の考えるべき問題のように思えたからである。それはともかくこの舞台、演技の巧拙よりも演者の人生の年輪がきざみこまれていて、類のないおもしろさだった。

## 熱気・喜び・感慨・脱帽

神戸をほんまの文化都市にする会代表

平田 康

400人近くが、全国から神戸に集まった「演フェス」。私はまず参加者の熱気に圧倒された。次に感じたのは、地元スタッフも含めて、予想以上に若者の顔が多かったこと。私と同世代の劇団関係者から、「若い劇団員が少ない」との嘆きをしばしば耳にしていただけに、若い人たちが実に生き生きと動き回っている様を見て、当て外れの喜びをかみしめたのだった。

そして、阪神・淡路大震災の被災地に住む者として、全国の仲間の暖かい励ましを受けて大きな行事が開催できたことに、さまざまな感慨を覚えた。幹線道路や大型ビルが立派に建設されながら、未だに約2万世帯が仮設住宅で暮らしているといういびつな「復興」の現状。その中で文化の「復興」とは単純に震災前の状態に戻るのかなのか、という重い課題を抱え込んでいる各集団が、力を結集してや

化への批判。見ているうちに、いろいろな地方文化があるからこそ一国の文化が豊かなのだ、という気にさせられる。東京自身もつと地方としての東京(江戸)文化を大事にしなければなるまい、とも思う。教訓調や偽善の臭みの全くない、いい舞台だった。原作・小川英子、脚本・中村芳子。もう一本も快作だった。劇団さっぽろプロデュースの「ナウマン象」(作・北野茨、演出・飯田信之)。小林秀治のひとり舞台である。自転車1台で廃品回収業をしている男が、国や県が核廃棄物処理施設を操業すると聞いて営業妨害だと抗議に行く。あっさり放り出されるが、彼はナウマン象のような巨大な権力に挑みかかってゆく。

前半は彼の生い立ちから、ふだんの仕事ぶりまでをユーモラスに展開、ぞんぶんに笑わせた。後半では、お得意さんである主婦の夫が、核廃棄物処理施設に抗議に行つたときの相手だとわかる。しかもその夫は冷たい男で妻を家から追い出した。

この挿話は、全体のなかでそれほど比重がかかっているわけではないが、前半でもう少し伏線を張っておく方が自然に感じられる。戦前のプロレタリア演劇では、警官や資本家は私生活でも悪人であるというふうを描かれたことがある。そういう画一的な描き方にならないように、と私はフェスティバルの会場で申しあげた。それはこの作品に対してというよりも、フェスに参加した方々みんなといっし

り終えた「演フェス」。これを一過性のお祭りに終わらせない宿題は、簡単には解けないことだろう。

高校生は居場所を探してる

全体の幕開けは8月29日午後の3つの高校演劇部による作品。いずれも神戸以外の兵庫県下の高校。

県立姫路工業高校は鴻上尚史原作・脚本「Be Her e Now」(大國早苗演出)。現実とフィクションが交錯し、現代のメディアに登場するキャラクターが舞台を走り回る。高校の文化祭などで上演すれば恐らく観客からの熱い反応が返るのだろうが、ここではもう一つ盛り上がりなかった。その原因の1つは、フィクションの世界をきちんと成立させる基礎にあるべき演技のリアリティに欠けていた、特に何人かの声が聞きづらかったためだったと思われる。

県立日高高校は看護婦・介護士養成の全寮制、という自分たちの日常を写した創作劇「見ざる言わざる聞かざる」。身の回りをそのままに描いた細部には好感が持てたが、話を進めるための仕掛けに無理があるため、せっかく提出されている自分たちの問題の展開があまりに終わってしまった。事件がないとドラマにならないという、誤ったドラマ概念に引きずられた結果のように思われた。

県立加古川北高校の「サービス」の舞台にはドラム缶が3つ。衣装から推察すると和洋折衷のリズムを意図したの

かもしれないが、ゆっくりとしたテンポは不思議な雰囲気を作り出した。前を向いたままの台詞で対話が成立した瞬間があったのには驚いたが、全体としては分かりにくく、客席には戸惑いが見受けられた。

無理を承知でまともてみると、高校生たちの共通の思いに、自分の居場所探しを感じられた。それがさまざまな表現形式で提示されているのだが、もう一步練り上げがあれば、それぞれの独自世界を創造する可能性は期待できる。

劇団はぐるま『カンナの咲き乱れるはて』

1986年に書かれて翌年に初演された作品だが、決して古くなっていない。戦争犯罪が未だにあいまいにされているところか、「自虐史観」などという言葉が横行して、史実をねじ曲げようとする試みがさかんになっている社会だからである。

第二次世界大戦の末期、中国大陸で戦死した戦友と夫の最期の地に咲き乱れるカンナを見に行つて、日本軍の残虐行為を中国の老人に責められるという筋。作・演出のこぼやしひろしの「戦争の加害者の立場から、加害と被害を率直に認めあつて、はじめて民族的な和解と信頼が生まれる」という思いを、真正面からぐいぐい押しつけてくる感じの舞台である。「戦争争って決してカツコイものではない、どんなにぶざまでも生きていくことの方が死ぬよりいいのだ」

とのメッセージが伝わってくる。

前半の戦死者たちによる語りは個性的で重く、男性俳優の層の厚さを見せつけた。その重さに匹敵するだけの後半の展開が期待されたが、やや物足りない。集団の芝居だったのが、老人と吉田と2人の対立に収れんされたからだろう。幕切れの赤いホリゾンとは美しく余韻が残る。

劇団大阪『タツチューから吹く風』

沖縄は伊江島の美しい自然と、戦争と基地によりそれを壊す米軍と日本政府の無法との対比。それを例えれば同じ甘い物でも、さとうきびとチョコレートにより象徴させようとする作者西岡誠一の執念のようなものが全体を貫いている。戦争末期に住民が集団自決したときの生き残りシマと、その彼女が米兵にレイプされて産んだナオとをだぶらせた手法は、歴史が繰り返されて前へ進まない沖縄の現実を示している。あまりにも大きなテーマを、本土の者に分からせようと省略を少なくしたため、物語の運びに無理が生じた。その分、踊りが重要な役割を演じることになるが、それが時には戯曲の論理をたどる観客の思考を中断する場面があった。一般的に言つて、こうした劇での歌と踊りの使い方は難しい。

しかし、はぐるまも大阪も、日本の歴史の最も重たい問題に正面から取り組んでいる姿勢には脱帽する。

## 97年夏に受けた衝撃

―神戸の演劇フェスティバル観劇記―

李相龍（劇団馬山代表）



私が最初に見た作品は8月29日夜の公演「五十年目の戦場、神戸」という一種の朗読劇であった。1995年、神戸の地震のとき味わった痛みを詩として劇化し演技者が朗読した。劇が進む中、客席で

は観客のむせび泣く声が聞こえてきた。おそらく彼らの痛みを真摯に表現したからであろう。舞台のうえで朗読された内容は彼らの心の奥底を衝いたからであろう。元来、詩というものは読者の胸を打つ感動を与えてこそ要諦であった。そういう点においてこの劇の台本を著した人は成功したのだと思う。筆者は朗読劇よりはむしろドラマで劇化したほうがもつとよいのではないかとも感じたが、地震で味わった凄惨さを一編の演劇とするには限界があるので、恐らくこの類の朗読劇のかたちで取り扱ったのだらうと思われる。

その翌日公演は午前10時から劇団「道化」の「ピアノニヤン」という作品であった。最近韓国でも流行している一種

のミュージカルである。「ピアノを弾く猫」という意味らしく、観客の興味をひくために比較的多くの努力がされているように感じた。ただ俳優の台詞が千篇一律的で高すぎたのが惜しかった。高い声を上げるよりも低い声で話すほうが観客にはよく伝えられるという点を重視したらよかったと思った。しかし360度回る回転舞台は韓国ではめつたに見られないすばらしい舞台であり、その回転舞台を適切に使って劇的な効果を高めた点は拍手を受けるにふさわしいと思った。特にこの演劇が公演された劇場は、舞台を自由自在に動かして使用できるように設計されているところに日本らしさを感じた。

同日午後11時30分から一人芝居を見た。「劇団札幌プロデュース」の作品であった。内容は韓国にもありそうな、自転車を取り回しながら廃品などを回収する下層民の哀歓を描いた作品のようであった。筆者は日本語はあまりわからないので俳優の台詞一言一言が完全には理解できないのが不自由だ。なぜならば一人劇は台詞一言一言がとても重要だからである。いずれにせよこの類の一人芝居を考え出したアイデアはまことにすばらしかつたと感じた。

同日午後2時、日本の伝統劇のひとつである「狂言」についての講演と実演は筆者には貴重な体験であった。なぜならば、筆者は日本四大伝統劇である、歌舞伎、能、文楽そして狂言に対して大きな関心をもっているからである。

## 全日本演劇フェスティバルの年譜

- 第1回 日時 1982. 2. 12~14  
場所 岐阜市 (劇団はぐるま・御浪町ホール)  
出演 劇団はぐるま 劇団からっかぜ 演劇集団和歌山 劇団草の実  
福岡現代劇場 世仁下乃一座  
主催 全日本演劇フェスティバル実行委員会
- 第2回 日時 1984. 2. 12~14  
場所 岐阜市 (劇団はぐるま・御浪町ホール)  
出演 劇団息吹 関西芸術座 テアトロ・ハカタ 劇団石るつ 劇団やませ  
劇団すがお  
主催 全日本演劇フェスティバル実行委員会
- 第3回 日時 1987. 2. 14~15  
場所 大阪市 (劇団大阪稽古場)  
出演 京浜協同劇団 劇団静芸 関西芸術座 劇団名芸 人形劇団京芸  
劇団未来 人形劇団クラルテ
- 第4回 日時 1988. 8. 5~7  
場所 札幌市 (札幌市教育文化会館)  
出演 劇団さっぽろ 劇団函館創芸 劇団河童 劇団大阪 劇団湖  
劇団支木 世仁下乃一座 札幌4劇団合同公演  
講演 藤本義一氏  
主催 全日本演劇フェスティバル イン サッポロ実行委員会  
後援 北海道教育委員会 札幌市教育委員会 マスコミ各社
- 第5回 日時 1990. 8. 20~22  
場所 三重県員弁郡東員町 (東員町総合文化センター)  
出演 劇団アポストロフィ 劇団はぐるま 劇団息吹 劇団演集  
演劇集団和歌山 劇団津演 桑名高校演劇部  
講演 山田太一氏  
主催 三重県教育委員会 東員町教育委員会  
三重県カルチュア・フェスティバル実行委員会  
主管 三重県地域劇団協議会 三重県高校演劇連盟  
後援 全日本演劇リアリズム演劇会議  
東員町文化協会
- 第6回 日時 1993. 8. 20~22  
場所 三重県員弁郡大安町 (大安町文化会館)  
出演 劇団瑞芸 劇団演劇街 劇団名張少女 劇団たけぶえ 劇団支木  
劇団四紀会 員弁高校  
講演 木津川計氏  
主催 大安町教育委員会 全日本演劇フェスティバル実行委員会  
主管 三重県地域劇団協議会 三重県高校演劇連盟  
後援 文化庁 全日本演劇リアリズム演劇会議 全日本アマチュア演劇連盟  
員弁郡教職員組合
- 第7回 日時 1997. 8. 29~31  
場所 神戸市 (アートビレッジセンター、シーガルホール)  
出演 北海道プロデュース 劇団石るつ 劇団はぐるま 劇団大阪 劇団道化  
神戸をほんまの文化都市にする会 京浜協同劇団 (仮設住宅慰問)  
日高高校 姫路工業高校 加古川北高校  
講演 茂山千之丞氏 講演と狂言1曲  
主催 全日本演劇フェスティバル IN KOBE 実行委員会  
後援 文化庁 兵庫県 兵庫県教育委員会 兵庫県文化協会 神戸市  
神戸市教育委員会 神戸市民文化振興財団 尼崎市 他

筆者は米国の劇作家ユージン・オニールの後期作品で英文学博士学位を取ったが、最近では米国演劇よりはむしろ日本に心酔していることを率直に告白するところだ。

同日夕方には、劇団はぐるまの公演を見た。「中国と日本の友好のための研究」という副題が暗示するように、第二次世界大戦時に犯した日本人の過ちを許してくれという内容のようであった。戦後世代に「歴史を忘れて生きてはいけない」というメッセージを伝える内容だった。筆者は前夜、作家のこばやしさんと一緒に酒を飲んだ。話はまさに第二次大戦時には中国人のみならず、韓国人にも日本人は多くの過ちを犯したという内容だった。人間は自身の過ちをなかなか認めようとしぬものだが、こばやしさんは異なった。彼は過去に日本人が犯した過ちに自分なりに詫言びたからである。自分の過誤を認めるものはまさに人なのだ。

今回参加しての印象は次のようなものだ。

まず第一に、韓国と同様に日本も演劇を通じて現実の不条理と矛盾を告発している点だ。この類いの演劇を日本では現実劇だと称するようだが適切な表現だと思う。

第二は、このような演劇祭は韓国にもあるが、韓国のレパートリーは様々である一方、日本は現実告発または、これと類似の主題をもった演劇のみ公演するという印象をもった。韓国でも年に2回の大きな地方演劇祭がある(ソ

ウルを除外して)。一つは5月頃全国各地を持ち回りながらコンクール形式の演劇祭。もう一つは、秋に筆者の住む馬山市で開催する演劇祭。今では国際演劇祭として規模も大きくなり世界15ヶ国以上が参加する。ほかにも韓国各地で地域ごとの演劇祭がおこなわれている。

第三に、韓国と日本が演劇を通じて文化交流をさらに拡大したらよいだろう。このためには、演劇人の努力も必要であるが、それ以上に、政府次元での財政援助の大幅な拡大が必要であると思う。

いずれにせよ、現在劇団馬山は日本のいくつかの劇団との活発な交流を行っている。最初は演劇だけだったが、舞踊、合唱へと発展している。この点、両国の演劇人は自信をもっていいと思う。

今回多くの日本の演劇人と知り合いになり、相互の交流をすることとした。今回のフェスティバルにおいて多くの日本の仲間、実行委員会の皆さんが私に対して示してくれたいご好意にあつく感謝する。

(翻訳・加藤光広／三重大学／文責・加藤武夫)

※夏の演劇フェスティバルに参加した全韓国演劇人協議会会長・劇団馬山代表の李相龍氏より観劇の感想が届きました。長い文章でしたので了解を得て、相

# 顔

ふじわらしげたか  
藤原重孝  
俳優・演出家  
演劇サークル

トラム



## やさしさと毅然さ

やの舞台美術代表

矢野 弘

1985年の憲法記念日の行事として、元山口大学の憲法学者播磨信義さんの熱意で、山口県下の多くの演劇サークルが合同して、ふじたあさや作「今日、リンゴの木を植える」を上演したときです。教科書検定問題をあつかった場面で、岸本康陳横浜国立大学経済学部教授役で、帝國主義と金融資本主義の二つの言葉の削除をめぐって、文部省教科書調査官M氏との対立する場面で、学者としての毅然さとやさしさと誠実さを漂わせた、藤原さんの見事な表現を思い出します。

あのやさしさと厳しさが、演劇サークルトラム（テアトロ、ラポー、ムラージュの略）を、家庭の事情で創立者を失ってからのサークルを維持する困難にめげず、民子夫人と二人三脚で地域に根づかせ、山口市に無くてはならない存在にまでしたのだと思います。

そして、西リ演では有名になったエピソード、「愚者には見えない、ラマンチャの王様」を若者たちが、藤原さんはリアリズムだからとお叱りを覚悟で恐る恐る提案した横

内謙介の戯曲を、「ドラマのどこが、今生きている人間にとっておもしろいかだ」とあっさり認めて、30周年記念公演を成功させた逸話や、コッコツと夜なべして自分でつくった婚約指輪を、民子さんに送って結婚をとりつけた話など、人間的やさしさと、ものを創ることの喜びを最大限に知っている彼が、仕事の忙しいなか、西リ演のリアリズム研究小委員会に出席して、過去を見直し、新しい飛躍に挑戦している姿に頭の下がる思いです。

# 顔

まついみつよし  
松井光義

演出  
劇団山形



## まつろわざるものの視線

劇団仙台小劇場

石垣 政裕

東北には鬼がいる。

長い冬を、ものいわぬことで耐えていると  
言われ続けてきた東北で、ものいうことで  
冬も生き抜いてきた鬼がいる。

20年も前だろうか、黒沢参吉さんの「喪の季節」の舞台  
だったかもしれない。舞台上で凝視したこの人の目から放  
たれた光は、たしかに観客を威圧していた。言葉は一つ一  
つ闇を突き刺していく。芝居を始めた頃の私など、ゴクリ  
とツバを飲み込んだまま、観客席に押しつけられていた。

「あの人は怪物だな。」山形からの帰り、私は車の中で  
他の人が話しているのをいつも聞いていた。あの冷たく放  
たれた目の光を、私はいまだに覚えているが、あれは「怪  
物」などという、おおげさだが中身のない言葉では決して  
言い表せない。まぎれもない「鬼」の目だった。かつて「鬼」  
とは皇威に服しないもののことを称したというが、あの目  
のすざさはまさに、まつろうすることに時代の救いを求める私

たちに対する威嚇だったに違いない。

だから、いまだに、劇団山形の稽古場で「やあどうもど  
うも」と迎えられたときも、「一緒に芝居やりたいですな  
あ」とお世辞を言われたときも、この人の、松井さんの目  
の奥を怖いもの見たさに探すのである。

劇団を背負って30年も歩いてきたのだ。大量の役者が舞  
台にのる活動華やかな時期だけではない。事実、公演がな  
かなかできない時期もあった。そんな時も若い劇団員をほ  
め、活動を離れている劇団員があたかも明日出てくるよう  
に消息を話していたこの人が、稽古場にいた。片時も無口  
ではいなかった。

劇団山形30周年記念の公演から以後、東北の5月がそう  
であるように、活動を離れていた劇団員たちが復帰し、新  
しい劇団員が力をつけ、何から何までいっせいに花咲くの  
である。「いやあ、みんなに助けられて」と彼は言う、ま  
ぎれもないあの目の光を放ちながら。

# 顔

まつした ろう  
松下 朗

舞台美術家  
東京芸術座演出部長



## 70歳の顔、このスサマじいバイタリテイ

東京芸術座演出部

印南 貞人

私たち劇団員は、松下朗さんのことを、松下さんとも先生とも呼ばない。昨日入った研究生からみんな「ロウさん」と呼び、新協劇団時代の先輩たちは「マツちゃん」と呼ぶ。「印南君は1つ言われれば1つしかできないね」と叱られた私に、「僕は3つ4つのこと、いつも考えてるヨ」というロウさんのバイタリテイは不可思議である。

心臓を切ったりいくつかの大きな病気をしながら、「不死身のロウ」を自認するロウさん。村山先生、中村俊一さん、千田先生、飯沢匡さん、演出家とのコンビネーションを大切にしているロウさん。コンビだった演出家が逝って、すこし寂しそうなロウさん。

そんなことがロシアでの仕事にむかえたのか、最近ではロシアでの仕事が多い。俳優座で『白痴』を演出したホーキン氏の紹介で、極東ロシア、ハバロフスクのドラマ劇場から、昨年の西シベリアオムスクのジャパン文化と芸術のフェスティバルのプロデュースまで、その活動はすさまじい。

今年3月モスクワ芸術座小ホールで上演された、オール

ロシアゴールデンマスク賞の受賞作品『砂の女』の日本側の荒木かずほをプロデュースし、美術も担当した。

しかも、この『砂の女』と『三人姉妹』30人の来日公演を来年3月にプロデュースする。大変な人である。日本の演劇ファンもちろん、ターゲットにした仕事だが、ロウさんはぜひ、俳優諸君に観てほしいという。芝居の原点を大事にする人、沈滞気味の新劇のなかに芝居の魅力を復権したいと熱望するロウさん。70歳で、テレビに映画もやりながらも、生粋の新協からの芝居人。

劇団演出部長、企画会議の重要メンバーである。先輩の芝居と根性に私たちは学ぶところが多い。

もうひとつロウさんは、古い演劇人のもつロマンチズム、毒舌家。しかし、後輩に対する思いやりの顔の人である。

## さようなら 清洲すみ子さん

北林 谷榮（劇団 民芸）



代表 座長 清洲すみ子さん  
東京芸術座 故

清洲さん、あなたと私のなかで、なんか堅苦しいことを言ってもしょうがないから、私の心の中に残っていることだけを言います。

2つのことを言い残していた。こんなに早く、あなたが私より先に亡くなるなんて考えもいなかったから、ずっと

長いこと心の中で思っていたことで、一度も言う機会もなく、また言いたいような状況にもめぐり逢わないうちに、あなたは先に逝ってしまいました。

考えてみると随分長い付き合いで、60年に達しようとしているぐらいの長い付き合いでした。私があるを一番最初に見たのは、たしか浅草のブツペ・ダンサンというレビュー小屋で、なんか3人のレビュースターのベッピンさんたちが綺麗なドレスで踊ったハデやかな出し物の時、真

ん中にいた一番小さい人があなたです。

あなたは客席に向かって、ほほえみをおくりながら踊っていました。その時は、あの小さい人はデッカイエクボがあるんだあとでそれを心にとどめました。で、ずっと後、と言っても何年か後で、私が新協劇団に鈴木英輔演出の『流れ』というお芝居で客演という名でチョビツと出していた時に、清洲さんはもうすでに新協劇団に入っていました。

そして、その時はちょうどあの偉大なギリキイの亡くなられた年で、そして、ただちに9月にギリキイを記念する『どん底』の上演が新協劇団で村山知義先生の手で行われました。その時はナスチャをやり、あなたは病気のアンナという、寝床で寝てばかりいるお婆さん役をやっていました。それで私は、あのエクボのある可愛らしい人が老いぼれたアンナやっているのはチョット可哀想だなど思ったことがいまでも心の中に残っています。

そしてその後、あなたが新協劇団の中で存在をピカッと見せたのは、キングスレイの『デッドエンド』の時でした。それで役の名前はフランシシかな。なにか街の売春婦の役でしたっけね。とくに一番印象的だったのは、舞台の引っ込みの時に客席にまったく真うしろを向けて、そして売笑婦らしい不思議な官能的な曲線を見せて、腰をふりながら真正面に10歩ぐらいを奥へ引っ込んだんだでしたね。その時

はみんなが「うーん」とうなりました。いままでそういう肉感的な感じをナマに舞台へ持ち込むことをやった人は初めてだったんです。そして、そういう生きた女の生感というものを、お芝居というものに持ち込もうという試みは、すばらしいとみんな拍手しました。その頃の演劇界、新劇の畑や新協劇団の演技の考え方はそういう生々しい、いきいきした演技をやる人はいなかった。で、その時私たちは、うわあうわあこういうことができるんだなあうと驚嘆しました。それがあなたが新協劇団で劇団賞をとられた役でした。

そういう思い出話が長くなりましたが、私がこんなに早くあなたに別れることに、こんなに不意にあなたに別れることになるうなんて考えもしなかったんで、言わないでいたことが2つあります。

その2つというのは、第一に、清洲さん、あなた、本当に偉かったわねえ。東京芸術座とずっと一緒に活動しながら、でしゃばりもせず、そして人を率いているというような感じもなく、そしてやっぱきちんとしっかり存在しながら演技をやった長いことやってきて、トムさんのいらっしやらなくなつた後、随分長かつたろうけど、清洲さんは偉いねえっていいおうと思っていた。だけど言う時がなかった。もうひとつは、清洲さん、あなたはトムさんと結婚してトムさんはきつと幸せだったと思う。

私はトムさんのその前の御結婚生活も知っています。随分知っているわけですが、あなたはつまりおだやかで、さりげなくって、やわらかいっていうかな、あどけないっていうかな、そういうあなたの下町っ子らしい、さらっとした明るい気質、それがトムさんの後半生のお仕事をどれだけなぐさめたらうと思う。

トムさんが奮起して、安心してお仕事できるように、あなたが力をつくしていたんだと、あなたの気質を私、よく知っているもんだからそう思う。本当に清洲さん、トムさんのいい奥さんだったと思う。そして今、やっと天にのぼって、おかしいけど、トムさんのところへ行くことができ、あるいはできた。そして向こうでは、事実、どうなっているんだか私にはわからないけれども、トムさんを初めとして、久保さん、重ちゃん、小沢の栄ちゃん、三島のマーちゃん、細川さん、原泉子さん、それから大森のヨッチちゃん、岡倉さん、たくさん先輩や友人たちが向こう側の世界へ行っています。あなたもその仲間の方へ飛んで行ったんだと思います。

さびしい、悲しい気持ちもないではないが、どこからやましい気持ちはありません。

清洲さん、トムさんのそばで静かにエクボをつくって休んでください。さようなら。

（メモなしで、お棺の前で口述したもの）

（ロシア演劇レポート⑩）

## 『題名のない戯曲』から『ドン・キホーテ！』まで

—付、日本とロシア演劇 VIII—

桜井 郁子

### 日本とロシア演劇—資料について

神戸の全り演フェスで、資料について紹介してほしいとの要望を聞いた。毎号、私を悩ませている一つは日本での上演記録。ごく最近の、しかも東京を除いては資料がない。都市を焦土にした第二次世界大戦で資料が散逸したことが大きな原因だろうが、戦前だけでなく戦後も一覽記録がなく、劇評や演劇史に残る演目以外は闇に消えている。もしも、小さな劇団や地方で、ロシア演劇に意欲的に取り組んでいたとしても、多くの人が知ることもなく過ぎるのは残念だが、どうしようもない。因みに映画なら封切一覽を雑誌で知ることができるのだが……。

ロシアの場合でも困難は同じ。演芸図書館でもすべての上演を網羅して記録するしけはない。しかし、主要な劇場の初演演目が記載された5巻の演劇百科事典がある。演劇アカデミズムが革命後、いちはやくうちたてられたゆえ

だろう。ただこの百科事典も67年の刊行で、以後の増補も改訂もないから、個々の文書やカードに頼らざるを得ず、その手書きカードを検索し、ノートするためには、私はしこしこと図書館通いをして始末である。

ロシア戯曲の翻訳資料はどうか。あまり多くないから簡単なようでもあり、一方、現代戯曲の場合は少なく大変だ。ただチェーホフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキイにゴーリキイなど古典は、散文にしる戯曲にしる、たいいてい翻訳されているのでたいして困難でない。チェーホフの『結婚披露宴』や、ゴーゴリの『結婚』は全集をあたれば見つかる、そんなつもりで私は書いている。ただ最近ロシアで流行のA・オストロフスキイ作品がほとんど翻訳されていないのは不便。ただ翻訳が古い、読みづらいなどは問題だが、横に置いとこう。

全集的資料は昭和初年に集中して出ている。これを知ったとき、私は驚いたが、今の人も同様かも知れない。紹介しておく。

『近代劇全集』、第一書房、昭和2年刊。全43巻プラス別冊のうち、露西亜篇は第27巻から第34巻までの8巻。記載されているのは、ゴーゴリ、グリボエドフ、オストロフスキイからチェーホフ、トルストイ、ゴーリキイ。そしてアンドレーエフ、ソログーブ、ブローク、ルナチャルスキイ、トレニョーフなど革命後の20年代、つまり現代戯曲に及び、その総数は37篇。別冊には露西亜篇39葉の写真が掲載されている。

『世界戯曲全集』、近代社、昭和2〜4年刊。第24巻から第27巻が手許にあるが、第23巻も露西亜篇のようだ。手許の4巻に搭載されているのはチェーホフ、ツルゲーネフからアンドレーエフ、エウレイノフなど、40篇。

いうまでもなく昭和2年は27年、革命10周年のソヴェート演劇高揚期、モスクワ芸術座だけでなく、メイエルホルドやエウレイノフなどの上演活動が、築地小劇場以来の日本新劇界に刺激を与え続けていた時期である。ロシアで流行の演目が即時移入されていたのである。シンボリズム作品も含まれているが、日本で実際どんな上演がされたのだろうか。

『現代世界戯曲選集』、白水社、54年刊。第3巻、ロシア・ソヴェート篇。ここにはモスクワ芸術座の人気演目だった『装甲列車14—69』など、リアリズム中心の代表作6篇。『現代世界演劇』、白水社、71〜72年刊。全17巻プラス別

巻1の中に、ロシア現代戯曲8篇を含む。マヤコフスキイの『ミステリア・ブッフ』、シュヴァルツの『影』、ローソフの『とわに生きるもの』などジャンルも多彩で見逃せない作品群だ。

単行本については調べきれないので割愛。叢書は未来社刊のてすびす6冊、60年代のアルブゾフ・ブームを反映している。

ロシア戯曲の雑誌掲載はかなり多い。ほとんどが上演と連動しているから、ロシア劇上演数の多さを反映していると思うが、波がある。雑誌「テアトロ」でいえば、34年創刊の年からロシア演劇状況の紹介が毎年載り、戯曲もキルシオン、アフィノゲノフなど貴重な資料が37年まで続く。40年、雑誌解散、46年復刊するが、50年代はゴーリキイの長編戯曲やチェーホフの脚色小品など古典が主。60年の『イルクーツク物語』からソヴェート現代戯曲紹介が始まり、途切れなく続いて80年代前半に至る。80年代後半、88年のローシチンから後、雑誌掲載はめったにない。雑誌「悲劇喜劇」もかなり掲載されていたが同様。83年のポリシヨイ・ドラマ劇場、88年のモスクワ芸術座など、80年代後半ロシアからの来訪が多かったのと、どんな関係があるのだろうか。

個々の上演はいろいろあったが、多くの台本は出版としても雑誌掲載としても残っていない。こんな中でロシア演劇状況のレポートをする嬉しさと難しさ、読者としては翻



訳資料を読みたいだろうし、このジレンマを克服するすべはいまのところない。

### 注目される4人の演出家

モスクワの97/98シーズンには、いつもの年より早く、夏の終わりから始まっている。9月6日モスクワ創建850周年を記念する首都の祝祭気分にあわせてのことらしい。友人から送られた資料でみると、9月上半期に38劇場のプログラムが出ている。初演発表が六つ、新しい劇場の開設も四つ。六つの初演のうち、オストロフスキイ作品が4つ、毎号書いているが、19世紀のこの古典作家の流行はまだ続きそうである。豊富な登場人物、庶民的感觉、巧みなドラマトゥルギーのゆえだろうか。ある初演を観た人の話では、伝統的メロドラマ的テーマの間にカーニバルシーンが挿入されていたとか。メイエルホリドの試み以来、演出家の工夫を許容する作品群だ。

この他、今シーズンに向けてのデータ少し。モスクワ芸術座が創立100周年、マヤコフスキイ劇場が75周年、レニコム劇場が70周年といずれも代表的な劇団が記念年を迎える。ついでに言っておくと、芸術座については前回に書いたが、マヤコフスキイ劇場創立は22年、10月革命直後の高揚した雰囲気の中で創立、最初の名は「革命劇場」で

演出家メイエルホリドが関わっていた。レニコム劇場創立は27年、革命10周年、荒削りながらエネルギーに満ちていた時代、また労働青年演劇運動（略称トラム）の頂点と組織化の時代、劇場名も「トラム」だった。栄光や挫折やいくたの曲折を経ながら、モスクワ演劇界の現在と未来を担う劇場たちのさらなる発展を望みたいものだ。

### レフ・ドージン

さて、今回はこれらの劇場はちよつと横に置き、毎回触



A チェーホフ作『題名のない戯曲』  
演出 レフ・ドージン  
マールイ・ドラマ劇場

れる演出家フォメンコ、ジェノヴァチ、ギンカスなども横に置いておく。まだ報告しておきたい名がいくつかあるからだ。それもスタイル、ジャンルの違いがあつておもしろい。  
89年来日公演で強烈な印象を

残したマールイ・ドラマ劇場を率いるレフ・ドージンが、

ペテルブルグの自分の劇場で稽古を見せてくれた。チェーホフ作「題名のない戯曲」。謎を含んだこの戯曲、いつ書かれたか、どんな題名だったか知る人はいない。ただ妹マリヤへの手紙で「父なし子」と書かれたことはある。ミハルコフ監督がこの戯曲をもとに「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」という名の映画を作った。某演出家の名づけた「プラトノフ」が通称になっている。私がドージンと話した時も「プラトノフ」と言ったが、彼は今のところ「題名のない戯曲」以外の題名を考えないそうだ。

チェーホフの死後10年で手稿が見つかったのだから、彼のテキスト中、最後に読まれた戯曲である。一方、彼が18歳の時に書いたと推定されるから、つまり人生の最初と最後がここに出会っており、戯曲の中にそれらが出会っている。チェーホフの後の戯曲のモチーフがすでに含まれているし、若きチェーホフ作品の残酷さ、狂暴さも含まれている。しかも未完成。ドージンによってどんなテキストレジーがされたのか、興味津々だが、私の見たのは一シーンにすぎない。彼によればこの戯曲は「人生そのもの、しかも我々の」という。村の教師プラトノフ、辱められた理想の、病んでしまった人生、それが我々のそばの人生のように眼前で演じられるのだ。ここにある写真は練習風景だが、登場人物のさまざまな表情、めいめいの持つエネルギーが感

じ取れると思う。

舞台装置は大がかりだ。客席の一部を潰して、宴席の長いテーブルを観客の眼前にすえ、人物をクローズアップで見せる。後方舞台上に2階建てのバルコニーがつけられ、この4階構造に、さらに舞台上奈落には本水をたたえた池があつて水中場面もあるようだ。

ドージンの芝居は、本拠地の劇場で出会えないことがある。1年のうち何回か、外国へ旅公演をする。各種のフェスティバルに招かれるし、パリへはほとんど毎年公演、今春ですでに6回になった。ドージンは自分の芝居の理解者を、ドストエフスキイ原作「悪霊」の10時間をさえ耐える観客をフランスにもっている。彼の劇団はフランス演劇界に欠かせない部分になった感がある。その他の国でもロシアに劣らぬ観客をもっているようだ。

### セルゲイ・アルツイバーシエフ

セルゲイ・アルツイバーシエフのゴゴリ作「結婚」については前回数行書き、写真も載せてしまったが、その印象はますます深まるばかり、この人を知らずして今後のロシア演劇を語れないような気がする。

いったいどんな人か。演劇芸術大学（旧ギティス）在学中に声をかけられて、リュビーモフのタガンカ劇場に入って演出。デビューは80年、同劇場やマヤコフスキイ劇場で

仕事をした。89年タガンカを離れて、自らのスタジオ劇団を組織。91年「バクロフカ劇場」を名乗り、古典の読み込みから稽古を始める。この劇場で発表した主な作品は発表順にゴゴリ作「検察官」、ツルゲーネフ作「村のひと月」、チエーホフ作「三人姉妹」、オストロフスキイ作「才能とパトロン」、ゴゴリ作「結婚」。次作はシェークスピアだそう。

劇場は小さくて客席はせいぜい150くらい。俳優たちは若い人も繊細で、軽やかな感覚をもつプロフェッショナルだ。

ツルゲーネフの「村のひと月」では、演出家は大胆なテキストレジャーで自分のスタイルを貫いた。ナターリヤとヴェローチカ、2人の女性の葛藤を中心にすえ、家庭教師ベリヤーエフなどは2人の女に動機を与えるだけで後景に退けられている。若く美しい人妻ナターリヤは、年下の青年への思いで生まれて初めて胸を焦がすが、自分のエゴイスチックな行動がヴェローチカに与えた影響の大きさに愕然とする。初め短いワンピースで跳ね回っていたヴェローチカは、苦しみの果て黒いドレスをまとった女に変身、決意を秘めて養い親ナターリヤの前に立つ。すべての登場人物に等間隔の光を当てていたジェノヴァア演出と異なり、彼の上演時間は半分の2時間だった。

小さな舞台空間のため、装置は馬車1台だけ。それも初

をした。スラフキン作「セルソー」、ピランデロ作「作者を探す6人の登場人物」などでヨーロッパでの評価も高い。コメディ・フランセーズでは招かれてレールモントフ作「仮面舞踏会」の演出をしている。

モスクワで舞台を見ることの難しい彼と出会い、その舞台を見たのは4年前の夏である。鈴木忠志の招待で彼の劇団が、トマス・マン原作の「ヨゼフとその兄弟たち」、「フィオレンツァ」の2作を携えて、利賀フェスティバルに参加した。パリで劇団と知己になっていたアンナに誘われ、利賀に出かけて「ヨゼフ」の舞台を見、「フィオレンツァ」の稽古を見せてもらった。

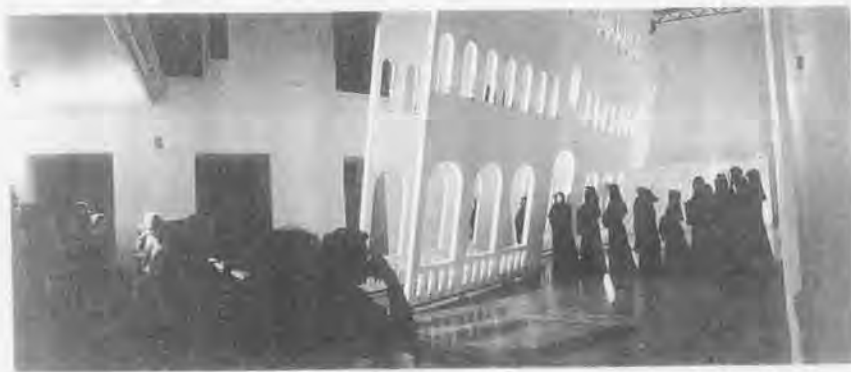
彼の演出スタイルは作品によって異なるが、「ヨゼフ」は一つの典型と考えるので書いておこう。この芝居は3つの要素から成る。中央舞台を囲む三辺の壁際3列客席の前列に、俳優たちが座っていて、必要に応じて席を離れる。マン作品からのシーンは舞台中央で行われる対話形式。あとはロシア正教独特の節回しをつけた旧約聖書の朗読（回廊の見台に俳優が1人立って読む）と、舞台を囲むコーラスによるロシア正教典礼。この三つの要素が随時立ち代わり現れて、全体としてポリフォニーを形成しようというもの。実は言葉の理解がまるで役に立たない難解さだが、観客が心身まるごと陶酔にゆだねられるほど、魅惑的なハーモニーの世界だった。このハーモニーと雰囲気をつくるた

めは台車の板のみ、ナターリヤはその上にベットのよう寝そべって男友達ラキーチンと会話する。この後もそこはベンチになったり部屋になったりするが、場面の進行に従って、一つずつ召使いの手で車輪、座席枠、腰掛、側板、飾り板が運び込まれてくる。フィナーレでナターリヤを残して皆が旅立つ頃には馬車が完成する。具象性と比喩の一致。

「結婚」はモスクワでも著名な俳優4名を、マヤコフスキイ劇場とタガンカ劇場から迎えているが、若く美しいヒロイン役、しなやかで行動的な女中役の2人をはじめ、この劇場の俳優がベテランたちに拮抗する演技力をもっていて、渾然たる舞台をつくりあげた。演出家はロシアの伝統的な歌と踊りで小気味よいリズムを作りだし、登場人物のグロテスクな形象に、悲しいニュアンスをもつ喜劇的要素を加えて笑いを誘う。一見騒々しい空騒ぎの後での泣き笑いの表情。それまでほとんど無表情だった主人公ポドカリョーシンの心情吐露、ヒロインのためらい、異常なまでに友人の結婚仲介に情熱を燃やしていたコチカリョーフの顔に一瞬横切る影。これら心理表現の入念さで一貫した雰囲気を作り出すのに成功していた。堅固な構造と表現の統一性、まさに現代に生きる古典だ。

アナトリー・ワシリエフ

アナトリー・ワシリエフは今夏で2度目の来日公演



『予言者エレミアの哀歌』 演出A. ワシリエフ「ドラマ芸術学校」

め、俳優たちは現実の僧職を招き毎朝の礼拝から始まる稽古を1月半続けたと聞いた。

「フィオレンツァ」はがらっと変わって、修道僧と美女の対決の物語、うすものをもとった裸形の女優たちが眩しかった。2度目の来日は今夏、やはり利賀でホメロスの「イリアド」を上演した。

演劇一途のワシリエフは、一見修道僧のような風貌をしている。「ドラマ芸術学校」という劇団名にうかがえるように、一時は観客を視野に入れず、ただ演

劇をつくる人のために仕事をしていたことがある。

その彼が今春の「黄金のマスク」で作品賞と美術賞を獲得した。改装成った白亜のホールでの第1回公演『予言者エレミアの哀歌』（写真）による。「エレミア書」をテキストとし、神の怒りに触れて「見捨てられたエルサレム」、予言者エレミアの嘆きをテーマとしている。法服に身を包んだコーラスの聖歌合唱による集団行動、一斉のろうそく点灯、白い鳩、と聞けばさもありません、あの『ヨゼフ』か



『さよなら！ドン・キホーテ！』  
演出 Y・ライヘルガウス 「現代戯曲学校」

客ともなる。男2人に女1人の道化。互いに絡み合い、痛め合い、憧れ、妬み、すねたり、からかったり、抱き合ったり、左右の扉を使つての追っかけっこをする。圧巻はタクシーナ・ワシリーエワだ。なにしろ彼女は男2人よりも長身、大腿もあらわに見せて、男2人を手玉に取る。彼女はあからさまなカリカチュア、グロテスク、自己アイロニーを恐れない。すっとほけた表情と、たっぷりの色気で、つぽを押さえて笑わせる。モスクワにはこんな女優もいるのだ。ここの一等席、初演ともなれば決して安くはないが、お客は満足して帰る。

「現代戯曲学校」の創立は89年、建物はもと18世紀の著名なフランス料理店、どっしりした外観に、鏡やレリーフいっぱい豪華な内装である。このレリーフの一つ、キューピットが劇場ロゴマークになっている。ホールの定員数は350。そのうちに昔の「冬の庭園」（屋内温室）を改装した200席の小ホールができるとか。劇団組織はちよつと変わつていて、俳優はベテラン数名のみ、その中のドン・キホーテ役のフィロゾフは演出家の盟友、タチャーナ・ワシリーエフは1年前に招かれた。若くして散った人気俳優ミローノフの母マリーヤ・ミローノフのような人もいる。彼女は「老人は老女の許を去る」でトルストイ夫人を演じた。演目により他のベテラン俳優が加わり、学生たちも動員される。もちろんレパートリーはコミックに限らな

ら連想できるのである。こんな演出家もロシアにはいるのだ。

ヨシフ・ライベルガウス

ワシリーエフと対極のような舞台をつくるのが、「現代戯曲学校」の芸術監督、演出家ヨシフ・ライベルガウスである。以前にもチェーホフの『結婚申込』でみせた形式を、今回の『さよなら、ドン・キホーテ！』で繰り返して発展させている。曰く「ドラマ劇場俳優のためのダイアローグ、バレエ、オペラ、道化芝居」。まずはセルバンテスの物語に従つてのドラマ、木馬にまたがり金だらいを兜代わりにかぶった騎士ドン・キホーテ、お供のサンチョ・パンサ、ドン・キホーテのあこがれるドウルシネア姫、実は安宿の女。この3役を肩書つきの俳優たちが演じ、コーラスは演出家の教える映画大学俳優科の学生8人があたる。他に楽師が5人。

ライベルガウスの試みとはドラマの次に、同じテーマをバレエで、オペラでかさねるもの。もちろん歌も踊りも「ドラマ俳優の」であつて、洗練されたと言いが、一生懸命さと個性が見えて微笑ましい。今回これだけでないのがよかつた。舞台上で白粉を塗り赤鼻をつけて、3人ともピエロに変身、サーカスの幕間劇さながらの道化芝居をたっぷり見せる。この時舞台の三方を囲む高い板壁がこの場に似つかわしく、その上からのぞき込んで囁すコーラスは観

い、シリアスなドラマから、ユルスキイの主演するイヨネスコ「椅子」までである。海外公演も多い。

第94号正誤表

（ロシア演劇レポート9）のうち

頁行	誤	正
41上5	駆けめぐった	駆けめぐった
41下10	五呂	語呂
41下17	タマラー	タマール
43上1	豊に	豊かに
44上3	ポリフォニー	ポリフォニー

## 北京レポート 香港返還慶祝行事と話劇界

北京にて 坂手日登美(劇団 息吹)

今回は、1997年前半期到北京で上演された話劇の中から、北京人民芸術劇院創立45周年慶祝公演「古玩(骨董)・老北京一九〇二〜一九三八」、および上海話劇センター・上海人民芸術劇院による香港返還慶祝公演「帰来兮(いざ帰りなん)」の紹介。

北京人民芸術劇院(簡稱北京人芸)は、中華人民共和国成立(1949年10月)から、わずか3年後の1952年に創立された、現代中国話劇界を代表する劇団である。

来日公演も多く、「茶館」作・老舍、「天下第一楼」作・何冀平などは、多くの日本の観客を魅了した。

創立45周年とは言っても、そのうちの10年は、中国の人たちが「全く大きな災難であった」と表現する「文化大革命」であった。世界的に有名な劇作家老舍は、この「文革」の嵐の中で自ら命を絶っているし、北京人芸の院長であり、「日の出」、「雷雨」などの作者である曹禺も、批判され、何の仕事をすることも許されなかった。

多くの文化団体、劇団がそうであったように、北京人芸もまた、全く不毛の10年を過ごしている。

その「文革」が終わり、鄧小平は改革・開放経済政策を

推進し、「一国二制度」というかつてない制度を打ち出し、香港は、1997年7月1日、イギリスから中国に返還された。北京人芸が、香港返還のこの年に創立45周年を迎えたことは、誠に意義深いことだと思ふ。

北京人民芸術劇院創立45周年慶祝公演

「古玩(骨董) 老北京一九〇二〜一九三八」

作 鄭天璋

演出 林兆華、任鳴

舞台美術 黄海威

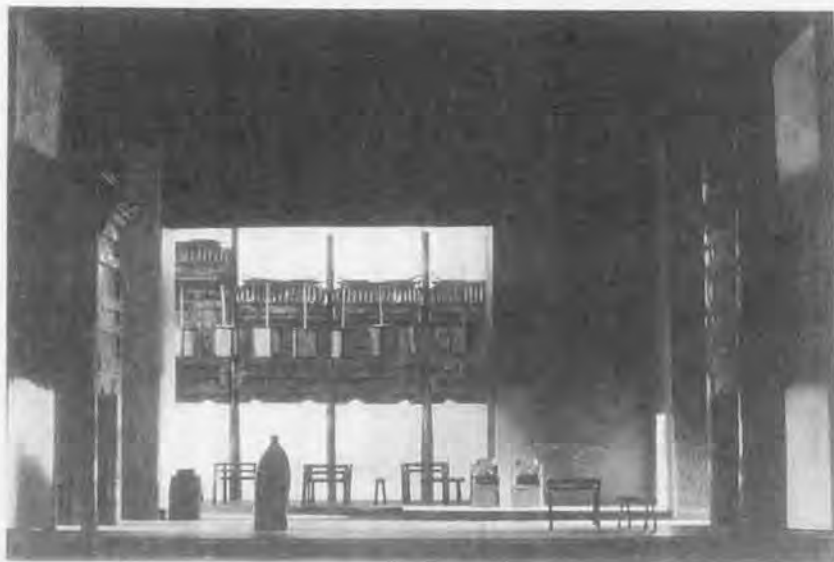
照明 張秋春、方義

あらずじ 注(一)内は俳優名

19世紀末の30〜40年間、北京は異常なほどの骨董ブームに湧いていた。北京の有名な「骨董街」の一群の商人たちと一対の青銅器の鼎を中心にした物語は展開する。

第1場 1902年、陰曆12月。

1902年、陰曆12月。有名な骨董店「至真堂」の主、隆桂臣(濮存昕)一家は、老大斧(隆桂臣の父)の81歳の誕生日を祝っている。新開店の「宝珍齋」の主、金鶴鑫(譚



「古玩(骨董)」の舞台写真

宗堯)・木製家具店の主、韓紅木(梁冠華)・日本人の黒山(何冰)など、祝いに訪れる客は引きも切らず、熱気に溢れている。

隆家の家宝は商代の青銅器の鼎で、本来は二つで一対のものであるが、隆家には、片方の一つだけがある。隆太斧は40年来、もう一方の鼎をさがし続けているが、いまだに手に入らない。

誕生日の当日、隆太斧は、鼎を客人たちの覧に供する。

この時、この店の孫支配人が、鼎のもう一方が手に入ったと持ってくる。40年来の念願であった鼎が一対揃い、隆太斧の喜びようは異常なほどである。しかし、後から来た金鶴鑫は、一目見てこの鼎は偽物だと見抜く。

隆太斧はショックのあまり息が絶え、寿筵は葬札になってしまう。

第2場 第1場の10年後

辛亥革命が起こり、清朝は倒れ、中華民国となり、袁世凱が政権を握っている。社会は動揺し混乱が続いている。官吏や金持ちたちの骨董熱はますます盛んで、骨董商たちは必要に迫られ、やむなく偽物を造って、需要に応じている。金鶴鑫は隆桂臣の急需とする名画と交換に、隆家の家宝鼎をゆずってくれと要求するが、金鶴鑫のもってきた画も、また、偽物だと隆桂臣に言われる。なぜなら、隆桂臣の手中にも、同じ画の偽物があったからである。

### 第3場 第2場の10年後

軍閥は、互いに政権を握ろうと戦っている。總統選のために、軍閥は議員を買収するために賄賂を使い、互いに取引をしている。骨董商たちもその中に深く引き込まれて、身動きができなくなっている。

### 第4場 さらに10年後

北京に日本軍が侵入してき、骨董街は未曾有の恐怖におちいつている。陰曆の12月23日、隆家では家宝の鼎を祭前に供えて、隆大斧の年忌を営んでいる。そこへ、金鶴鑫が、もう一方の鼎を持ってくる。実は、彼は40年前、隆大斧に鼎を売った白胡子老人の息子であり、彼もまた、鼎を一对のものにしたいと何十年も待ち続けていたのだった。

そこに、日本人の黒山がやってくる。彼はずつと、葉秋山（張永強）について骨董の勉強を続けてきたのだった。そして、「この鼎を譲り渡してほしい」という。隆桂臣は、日本人に宝鼎を譲ることを承知しない。黒山は、「フランスやイギリスが頤和園を焼き打ちし、多くの財宝を自由に持ち去った。中国は、自分の手で、力で財宝を守ることができなかった。自分は、この鼎を日本に持ち帰って、貴方たちにかわって守る」と言う。黒山の背後には、日本軍の姿がちらついている。

隆桂臣は、宝鼎を日本人の手に渡さないために、店に火を放ち、宝鼎を両脇に、火の中に飛び込む。

の会話で、それとわかる描き方である。しかし、だからといって、老舎は日本帝国主義の中国侵略を許しているわけでは決してない。むしろ、中国人民に限りなく苦しみを与えた根元として、しっかりと作品のなかに位置づけ、批判している。

『茶館』の終幕では、日本軍はすでに負けて去り、かわりにアメリカが国民党と手を結んでいることがわかる。そして、王利発の泰欲茶館は、不法に彼らに没収されてしまう。行き場と希望を失った王利発は、息子や孫を解放区（1945年以前の中国共産党の支配地区）に逃がして自殺をする。

そこには、老舎の抑圧者に対する怒りとともに古い中国の滅亡と、新しい中国の誕生を予測させつつも、生き抜くことのできなかった古い中国を代表する人物の苦しみと悲しみが描きつくされており、それがひしひしと観客の胸に迫り、深い感動を呼び起こした。

では『古玩』では、日本人はどう描かれているか。

残念なことに、主人公を自殺に追い込む直接的原因となる役である黒山の描き方が、役の重さのわりには不十分である。ストーリーの展開にほとんどかかかわりなく、1場から3場まで、ただ単なる骨董好きの日本人として、通り過ぎるだけである。鼎をめぐる話は、隆桂臣と金鶴鑫、二人の間の問題として展開し、横の人間関係にはあまり影響

作者の鄭天璋は、北京人芸の俳優であり、女流詩人としても知られている。

演出の林兆華は、曹禺をして、「時代のわがまま息子」といわしめるくらいに、いつも新鮮で、若々しい演出をする人である。現代の北京話劇界で最も注目される演出家の一人である。主な演出作品は、過士行作「棋人」、鳥人、「魚人」3部作。劉錦雲作「狗儿爷涅槃（犬じいさんの涅槃）」等々。

さて、今回の『古玩』。非常に期待をしていたが、観終わって、その印象のうすさに、いささかとまどつている。

あらすじをかなり詳しく書いたのは、その作品構成、時代背景を老舎の『茶館』、何冀平の『天下第一楼』と比較していただけに都合がよいと考えたからである。

だが、この2作品と、『古玩』が、大きく異なるところがある。それは、劇中の日本人の位置づけのようなものである。

具体的には、『古玩』の登場人物黒山が、主人公隆桂臣を終幕で死に追い込む、直接的役割を負っていることである。

『茶館』にも『天下第一楼』にも、日本人は登場する。だが、それは直接的にストーリーの展開を左右しない。『茶館』の終幕近くでは、日本軍が北京に進駐している。が、それは主人公王利発と国民党のスパイや、茶館の客たちと

を与えない。

隆桂臣の鼎を手に入れようとする行動が（その過程が）、十分に描かれていないために、終幕での隆桂臣の行動に説得力がないのである。そこで、隆桂臣を自殺に追い込む具体的役割を果たすのが黒山である。

演出は4場で、黒山のうしろに日本軍人を従わせ、黒山個人としてでなく、日本軍の中国侵略を暗示している。また、これは、日本による中国文化への侵略という風にもとれる。

いつもながら、北京人芸の俳優たちは、全く自然に、その役を淡々と演じ、台詞にひとつの淀みもなく、舞台は流れるように進んでゆく。うまい芝居というのは、このようなことを指すのだろうと思わせる。演出の巧みな処理で、多くの登場人物の動きは無駄がなく、まことに美しい。

次は、上海話劇芸術中心（上海話劇芸術センター）の紹介。上海話劇芸術センターは、1995年1月上海人民芸術劇院と上海青年話劇団の合併により結成された。

上海芸術センターの前身―上海人民芸術劇院および上海青年話劇団は、新中国成立初期に有名な劇作家夏衍、黃佐臨、熊佛西によって創立された。

上演作品は『日の出』・作曹禺、『家』・作巴金など、中国の作家によるもの以外、シエークスピア、モリエール、



『帰来兮 (いざかえりなん)』の舞台写真  
1997. 7. 3 民族文化宮大劇院にて

ハロルドなど、古今のヨーロッパの作家のものも多数上演している。(上演パンフレットより)

大型史詩話劇『帰来兮 (いざかえりなん)』

中華人民共和国文化部の要請により制作、上演された。

作 王倫

演出 廬昂

作曲 金榮華

照明プラン 伊天夫

舞台美術 王峻

大型史詩話劇『帰来兮』は、香港が99年に及ぶイギリスの統治から、中華人民共和国に帰属したことを祝って、上海および北京で上演された。

香港のイギリスへの租借条約(北京条約)に調印した清朝側の代表者李鴻章(許承先)、辛亥革命を指導し、清朝を倒し、中華人民共和国を成立させた孫中山(孫演)、国民党の蒋介石(許守欽)、鄧小平(潘玉民)、サッチャー首相(白芭夏)等、歴史上の人物が次々に登場する。

物語はこれらの人物を背景に、民族資本家文華生(王志文)と、その家族の歴史が展開する。

主人公文華生は香港に生まれるが、後に上海に移り、工業を興して祖国中国に貢献しようとしている若い民族資本家である。彼には元女優の美しい妻倩茹(沈映麗)がいる。

1938年、日本軍が上海を支配している。

日本軍の大佐某(孫毓才)が、美しい人妻倩茹を自分のものにしようとする。そして文華生と倩茹の間に生まれたばかりの子どもにも軍剣をつきつけ「子どもを取るか、妻を取るか?」と迫る。文華生の友人林甫(呂涼)は「この子どもは自分の子でイギリス国籍を持っている」と子どもを連れてイギリスに逃れる。妻倩茹は自殺をする。

その後、多くの変遷を経て、文華生は香港で民族資本家として成功している。娘雪莹(宋杞宇)は、イギリスで美しく成長し、父文華生のたつての願いで香港に帰ってき、父の事業を受け継ぐ。しかし、事業に対する親子の意見は鋭く対立し、自分の方針を受け入れない父から離れて、雪莹は再びイギリスに去る。終幕では、雪莹は自分の考えが不十分だったことを知り、父の懐、香港へ帰ってくる。

この作品でも、主人公文華生の運命を悲劇におとしいれる役割で、日本人某大佐が登場する。そして、その描き方は残念ながら、また、非常に典型的である。

どのように典型的であるかというと、中国のテレビや映画の中のほとんどの日本人は馬鹿で、野卑で、色気狂いで、女と見れば欲情し、軍力を振り回し、「よーし」とか「はかやろう」といったきたない日本語をしゃべりまくる。また、やたらヘラヘラ笑うかと思えば、急に威圧的になり、中国人を片っ端から斬り殺す人間として描かれる。もちろん、多くの日本帝国主義軍隊の軍人がこのようにおろか

残忍であったことも残念ながら事実である。

だが、このような日本人像を典型的だと思ふ反面、中国人の人たちがこのような日本人をいまなお日本人の典型としてとらえ、描いているとすれば、現在もテレビや映画に毎日のように登場するこの手の日本人像は、とりもなおさず、現代中国人の日本人観、日本人像、の反映であると思う。

そして、この作品でも、観客の怒りの感情は、この某大佐にストレートに向けられてゆく。つまり日本に向けられるのであって、頤和園を焼き払い、北京条約、南京条約の締結を武力で迫ったイギリスには向かっていないように思われる。

香港返還慶祝公演として上演された『帰来兮』であるが、むしろ中国と日本の関係を改めて考えさせられた公演であった。

後日、在北京のいく人かの日本人で、「古玩」を観た人たちに黒山の描き方についての感想を聴いてみた。

ある女性は「今まで自分が観た中国の芝居の中に登場する日本人のうちで、この黒山がいちばんよく書かれていると思う。他のは、もっと単純な人間像だったし、そんなものだというふうに慣れていたので」という感想を述べてくれた。日本語を勉強している中国人の大学生は、「蔭桂臣が宝鼎を守るために自殺するのはよく理解できます(その行為が)」という意見であったことも付け加えておく必要があると思う。

〔劇団 海鳴り〕

昨年11月に定期公演で、オリジナル作品「流氷の来る街」をやりました。その後春へ向け、音楽団体とのジョイント班と春公演班に分かれて練習していましたが、ジョイントが来年に延期になったり、稽古場が壊されることになったりとハプニングがあり、劇団全員で稽古場サヨナラ公演に取り組むことになりました。日程は6月28日・29日、作品は「祭りよ、今宵だけは哀しげに〜銀河鉄道と夜」でした。2回目の稽古場公演でしたが、初めて制作チーフになり、どのくらいの動員になるか読めなかったのですが、2回公演で満員、約200人の動員となりました。ますますの

成功かな？とちよっとほっとしているところ  
です。

稽古場取り壊しの方は、新しい稽古場をさがしたり、引越しの準備と同時に稽古を進めなくてはならず大変でしたが、劇団内の団結は強くなったのではないかと思っ  
ています。現在、新稽古場も見つかり、そこで残りの公演の練習をしているところです。これから、定期公演の脚本さがしや延期になったジョイント公演の打ち合わせなどまだまだ忙しいそうです。

直線で2000円の引越して、新住所は以前と変わりません。(藤本美紀子)

〔劇団 河童〕

すっかりご無沙汰しておりました。近況報告を行います。

昨年1996年は、北見市の開基100周年記念事業市民参加劇への全面的支援と河童の創立40周年記念公演「蛙昇天」(木下順二ノ作、石上慎ノ演出)に明け暮れた1年でした。今年1997年には、北見市とサハリン(樺太)のポロナイスク市(旧敷香)姉妹都市締結25周年記念公演として7月31日〜8月5日ポロナイスク市で「夕鶴」公演を行いました。

〔劇団 支木(しぎ)〕

創立35周年を来年に控えて、新人作家を発掘するため戯曲賞を設けました。入賞者には賞金と作品の舞台化を約束しています。締切は11月末。集団に属さずに作品を書いている方々にとっては、なかなか舞台にのせる機会がないというのが実情です。自作の舞台化は仲間を集めて一から始めるしか実現しないと  
言っ  
て過言でないでしょう。そんな方々の夢を一步前進させてあげたい、という戯曲賞です。応募資格は青森県内、あるいは県出身者に規定しています。興味のある方は「一報ください」。

ただ今、秋の公演に向けて猛稽古中です。県民文化祭参加作品として地元を舞台にした創作劇を上演します。

さて、助成金の社会還元について、一言。舞台創造はもとより、一般の方々に対する稽古場の解放というところまでは考えています。が、観客に対する還元については話題にもなっていない、ということ。舞台と観客は一体です。これは足元を見ない運営方法と言わざるを得ません。反省しています。

また、口はばつたいのですが、劇団通信は上演報告だけでなく劇団の抱える問題や地域

の課題を書いてくれる方が、ページを開く楽しみが増すと思いますが、いかがでしょう。

(伊藤)

〔劇団 弘演〕

リングが真っ赤に色づき、風も冷たく感じられる今日この頃、津軽路は秋真っ盛りです。

劇団弘演は第33回本公演「海と日傘」―松田正隆・作、高田潔・演出を9月16〜21日、計7ステージ(スペースステナガにて)を終えました。観客数約600名で、土曜日には大入り袋を出したほどの盛況ぶりでした。でも前半は台風の雨にたたられ、動員目標をクリアできなかったので厳しいところもありました。しかし、観客の反応は大変よかったです。ホツとしています。

弘演は大黒柱である、作間雄二を亡くしてから、いつも多くの方々のお力で、ここまで活動してきました。もちろん劇団員の努力もあってのことですが、客演出の飯田信之氏(劇団さつぼろ)をはじめ、照明家の中山功氏(SLS)、装置家の高田久男氏の力は大きなものでした。そして今回、久々に客演出として高田潔氏(劇団仲間)を迎え、団員一同新たな気持ちでこの作品に取り組みました。

ロシア人の子供たち5人を子役にし、日本の子役との交流公演となりました。さらに帰国後の8月30・31日、北見での報告公演を行いました。

ポロナイスクでは、日本人会の方の家庭を中心にホームステイさせていただき、熱狂的とも言える歓迎ぶりには、感動しました。ウオッカあり唄あり踊りありの時間を忘れての歓迎には、ただただ頭の下がる思いです。日本と較べて物質的には恵まれていないサハリンですが、そこに住む人々のこころの豊かさは私たちが忘れていくものへの警鐘と  
思  
いました。ロシア人中学生による日本の唄と朗読、踊りは、表現することの喜びで満ちあふれており、芸術文化活動の歴史的深みを感じずにはおられませんでした。

さて、来年1998年2月には、待望の中ホール(仮称、芸術文化ホール)がオープンします。制作的には「券売り」のつらい時期ですが、2月14・15日の両日、ジェームス三木ノ作「愛さずにはいられない」を公演します。(布施)

松田作品は弘演ではやったことのないタイプのもの、とまどいなながらも長崎弁にも挑戦し、また一つ新しいレパートリーを増やすことができたと思います。

高田潔氏との出合いは、咲間まみ(現在劇団仲間)の紹介でした。その咲間まみも10数年ぶりに弘演の舞台に出演し、秋本博子、作間しのぶとの親子共演も公演の話題を呼びました。

作間雄二の23回忌のこの年に、親子共演の実現をはじめ、高田氏の客演出、そして後援会の方々、団員の家族、友人などを巻き込んで公演を成功させることができたことは大きな喜びです。

来年35周年という節目の年を迎えるにあたって、一つのステップを上がることのできたのではないかと思います。

それにしても、松田作品は難しかった。と思  
うのは私だけでしょうか?...(作間しのぶ)

〔劇団 やませ〕

神戸の皆様さん、本当にお疲れさまでした。私どもも皆さんのエネルギーに触発されたみたい  
です。

6月20日・21日の梶谷伸夫ノ構成・加藤健

太郎／演出の「朗読による劇空間」賢治の世界Vol.2」は盛況のうちに終わることができました。今回は賢治の死生観（とし子への想い）を中心にすえて取り組んでみました。生誕100周年記念で始めたこの公演も、固定客も増え、来年も続ける予定です。賢治の世界に劇団員ものめり込んで、賢治が大好きになりました。

すぐ9月2日の学校公演「おこんじょうるり」の稽古に入りました。暑くて大変でしたが、公演そのものは楽しいひとときになりました。500人近い小中学生の反応がピンピン舞台に伝わってくるのです。前座の榎谷の「南部昔コ」は15分の予定でしたが、のつて話をして30分になってしまいました。芝居の方も、役者たちがいつもにまして楽しんでいました。

さて、秋の公演は榎谷伸夫／作・加藤健太郎／演出の「我が内なるラビニータ」前原真吉の夢」の再々演を11月8日・9日（4ステージ）に八戸市民劇場の例会で上演する予定でしたが、途中に第13回地域劇団東京演劇祭に招待を受け、11月1日・2日（3ステージ）駒込の300人劇場で上演することになりました。一人芝居「海村」での旅公演は何度も

あるのですが、15人を越える大所帯での旅公演は初めてで、若干の不安を抱えております。そのために稽古もハードスケジュールになり、8月に入ると「おこん」の稽古が終わった後、「ラビニータ」の稽古となり、9月からはほとんど休みなしの稽古となっております。がんばらなくっちゃ！

全日演の仲間皆さん、ぜひご覧になってください。お願いしますっ！  
（榎谷）

#### 〔劇団 だいこん座〕

全日本演劇フェスティバルには3名が参加しました。初めての神戸でしたが震災の被害も表通りを歩くかぎりではわかりませんでした。裏通りには空き地が目立っていました。『50年目の戦場・神戸』の強烈な印象、その他7劇団の公演も大変に見応えのある舞台であり、満足した気持ちになりました。地元神戸のみなさんが街の角々に案内の人を立てて下さり、あたたかい歓迎がとてもうれしかったです。

さて、だいこん座は10月11日公演の、ふじたあさや作。高橋寛演出「私が私と出会う時」の追い込み稽古の最中です。中国語の勉強などもしなければならず、四苦八苦しています。

劇団員の気持ちを本番に向けてどう結集していくか、いつもハラハラしながらの開幕をかえします。

#### 〔劇団 仙台小劇場〕

神戸のみなさん、本当にお疲れさまでした。仙台小劇場は、劇団員が「死のロード」と恐れていた連続移動公演も終わりに近づきました。夏休みの親と子の劇場「オズの魔法使い」（8月23・24日、浅野公蔵脚色、石垣演出、小波秀雄音楽）の以後、宮城県や地元の環境団体とタイアップして、「温暖化の笑劇 パート1〜DANGERおんだんか」、「パート2〜ゴミください」県とのタイアップで「救急医療わが家の九ヶ条」、岩出山という町の小学校で「山猫の使い」（いずれも、石垣作・演出、高橋直人音楽）といくつかのユニットに分けての上演ですが、1週間に1本のハードな公演でした。

また、その間にも仙台市太白区が開いている芸術講座を劇団で担当、息つく暇もありません。12月には新しい移動公演が始まるのですが、本がまだできあがっておりません。間に合うのかと劇団員は不安に思っているこの頃です。  
（石垣）

#### 〔演劇集団 土くれ〕

みなさんしばらくです。劇団通信をここ何回か出しはぐれてしまいました。

昨年10月末、第45回公演として、平石耕一・作「五色の華」を上演しました。演出はこれまでの座付演出の福田から外部演出の玉野井直樹氏にチェンジ。中年の生きさまや離婚などを題材にした戯曲は、「土くれの労働者演劇はどこへ行ってしまったのか」「都合主義」など散々の批評の反面、「見終わった後喧嘩がくぐくの議論が沸騰したよ」「これまでは何か押しつけられた感じの舞台が多かったけど、舞台と観客がやっとならなくなった。近づきやすい内容だった」など賛否両論、反応は大でした。舞台は「役者が生き生きしていた」「正面切った演技が少なくなつて役の交流ができていた」などおおむね好評でした。

さて、今年には劇団創立30年。98年2月麻布区民センターで、平石耕一の書き下ろしで、平沢計七の青春時代を題材にした作品を、同じく玉野井演出で30周年記念公演として上演する予定です。作品の書き上がり次第というところです。

布演劇市」も、本年10周年を迎えました。よろしく。  
（石塚）

#### 〔東京芸術座〕

村山知義没後20周年記念公演・村山知義作稲垣純演出「死んだ海」の開幕を目前にした8月28日朝、劇団代表清洲すみ子が間質性肺炎のため急逝しました（享年82歳）。

悲しみをこらえての30日舞台稽古、そして31日マチネで初日を六行会ホールで開け、同日あわただしく喪服に着替え、信濃町の千日谷会堂での葬儀委員長勝山俊介氏による劇団葬として通夜、翌9月1日の葬儀、告別式をとり行いました。

清洲代表は、夫、故村山知義の没後20周年記念公演「死んだ海」を大変期待しており、また、この12月には新国立劇場のオーブニング企画、村山知義脚色、木村光一演出の「夜明け前」に出演が決まっております。それを大変楽しみにしております。その矢先でしたので本人も残念だったろうと思います。

私たち劇団員一同、村山・清洲両代表の遺志を引き継ぎ、再来年の劇団創立40周年に向けて頑張っていく決意です。葬儀に際しましては、全日演のみなさんか

らもご厚志、ご厚情を賜り、この誌面を借りまして、団員一同厚く御礼申し上げます。

悲しみにひたる間もなく、9月2・3日練馬文化センター、6・7日前進座劇場、8日大田区民プラザ、9・10日朝日生命ホールと「死んだ海」の記念公演が続き、無事終了すると、学校公演の稽古と巡演スタートです。

この12月で終幕する「12人の怒れる男たち」（レジナルド・ローズ作、額田やえ子訳、稲垣純演出）は9月15日スタートで、12月26日まで70回の公演が組まれています。この12月には通算1000回公演を突破して幕を閉じます。

【あわて暮やぶけ芝居―東京空襲3・10―】（大橋喜一作、杉本孝司演出）は9月26日スタートで12月20日まで60回、日本最大の高校合同鑑賞会「山形高校演劇教室」（24回公演）が組まれています。

12月には恒例のアトリエ公演も予定しています。なお、劇団創立40周年記念企画は、来年9月より開始されます。その第1弾は、リアリズム演劇不朽の名作、ゴリキキ作「どん底」を、今年のロシアの演劇祭で「砂の女」（荒木かずほ出演）で「黄金のマスク賞」を総ナ



メシた演出家、ウラジミール・ペトロフ氏を  
招聘しての総力公演です。

また、創立40周年を記念しまして、戯曲を  
公募します。新作および未上演戯曲(創作)  
で、入選賞金は100万円、佳作10万円、縮  
切は1998年8月末日です。  
全公演の作家のみなさん、ふるって応募し  
て下さい。(郡司勇)

〔青年劇場〕

フェスティバルお疲れさまでした。わが劇  
団は老若とりまぜて6名の参加。ただいま報  
告集を作成中です。

劇団は今、布勢博一・作、堀口始・演出「甦  
る夏の日」公演の稽古と普及の渦中にありま  
す。広島で被爆し、その後女優としての道を  
歩んだ女性の50年後の夏の日を、彼女の参加  
する演劇ツアー先青森の、とある寒屋を舞台  
に展開するもので、作家布勢さんの青年劇場  
第一作目となります。この公演は、8月の総  
会で実施した劇団代表者をはじめとした大幅  
な世代交代の直後の公演として特に大切なも  
のと位置づけています。

この総会までに劇団創立メンバーなど第一  
世代の大半が以前に定めた定年退職制度にも

せん。この運動をさらに広く推し進めるよう  
ともに頑張りましょう。

劇団の代表が次の通り変わりましたので、  
お知らせいたします。

前青年劇場運営委員長 瓜生正美  
新 “ “ “ 福島明夫

新しい体制で歩み出した青年劇場ですが、  
今まで以上のご助力、ご鞭撻のほどをよろし  
くお願いいたします。(葛西和雄)

〔劇団 銅鑼〕

秋だ。すこい酷暑と残暑のあとでも時が移  
ればやっばり秋は来る。創立25周年記念第一  
弾「池袋モンパルナス」は9月12日俳優座劇  
場で幕をあげた。小雨模様ながら満員の客席  
には年輩者も多く、舞台に繰り広げられる(激  
動の時代を駆け抜けた画家たち)とともに昭  
和史を確かめ合うような初日風景となった。

「池袋モンパルナス」打ち上げの翌日から、  
学校公演2学期に向けて「俺たちの甲子園」

「センポ・スキハアラ」の準備と稽古再開だ。  
演劇鑑賞を待つ中・高校生のもとへさらに練  
り上げた舞台を届けよう。この秋は公演2班  
が秋桜のそよぐなか、全国を駆け巡る。

「センポ・スキハアラ」ニューヨーク公演

とついで退職しましたが、以後は団友として  
公演や創造活動に参加することになってお  
り、この「甦る夏の日」には4人の団友が出  
演しています(これまでに11人が団友となっ  
ています)。

この公演が終わると、3つの公演班に分か  
れての巡演公演となります。5月に東京公演  
したばかりの新作「こんにちかはかぐや姫」(北  
野茨/作・瓜生正美/脚本演出)が九州、関  
東地域へ。「すみれさんが行く」は東北、関  
東、近畿、とまわって12月朝日生命ホールで  
さよなら公演(通算で600回以上の公演で  
す)となります。「翼をください」は中四国、  
東海地方です。各地の劇団のみなさんには何  
かとお世話になっていきます。お近くでの公演  
の際はぜひご来場ください。

8月は総会に前後して2班公演がありまし  
た。日本劇団協議会主催のユースフェスティ  
バルには「翼をください」が参加しました(5  
ステージ)。あしかけ8年のこの作品はずで  
に700回以上公演を続け、東京でも4回目  
の公演ですが、おかげさまで会場のサザンシ  
アターは連日大入りの満員でした。

また、全国の演劇鑑賞会を中心に上演を重  
ねてきた「遺産らぶそでい」は、今回も神奈

は記念公演第2弾。「NY公演を成功させる  
会」の呼びかけに応じて協力金も集まりつつ  
ある。感謝！その名も懐かしいダニーケイ劇  
場で1月16日〜23日まで。8ステージ。日米  
友好の一助ともなれるよう壮大な気宇をもつ  
て微力をつくしたいものである。ただいま忠  
援ツアーを募集中です。詳細は劇団へどうぞ。

さて、銅鑼創立当初から、われわれには一  
つのモットーがあった。「外に開かれた劇団  
体質を目指そう」。記念公演第3弾イブセン  
作「ヨーン・ガブリエル・ボルクマン」上演  
はようやくたどりつこうとする目標地点の一  
つといえる。演出担当のセルゲイ・ユールス  
キー氏が9月下旬ロシアから来日。銅鑼並び  
に客演メンバーとの交流を深め、来春4月上  
演への準備に入った。

他に演鑑巡演「橙色の嘘」を加え、銅鑼に  
とってはいささかハードなラインナップであ  
るが、ウンと背伸びをしてとびつき、乗り越  
えたい。背筋をシャンと立てれば、身長も伸  
びようというものだ。諸兄姉の叱咤(教師を  
切にお願い申しあげます。(菊池佐致子)

前号の郵便番号を間違いました。不手  
際をお詫びし、訂正をお願いします。

川、北海道と公演してきましたが、初演から  
8年、作者の高橋正岡さんが農業や経済情勢  
の変化を反映させて年ごとに改作を続ける  
という「快拳」を成し遂げながら、ついにロン  
グランにピリオドを打ちました(千葉県袖ヶ  
浦にて通算300回目)。

1998年は2年に一度の小劇場公演(2  
月)の年にあたります。団内公募制で現在作  
品の選考中です。4月はジェームス三木さん  
作・演出で新作の予定です。構想は日本国憲  
法誕生のドラマを凝縮した形で描こうとする  
もので、憲法を巡ってきな臭い動きが目立っ  
てきている現在、大いに話題を振りまく作品  
になると期待しています。

さて、東京都が発表した「財政健全化計画」  
には、都の文化施設の使用料大幅値上げが盛  
り込まれていて、これによって大きな痛手を  
被ることとなるオーケストラの方たちを中心  
に反対運動が起き、音楽、演劇など幅広いジ  
ヤンルの「大幅値上げを許さない芸術・文化  
団体の会」が結成されました。あの青島知事  
は「皆さんも私の立場に立てばきっとこうす  
るでしょう」と、あくまでごり押しの姿勢で  
す。大規模な開発に巨額の税金を投入し庶民  
からはささやかな楽しみを奪う政治は許せま

〔劇団 上野市民劇場〕

まずは、8月の全日本演劇フェスティバル  
の成功おめでとう。神戸、大阪の各関係して  
いただいた皆さま、本当にご苦労さまでした。  
また、素晴らしい舞台を見せて下さった出  
演劇団の方々お疲れさまでした。

私たちは、公演2週間前でもあり参加をた  
めらっていました。参加して大いに刺激を  
受け、触発されて、追いつき追いつかぬ  
かかりました。お陰で、第35回公演「私が私と  
出会う時」は好評裡に幕を下ろすことができ  
たことを報告させていただきます。

よい作品と出合い、元気な仲間と出合い、  
創立46年目の新たな出発に意義深い公演とな  
りました。この成果を礎にして来年に力強く  
進みたいと願っています。年内は、地元文化  
祭、県民文化祭、全国アマチュア演劇大会、  
そして昨年交流(訪韓)のあった釜山芸術大  
学の歓迎と、取り組み準備で忙しくなります。

(東 恭子)

〔劇団 阿修羅〕

劇団阿修羅第6回公演は、ジョルジュ・ソ  
リヤ作、松木圓演出による「証言(恐怖改題)」  
でした。東京は9月5日〜7日まで、品川六

行会ホール、名古屋は9月15日東海テレビレピアホールにて、計5ステージを上演しました。動員数約700名弱といったところで、きよほうへん、様々な反応でした。

ローゼンバーク事件を背景に、事件の検察側証言者になり、偽証をしいられた50歳を過ぎて地位も財もある医者が、1日にして転落ではなくて、真実にめざめるという話です。青春の苦悩ではなくして、中高年の苦悩が現代的でありました。

私たちはこれからも、人間らしく生きるかということ、人生に貫き通すためにはどうすればよいかを迫及していきます。(川崎)

〔演劇集団 石るつ〕

演フェスIN K O B Eは、参加人員385名に達し、大盛況で終わることができ、出演劇団として嬉しいかぎりです。

実行委員会、事務局のみなさん、舞台関係者の方々の尽力に心から感謝しております。

さて、休む間もなく、12月公演の準備に入っております。第44回は、新劇の原点ともいえる明治末期から大正にかけての短編を2本、公演します。

演出は俳優座・演出部の内田透氏を招いて

の仕事となります。

〔たのむ〕里見 淳・作

〔和泉屋染物店〕木下李太郎・作

12月12日(金)午後7時

13日(土)午後1時・7時

深川江戸資料館小劇場

また、98年1月の池袋(東京芸術劇場・東京地域劇団演劇祭)においては、発表会参加として、『おこんじょうるり』(さねとうあきら・作/境野修次・脚色)をステージ上演します。

〔演劇サークル 麦の色〕

全り演の皆さま、連日のご奮闘、ご苦労さまです。神戸でのフェスティバル成功裡にて終了し、本当によかったですね。

9月に医療費が値上がり、病気をしても医者にかかりにくいことになりました。ますます健康維持のむずかしい世の中。困ったものです。

さて、私たちが毎年、秋の公演で参加している麻布演劇市も10周年を迎えました。10年前、俳優座の佐伯さんが提唱して、港区での公共施設を利用しての演劇集団が共に交流し、麻布区民センターホールを中心に年に6

造にどう協力、貢献できるかを探る自治体自身の試みであったように思えます。

上演作品は、ノエル・カワード作の『あひびき』(映画にもなりました)で、埼玉はキヤストとして7名が参加しました。劇場舞台(小ホール)でのゲネプロに近い稽古を何度も繰り返し、劇場付スタッフが3日間、参加者をいねいに指導し、そして、本番の裏方は、専門スタッフが見守る中で、芝居参加が初めてという人たちが見事にこなしました。

そして、10日後の9月21日(日)、埼玉県の総合文化祭が彩の国芸術劇場で開催され、大ホールで増田邦彦氏の構成演出による『なつちゃんの乳母車』が上演されました。県ゆかりの詩人、大木実の作品を構成舞台にしたもので、埼玉から3名が参加し、大木実の素朴な生活感あふれる詩を朗読しました。

次回公演は、埼玉県主催による、埼玉文学館浦川市民ホールの柿落とし公演として、

98年3月15日(日)

田山花袋・作 一柳俊邦 脚色

由布木一平 演出

〔田舎教師〕(2幕・9場)

に決定しました。この作品は林清三という若い貧しい教師が主人公で、この友人たちも含

め、若い男性が多数登場します。若者の少ないわが劇団にとって苦しいところですが、何とかこのチャンスをお手に、若者を劇団に迎え入れようと、大々的に募集宣伝活動を展開しようと思っております。(中山浩亮)

〔京浜協同劇団〕

全り演総会と神戸でのフェスティバル、ごくろうさまでした。経費が一人5万円もかかるので大変だったのですが、24名で参加しました。このうち、稽古場建設を支えてくれた人たちが新しく作った「京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間」という会員が7名も参加してくれました。

私たちはホテル近くの広場の他に、仮設住宅2ヶ所を回って『権兵衛太鼓』と腹話術を上演しました。見てくれたお年寄りから「生きていてよかった」、「あなたたちが来てくれたことは一生忘れません」と言われたときは、「来てよかった」と思いました。お世話をしてくれた神戸の劇団の仲間たち、ボランティアの人たちに感謝します。ありがとう!

〔権兵衛太鼓〕はフェスに続いて9月13日、14日に岩手県湯田町の銀河ホールでの地域演劇祭に呼ばれて出演、ここでも大変喜ばれた

回、各集団がもろまわり公演を行い、港区民にも親しまれてきた麻布演劇市も、10年たち、8月に記念レセプションを行いました。感慨ひとしおでした。

私たち麦の会も、10月24・25日演劇市に参加し、兼平陽子・作『懐かしき人々』を公演します。全員張り切って猛稽古中。よろしくおねがいします。(吉岡利根雄)

〔劇団 埼玉〕

全日本演劇フェスティバル神戸、お疲れさまでした。日頃、観る機会のない、全国各地で活躍する集団の舞台に接することができた、素晴らしい3日間でした。特に地元劇団の方々のご苦労に対し、心から感謝と御礼を申し上げます。

さて、私たち埼玉は、6月の「奇跡の人」公演以降、97年9月8日(月)・11日(木)と、彩の国芸術劇場主催の舞台技術ワークショップに参加しました。この企画は、全国の公共ホール、劇場の職員(特に舞台関係者)を対象に、舞台づくり及び進行のノウハウを「から勉強しよう」というものです。入れ物(会場)だけ作ればよいという時代から、一歩踏み込んで、その中で何を作り、地域の文化創

ようです。25年間打ち続けた「保存会」的メンバーに加えて、今年から新しいメンバーが加わりましたが、幸せなデビューをすることができました。

さて、今年11月から12月にかけての公演は、黒沢参吉作『金魚修羅記』で、黒沢没後15周年記念公演としてやることになりました。全り演の議長として大活躍した黒沢の代表作の一つです。いま、『演劇会議』誌上でリアリズム演劇論が展開されていますが、黒沢が渾身の力を込めて書いた作品です。どうぞ見て下さい。

11月7日夜、8日昼、11月29日夜、30日昼、12月9日夜、3会場5ステージをやる予定です。(城谷)

〔劇団 やまなみ〕

(えんふえすIN K O B E) 実行委員会のみなさんありがとうございました。被災地の仲間を励まそうとの(えんふえす)ですが、参加した4名は励まされて帰ってきました。

8月10日、「劇団やまなみ」の公演で始まった(こうふ演劇祭)も、9月26日「劇団南天」の公演を最後に、10月初旬予定の打ち上げ会を残すだけとなり、すでに、次の二つの

公演の稽古に入っています。

11月29日(土) 於 石和町

第16回全日本民医連青年医師交流集会公演

12月6日(土) 於 甲府市総合市民会館

県芸術祭参加

第175回公演

『いのち燃えて』(ロングスパート) 2幕7場  
河野通方が、民医連系の病院(作者の勤務先でもある)の倒産、再建を題材にしたものです。青医連交流集会実行委および山梨勤医協青年医師の会よりの要請を受けての書き下ろしです。演出は、梅津幸三。梅津は、その病院の友の会の会長でもあります。医局の青年医師をはじめ多くの現場のみなさんの参加をえて、燃えた舞台になるものと思います。

その間、10月19日(日) 上野原町桐原中学校創立50周年事業公演、都留文科大学演劇サークル「まつゆき」による「ガラスの家族」の制作・スタッフ協力。11月3日第50回県芸術祭演劇部門へ参加します。

秋の公演が終わって、12月、劇団総会。  
98年3月に県移動芸術劇場上野原町桐原地区公演。6月・春の定期公演。山静ブロック・ゼミ、東会議議総会・ゼミ。秋の公演、絵巻、県移動芸術劇場と、エンドレスに続きます。

### 〔劇団 名芸〕

新体制ころろうさまです。いろいろ大変でしようがよろしくお願いします。

名芸は去る6月の、地元天日文化小劇場の柿落として、「地蔵ものがたり」(脚本/栗木/演出/佐野秀明)を、他ジャンルおよび区民参加合同にて上演しました。3ステージとも超満員で、今後、同会場を使う足がかりができたと思っています。

さて、9月13・14日も同じレバを南子ども劇場で上演し、約1200人の親子に観てもらったことができました。ただ、29年続けてきた子ども劇場は、その意義を認めつつも、あまりにも労力がいり、これからの方向性をみんんで話し合っているところです。

「神戸」へは7人参加し、刺激をいっぱい受けてきました。また、ぶつかってしまった「反核舞台人の集い」は、栗木作品も含めたオムニバスドラマ「明日へ」を上演し、約830人の観客とともに、憲法施行50周年として「人権問題」を考える機会となりました。現在は創立35周年記念として、次の定期公演にとりくんでいます。

『夢舞台』(作/栗木・演出/片野耕治)

12月5〜7日 名芸平針小劇場

こんなに忙しいと劇団員は、ともすれば受け身になってしまいます。

3日前、ウラ(照明)の女子団員から、全体がもつと(ウラ)を身につけてほしい。仕込みの日、指示がないと何もできずに立っているだけというみつともないことだけはなくしたい。団員は、装置、照明、音響のどれかに入る。照明については、劇団にある照明器具の点検と補修、カラーペーパーの整理とカラーナンバーの習得から始めたいとの提案がありました。直ちに実行することにしませう。どのようにスケジュールをこなそうかなどとセコイ考えに汲々としていた私たちに、強弱なストリート・パンチをあびた思いです。確実に、前進せざるにいられない力がここにもあることを知らされました。(もん)

### 〔劇団 静芸〕

神戸の皆様、フェスティバルご苦労さまでした。全国の舞台を観ることができ、感動し、帰りました。ありがとうございました。

静芸は、11月15・16日と、静岡ライブシアター97に参加する形で、「プロードウェイ・パウンド」(ニール・サイモン作)を伊藤幸夫演出で、サールナートホールにて上演しま

す。昨春秋、「思い出のブライトンビーチ」上演が好評で、その続編でもあるニール・サイモンの青春3部作の一つです。

2時間半の大作で、しかも、家族の問題に深くわけ入ったこの作品は、俳優の一人ひとりの力量が問われるだけに、必死の稽古にとりくんでいます。次身の通信で、いい報告ができるよう、総力をあげてがんばるつもりです。(山崎三郎)

### 〔名古屋演劇集団〕

全国演劇フェスティバルお疲れさまでした。現地スタッフの皆さまありがとうございました。おかげでたいへん有意義な時を過ごすことができました。

さて演集ですが、10月に左記の公演を予定しております。

『新美南吉物語〜貝がらの詩〜』

牧野不二夫より

牧野不二夫作・北原雅子台本・演出

10月17日(金)、18日(土)、19日(日)

名古屋市西文化小劇場

『こんぎつね』や『手袋を買いに』で有名な新美南吉とその周りの人々を描きます。

(磯谷誠)

『夢シリーズ』第5作目で、記念碑となる舞台にしようと思っています。

観劇の上ご意見をいただければ幸いです。来年4月には大作「オセロ」に挑戦します。時には立ち止まることも必要かと思いつつ、もうしばらくは走り続けようと思意しているところです。よろしく! (栗木)

〒457 名古屋南区汐田町11-8

TEL 052-821-3691

### 〔劇団 名古屋〕

入団して3年、はじめて全日本演劇フェスティバルに参加。ふだん観ることのできない全国の劇団の芝居や太鼓や、国宝級の狂言まで間近に観ることができ、笑い転げたり涙したりワクワクしたりととても忙しくて、そしてとてもぜいたくな3日間を過ごしました。

日本中にこんなにたくさん仲間がいて、刺激しあったり、助け合ったりできるなんて、すごく素敵なことだと思います。劇団からは7名が参加しましたが、神戸での体験は、これから芝居を続けていく私たちにとって大きな力になると思います。ニコニコ関西弁?でお世話をした下さった神戸のみなき

ん、本当に、本当にありがとうございました。

さて、私たちは、40周年記念公演第2弾の上演に向けて忙しい毎日を送っています。敗戦後、軍国主義から民主主義へと目まぐるしく転換した混乱の時代をたくましく生きた人々の物語です。宮崎駿監督の「もののけ姫」のキャッチコピーは「生きろ」。私たちもお客さん一人ひとりに「たくましく生きろ」と伝えられるような芝居をつくりたいと思っています。初めて聞くような労働歌や、当時はやった歌謡曲の練習に、苦労しています。

(久保田 円)

創立40周年記念公演第2弾

名古屋市民芸術祭97参加

『パパのデモクラシー』

永井 愛・作 久保田 明・演出

11月8日(土)・9日(日)

名古屋市港文化小劇場

### 〔劇団 夜明け〕

神戸演劇フェスティバル、大阪、神戸の受入劇団の皆さま、本当にありがとうございました。そして、ご苦労さまでした。演劇2会場、宿泊場所3会場、交流会は別会場、人通りの絶えた夜の元町アーケード街を何回も通った

こと、印象深いものでした。

総会でのフェスティバル実行委員会堀さん(でしたか?)のあいさつにあった「震災後、街の姿はそこに住む人の姿だったということに気づかされた。私たちはこれまで本当に街の姿を見てきたのだろうか」という問いかけは、心を打ちました。そしてどういふことだろうかと思いました。

街の姿はそこに住む人の姿、私たちの街、中津川にあてはめると、人の姿をどう説明できるだろうか?。これから様々な面から考えていかねばならない課題をつきつけられた気がしています。

あのすさまじい震災を体験した劇団だから言える重み、私たちはその重みを一生懸命受け止め、創造に生かしていかねばならない、そう思っています。

9月20日、第3回岐阜県民文化祭演劇フェスティバルが中津川文化会館で開催され、はぐるまの『カナナ咲き乱れるはて』と夜明けの『ザ・ウインズ・オブ・ゴッド』の2作品を上演しました。

観客数603名、7割が大人の観客でしたが、それぞれ異なる切り口のメッセージで戦争を描いた2つの舞台、見えたえがあつたと

多くの人から評価されましたが、夜明けの舞台の多くの問題点を、翌日ふじたあさやさんはワークショップを通して指摘してくれました。「いいところになると聞こえなくなる」という指摘、大変勉強になりました。(鈴木)

#### 【劇団 はぐるま】

神戸での全日本演劇フェスティバルには、はぐるまは『カナナの咲き乱れるはて』を持って参加しました。毎度のことながら、全リ演での上演には緊張してしまいます。みなさん目の肥えた方たちばかりで、後で何を言われるのか、ちよつと怖いものがあります。

そのせいではないと思うのですが、合唱がほんの少しばかり乱れてしまいました。リハーサルではちゃんと歌っていたのに……。

これが本番の怖さでしょうか。声楽の先生にも何度か来てもらい、稽古時間の多くを歌の練習に費やしてきたのに、ウチはなかなか歌がうまくなりません。それでも、芝居の内容に関しては、満足のできるものであったと思っています。「戦争を風物化させてはならない」と、こばやしはよく言っていますが、風化どころか、戦争があつたことすら知らない世代が増えている今、特に若い世代に向けてこの

芝居のメッセージを送り続けたいと思います。京浜の若いお二人(長坂さん、隅広さん、ありがとうございませう)が、交流会で「感動しました」と感想を言ってくれました。この後、中津川と岐阜で公演を行います。中学生、高校生にこそこの芝居を見てほしいと思ひます。

今年は、フェスティバルがあつたり、県民文化祭参加などがあり、かなり変則スケジュールです。7月は夏のファミリー劇場『王子と乞食』の本公演と移動公演をこなし、約8000人のお客様に来ていただけました。神戸の『カナナ』を挟んで、9月14日には『王子』の移動。再び『カナナ』を9月20日に中津川、10月15日から18日まで岐阜で上演し、11月30日には『王子』の移動公演、と交互の上演になります。大道具も倉庫へ入れたり出したり……。両方にかけている役者も大変です。こんなに忙しいのも今年くらいでしょうが、大きな山は越した感じです。

来年の予定もぼちぼち決まってきました。3月には、松田正隆作、『月の岬』を汲田正子演出で上演します。また数回の本読み程度で本格的な活動は11月以降になります。今まではぐるまが上演してきた芝居とはひと味

違ったものになります。キヤスティングなど難しい問題もありますが、新しいはぐるまに挑戦です。

5月9日、10日は、『新島の飛騨んじい』の東京公演です。場所は東京芸術劇場。関東ブロックの方々をはじめ、たくさんの方に見ていただきたいと思っています。(内田 薫)

#### 【劇団 すがお】

神戸の大変に充実したフェスティバルをありがとうございました。また勇気が湧いてくる、そんなフェスティバルでした。

韓国の劇団馬山代表の李相龍代表も特別に参加させていただき、感動を持ち帰られたと思います。そんな感謝の感想文が届きました。ところで、劇団すがおの公演報告……

#### ◆桑名演劇塾第2回公演

(公募の市民と劇団すがおの公演)

『石取祭りよ夜空にゆれる十二張』

栗木英章/作 加藤武夫・吉良史郎/演出

8月10日(日) 1回公演 桑名市民会館

800名

天下の奇祭といわれる石取祭を背景に家族や、助け合いながら生きていく町の人々を描いた作品。作品は劇団名芸の栗木さんに依頼

しました。1回の公演しかできませんでしたが、多くの観客の感動を呼び、市民の大きな話題になりました。心配された財政も何とかプラスマイナスゼロですみました。暑い夏でした。

◆次回公演 県民文化祭・アマチュア演劇大会三重大会(10月10日〜12日) 出演

10月10日(祝) 菟野町社会福祉センター

『こたけの話』高橋いさを/作

加藤 武夫/演出

韓国から釜山芸術専門学校を特別招待しています。ほかに高校演劇3校、劇団四日市、劇団はにわ(名古屋)、柏崎演劇研究会(新潟)、飯山市民劇団土(長野)に地元の話語りの人たちが出演します。

◆韓国・慶尚南道/馬山市主催 馬山国際演劇祭 全韓国演劇祝祭(10月6日〜19日) 出演

『こたけの話』高橋いさを/作

桑名国際文化交流実行委員会のメンバーと合わせ、16名で参加して交流してきます。

\*アイルランドの劇団から来年、日本との交換・交流の希望が寄せられています。情報があつたらお知らせ下さい。

#### 【劇団 たけがえ】

全リ演に加盟させていただいて初めての『総会』と『フェスティバル』。緊張の面持ちで参加しました。

登録を済ませ辺りを見回して、まずネクタイをしている人が一人もおられないことに戸惑い、それとなくネクタイを締めて余裕のある態度を装って会場に落ちつきました。

さまざま問題に真摯にとりくむ会議の雰囲気、皆さまの姿に感動を覚えましました。ことに東西両議長からの報告にはいろいろ思いをめぐらされました。久しくこうした問題を論ずる場から遠ざかっていた自分を想い、両議長には失礼ながら懐かしく拝聴いたしました。私たちの劇団でも、地域に根ざした演劇の創造と普及とか、演劇を通しての人間形成などといっておりますが、今までどれだけ具体的にこうした問題を劇団内で話し合っているだろうか……。そしてふと「癒しの文学」という言葉を考えていました。

今一度、かつてのように情熱を持って自分の根本を見つめてみようと思ひました。さて、私たちの活動報告です。

93号で報告しました、今年初めの計画がすべて壊れてしまい、意気消沈して先号では類

かぶりを決め込んでおりました。

いろんな問題が絡み、今年も春の公演ができず、現在は、10月10・11・12日に韓国の劇団馬山からの招待を受けた「国際演劇祭」参加と、11月9日に予定している「市民劇場」に向けて、「11びきのネコ」(作/井上ひさし)を追いかけております。

また、私たちと親交のあるポルトガルの劇団から、来年リスボンにおける万国博覧会での合同公演の打診があり、急遽代表と団員2名がお盆休みを利用して視察と打ち合わせにポルトガルに行ってきました。(柴野千栄鶴)

#### 〔劇団 京芸〕

30年ぶりの京都労演例会「国語元年」(井上ひさし作・平岡秀幸演出)は、連日通路まで埋まる超満員で、労演の予想をはるかに上まわる盛況となり、好評のうちに終了しました。これから地元劇団と鑑賞団体の新たな関係が生まれそうです。

94号に掲載された「GOTOWEST」(横山一真作・幸昇彦演出)は、さらに改訂を加えて京都の中学校を皮切りに上演がはじまります。

大阪公演 10月13日、19時 近鉄小劇場

#### 〔劇団 息吹〕

「おはよう!」?・劇団息吹です!

夏の終わりに北から南から神戸に集まり、演劇フェスIN KOBEBEを成功させ、苦勞さまでした。参加者によいお芝居を観てもらおうと、演目をひっさげて参加した出演劇団の皆さまお疲れさん。

当日の受け入れ体制・事務局・演劇フェスの裏方、長い間準備活動に昼夜寝食を忘れ、頑張ってくれた兵庫・神戸の劇団仲間、ありがとうございました。「拍手・拍手・拍手」さて、わが劇団は今秋の公演に向けて稽古の真っ最中。出し物は、山下惣一原作「ひこばえの歌」より、脚本高橋正園・演出木田昌秀・「遺産らぶぞでい」です。

出てくるのがお百姓さん。百姓仕事なんかやったことのない者が役づくりに右往左往。おまけに言葉が九州の佐賀弁、ときたまにやもうはちやめちや。「ええいっ!男は愛嬌、女は度胸」で、なにしろ、出演者が多くて、裏方がいなくてしっくはっく。果たしてどうなることやら。「隅から隅まで、すずすいとち」

チョンー (ガマちゃんこと柳辺)

11月14・15日 東大阪のライティホール  
12月12・13日 八尾のプリズムホール

全り演諸兄姉のご来場願うや切。

劇団の最長公演記録を更新しつつある「そらべえこくらくへゆく」は8年目、東海・関東地域のおやこ劇場を元気に旅を続けております。

これもいよいよ来年5月で終演、8月からはそのべえシリーズの新作「そうべえまつくろけのけ」(田島征彦原作・つげくわえ脚本演出)が幕を開けます。(藤沢)

#### 〔劇団 未来〕

劇団未来第48回公演・97大阪新劇フェスティバル参加・大阪市助成公演として、和田澄子作「フォト・ストリー」(一枚の写真から)を、97年10月10日(祝)11日(土)の3ステージ、大阪上本町6丁目の近鉄小劇場、森本景文演出で上演します。

座付作者の和田さんの創作劇の上演は、5年前の「わが街大阪ひがし」以来で、結婚式を控えた一人の青年が、自分の生まれた日の写真を見つめることによって、自分のルーツを探り出していく中で、「愛」とは何かをあらためて考えていくというものです。

準備は遅れていますが、寺下保が逝去した後を引き継いで、復活した森本景文が演出に

#### 〔劇団 大阪〕

水らくこ無沙汰しております。

6月に45回本公演/大阪春の演劇まつり/大阪市助成公演として「タッチェーから吹く風」(作・西岡誠一/演出・堀江ひろゆき)近鉄小劇場にて公演(4ステージ)。

8月のフェスティバルIN KOBEBEで皆さんに観ていただきましたが、いかがだったでしょうか。両方観ていただいた方からは、神戸の方がよかったといわれましたが、さて、秋の公演は「そして、あなたに逢えた」(作・近石綾子/演出・熊本 一)を近鉄小劇場で上演します。同じ作者による「楽園終着駅」に続く痴呆症老人のホーム生活を描いた作品ですが、戯曲を読んだ劇団員に「これボケも怖くない」と言わしめた作品です。

今回は助成もない、経済的に大変苦しい公演で、1300枚以上の売りがないと赤字になってしまう、制作は頭をかかえています。

12月に総会。稽古場のローン返済を終え、長期的見通しをもった計画、劇団運営が大切になってきています。

☆「そして、あなたに逢えた」

11月21日(金)22日(土)23日(日)  
近鉄小劇場

あたり、劇団員と縁がかりで創造に普及に努めていきます。(藤岡)

#### 〔劇団 きつがわ〕

8月末の神戸での全り演フェス、上演劇団や地元の方々には本当にお世話になりました。ウチからも10人ほどが参加、いろんな芝居エネルギーを受けとめて帰ってきました。

さて、劇団では今、春の公演で予想外(?)の好評を得て、再演することになった「勳章の川―花岡事件」の公演に向けて、稽古の真っ最中です。歴史教育への攻撃や改憲策動が強まっている今日、「戦争の傷あと」を若い世代に伝えることの大切さをズバリ描いたこの芝居は、とても貴重です。どうやって観客層を広げ、集めるか?笑いと涙あふれる舞台にどこまで近づけるか?―いっぱいの課題を抱えて奮闘中です。(山田)

#### 〔勳章の川―花岡事件〕

(作・本田英郎 演出・林田時夫)  
10月18日(土) PM 6:30  
19日(日) PM 2:00  
クレオ大阪西

#### 〔関西芸術座〕

暑い夏でした。大阪労演8月例会に、「おあさん疲れたよ」(田辺聖子作・ふじたあさや脚色・道井直次演出)をエル・シアターにおいて上演しました。

従来の田辺作品シリーズとは、ひと味違う舞台で、敗戦直前の大阪大空襲から90年代初頭までの一人の女性の生きさまと、その女性を愛した一人の男性のいわば叙事詩ともいえる作品です。特に中・高年齢には、多くの共感を得たようです。

脚本の遅れもありましたが、稽古は40日以上、猛暑の中で行われ、これと並行して新中・高校作品「遙かなる甲子園」(戸部良也作・西岡誠一脚色・鈴木完一郎演出)の稽古が行われています。

今回、演出に青年座の鈴木氏を迎え、入団2、3年の若者たちを中心に、暑さ以上に稽古場は燃えています。

同作品はすでに映画化もされていますが、沖繩のろう学校高等部の生徒たちが、障害にもめげず野球部をつくる感動的な作品です。

同作品は98年度より全国巡演にはいりませんが、9月25・26日に関西スタジオで先生方を招いて試演会がもたれます。

秋になると巡回公演も多忙になり「姥さかり」は9月に東北演鑑連。10月には「奇跡の人」が文化庁ふれあい教室で、北関東から東北へ約2週間の巡演に入り、以降12月中旬まで近畿各地の公演です。

12月には、創立40周年記念公演のラストを飾るシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」を岩田直二演出で、すでにフェンシングの練習や部分的な自主稽古を重ねています。

7月末には劇団の定期総会が2日間、終日もたれ、現在、各ジャンル別4部門の、98年度以降の企画立案に入っており、稽古、会議など劇団は終日賑わっています。(N)

#### 〔劇団 かがすがい〕

全リ演フェスティバルが無事終了したかと思ふと、ほったらかしにしていた9月公演に「てんてこまい。今、ちよつと一段落しています。稽古場を持って2年目、今年は年間4本の公演を企画し、3本目まで終了しました。

1月24日〜26日 第2回稽古場公演

5月9日〜11日 第3回稽古場公演

『騒がしい子守歌』作・飯沢匡  
『河童証文』作・栗原省

9月15日 秋公演

ぶりに「頭痛肩こり樋口一葉」(井上ひさし)作、梶武史/演出)を上演しました。稽古途中でのキャスト交代、一部ダブルキャストという陣容の組み合わせなどによる問題はありましたが、無事に幕を降ろすことができました。街が神戸まつりに湧いた7月19〜20日には、働くものの演劇教室第28期卒業公演「12人の優しい日本人」(東京サンシャイボーイズ/作、青木克也/演出)を、これまた演フェスのもう一つの会場シーガルホールで上演。この日舞台に立った教室生の内、2人が現在劇団員として活躍中です。また、これと並行して6月から第29期生が開講しています。

そして、8月には、全国演劇フェスティバルIN KOBÉが開かれ、私たちも含め、劇団どろ・神戸職演連・神戸ドラマ館ボレロ・劇団かすがい、この開催地劇団にとってはまさに暑い暑い甲子園となったのでした(詳細は別途。休む間もなく、9月25〜28日、「JAZZ & COMEDY」と題して、その名の通り、パークレー音楽院帰りのミュージシャンお2人(1人は劇団員)の生演奏と、「名医先生」(ニール・サイモン/作、岸本敏朗/演出)から4編の上演とのミックス公演を稽古場で行いました。

#### 『もくれんのうた』作・木村快

於 ビッコロシアター 大ホール  
この間に、6月に尼崎市演劇祭、8月に全リ演フェスティバルがありました。

また、今年の4月から演劇教室を開催し、5名の研究生を迎えました。今までにはなかったかなり充実した(ばかみたいにしんどい?)活動をしています。

話は少し変わりますが、劇団かすがいは、西リ演の神戸ブロックになっております。ところが、私たちの拠点は兵庫県の尼崎市にあり、決して、神戸市尼崎区という地名ではありません。少し、神戸ブロックの劇団かすがい、という言葉に不思議を感じております。最後に、これから今年4回目の公演にとりくみます。

12月11日(木)〜14日(日)

冬の稽古場公演 ころ期待!

(鐘ヶ江)

#### 〔神戸職演連〕

今年5月16日に第47回公演として、阪神・淡路大震災を扱った創作劇、本多弘志・作「オレンジ色の光がはした」を上演しました。例によって、すぐ次の公演レバが決まらず、

モタモタしていました。演フェスIN KOBÉの熱気に励まされ、ドラマ館ボレロの三村省三氏に客演出をお願いすることで、青年劇場の持ちレバ、高橋正岡脚色の「遺産らぶそでい」を来年2月14日(土) 15日(日)に「神劇まわり舞台」の参加作品と決定し、稽古に入りました。

11月に大阪で劇団息吹さんが公演されると聞き、台本ではお世話になっております。また、青年劇場の方々にはいろいろとお力添えいただき、ありがとうございます。

神戸職演連の総力をあげて立派な舞台を創り上げ、作者の高橋さまをはじめみなさんのご好意にしっかりこたえたいと決意しているところです。(州崎雅晴)

#### 〔劇団 四紀会〕

全国の皆さん、演フェスへの参加お疲れさまでした。神戸での開催はいいがでしたか。3年後はお客として参加させてもらおうと、今から楽しみにしております。

さて、前号抜けてしまいましたので、報告を6月までさかのぼらせていただきます。

6月5〜8日、演フェスの会場ともなっておなじみのアートビレッジセンターで、8年

さらに、6月21日塩屋小学校(神戸)・9月6日鴨川小学校(社町)で「大工と鬼」、10月4日中吉川小学校(吉川町)で「火ようびのこちそうはひきがえる」を移動公演として回り、7月19日、9月26日には「五十年目の戦場・神戸」の小公演にも参加と、ここまで書いてきて「まあ、ようやくきたな」と正直感しているところだ。

というわけで、いつもながら活動報告だけで紙数が尽きてしまい恐縮ですが、以下、当面の公演予定です。それではまたー!!(里中)

#### ◆神劇まわり舞台 劇団道化座公演

渡辺鶴/作 須永克彦/演出

四紀会/客演

『0号発刊す』

10月7日(火)〜8日(水)

神戸松方ホール(3回公演)

#### ◆井上ひさし/作 梶武史/演出

『泣き虫なまいき石川啄木』

10月19日(日)

滝野町文化会館(1回公演)

#### ◆井上ひさし/作 梶武史/演出

『頭痛肩こり樋口一葉』

11月8日(土)

神戸レバンテホール(1回公演)

#### ◆神劇まわり舞台 劇団どろ公演

ブレイト/作 合田幸平/演出

四紀会/客演

『都会のジャングル』

11月27(木)〜30日(日)

岸本敏朗/演出

『火ようびのこちそうはひきがえる』

11月29日(土)

高砂市立中筋小学校(1回公演)

#### 〔演劇集団 和歌山〕

演劇フェスティバル、思い出に残る大変いい企画となりました。関係の劇団のみなさん、本当にご苦労さまでした。

さて、劇団の方は12月3(水)・4(木)

日、午後6時半より和歌山県民文化会館小ホールで上演する井上ひさし作・楠本幸男演出「イーハトーボの劇列車」の稽古の真っ最中です。手強い作品ですが、練習をみっちり積んで、いい舞台にしたいと思います。

本年度は大忙しの1年でした。そろそろ来年度の作品を探していかなければならないところ。なお、今回の作品は、東洋信託基金の助成対象となりました。

〔演劇集団 あり〕

5月30日の「ちらい」公演後、今夏境港市で開催されたイベント、山陰ゆめみなど博覧会のため創作した、創作民話劇「五里ヶ浜の緋娘は」の稽古に入りました。

ミュージカルふうに入りました。子どもミュージカルの「トライアングル」や、コーラスグループ「ドリーマーズ」と合同で、野外ステージのようなホールで、台風のため延期となった9月18日に上演しました。米子での初めての、ジャンルを越えた合同公演であり、苦勞もありましたが、地元での新しい文化活動ができたこと、共演団体ともども喜んでいきます。

なお、この企画に参加した30団体の中で、優秀賞とはいきませんでした。奨励賞を受賞することができました。11月23日には米子市文化ホールで再構成し、公演します。

〔劇団 あしづえ〕

神戸フェスでは大変お世話になりました。ありがとうございました。あしづえは久々に7名で参加でき、たくさんのことを仲間と一緒に肌で感じ、学ぶことができました。

私たちは、10月26日より新作「プラボー・フアーブル先生」のロングラン公演をスター

創作ミュージカル

〔博多の森の美女〕(10/5)

児童部との合同で

〔王子と森の仲間たち〕(10/26、11/24)

創作和風ミュージカル

〔飯筑前ハッケン伝〕(11/2)

〔奇跡の人〕(10/29、11/8、11/11)

二人芝居

〔嘆きのサンバ〕(9/15、11/9)

ベストファミリー劇場

〔大地の子守歌〕(12/13電気ホール、1/27熊本市民会館)

10月1日現在のスケジュールは以上で、まだまだ息の抜けない下半期です。

劇場を持たない劇団活動は考えられないことの実感を身にしみながらも、若手の育成を考える今日この頃、現在の仲間を大切に。

いろいろホールは増えますが、演劇専用のホールは、まだまだ遠い日ではないでしょうか。

〔劇団 からっかぜ〕

皆さんお元気ですか。私たち劇団からっかぜは、10月11・12日と11月15日に岡安伸治作「ドリーム・エクस्प्रेसAT」を上演します。今回は、全員登場しっぱなしで、パスが暴

トさせます。今回は、俳優の上田忠好さんをまじえて、刺激を受けながら稽古に迫り込まれています。作者の平石耕一氏は11月23、24日に来られる予定。

この作品では初めてプロの衣装デザイナーをお呼びし、時代考証とトータルデザインをめざしてみます。舞台美術、照明につづいて、やつと衣装もプロの仕事を通して学べる機会を持つことができるようになりました。

劇団員を取りまくアートボランティアも23人にふえ、「衣装の勉強をしたい」という方も数人出てきました。とてもたのしいことです。また、地元のみなさんに一人でも多くシアターの観劇体験をしていただき、演劇への興味を育てるため、「ダネプロ」を公開していく方向で取り組んでいます。(有田美田樹) 今後の活動日程

「プラボー・フアーブル先生」

作・平石耕一 演出・園山士肇

しいの実シアターロングラン公演

10/26(日)・11/9(日)

11/23(日)・11/24(日)

出雲市公演 1/25(日) 出雲市民会館

「演劇によるまちづくりシンポジウム」

2/7~8(詳しくは情報BOX参照)

走したら、私たち役者まで暴走してしまい、悪戦苦闘の日々が続いています。

前回ジプシーが終わって、レバ達に入ったから、役者がいないよ、スタッフがいらないよ、どうしよう。新人募集を、ポスター、地域の情報誌にと劇団の総力(?)を結集した結果、私たちのドリーム・エクस्प्रेस号は出発しようとしています。ドリーム・エクस्प्रेस・GO! (西井学)

〔個人会員 岡田和義〕

新編集部のせつかくのご高配に、とりたいそぎ近況を一筆いたします。

借越を承知で申しますと、モノとカネの洪水のなかで荒廃した人間の復興を意図して「隠れん坊」を昨年の夏に発刊。次作「休」の準備中に、僧籍をもつ役者氏から「道元」の依頼がまいこみました。

ところがどっこい主人公は、世俗のつけこむスキのない傑物。夏に書きあげる約束がのびのびになって「ドゲンシた?」「ドゲンシた?」のサイソクに追われる昨今です。

〔個人会員 栗原 省〕

芝居つくりと町づくり運動に加え、最近ほ

〔演劇サークル トラム〕

全日本演劇フェスティバル開催実行委員会、地元劇団のみなさん、苦勞さまでした。日頃、観劇できない舞台を心ゆくまで堪能させていただきました。そして、全国で活躍しておられる皆さんとともに3日間過ごし、お話しできたことは私たちにとって大いに励みになり、参加した者たち、帰りの車の中でもつと頑張らなくてはと目を輝かしていました。

さて、トラムは10月26日に開催される第1回山口県演劇フェスティバルに向けて活動しています。『夜の来訪者』作/ブリーストリー訳/内村直也です。神戸での刺激で意気揚々としています。(藤原重孝)

〔テアトル ハカタ〕

下半期の第1弾「ピトルギの鈴」作/千葉多喜子、演出/野尻敏彦、も無事好評のうちを終了しました。

戦争の悲惨さ、女性の地位の悲惨さ、差別・人間愛・真の家族とは、……。作者、演出、劇団のわかっていただきたい主旨は、伝わったことと確信しています。巡演シーズンとして、

「ピトルギの鈴」(10/29、福山市民会館)

畑づくりに凝りだしました。

今年、私の住む町は名実ともに「同和のない町」「同和問題が過去の歴史となった町」になります。私の芝居づくりは、その運動と連動して、6月にルナル「赤毛」8月は盆踊り、9月、ミュージカル「ウエストサイドストーリー」、10月、村の氏神の獅子舞。その間に7月、和歌山県の「ピックホエール」というドームの柿落とし公演の手伝い……。いくつか作品を書くの?ときかれ、返事に窮します。

〔個人会員 東川宗彦〕

西リ演に再加入させていただきます。

以前、西リ演の作家・演出家会議に楽しく出席をさせていただいておりました。

ところが、私の職場の関係で、郵便局なのですが、しめつけが、大変に厳しくなりました。平常心で出席ができなくなりました。もう一つは、作家・演出家会議の討論内容が劇団の一方的な、独善性もあつたりして、そう感じて、ときれておりました。

今、日本の演劇はむつかしい局面に入っておりますが、私なりに全力であつたりしたいと思います。どうか、よろしく、お願いいたします。

## 遠くなりし戦い、しかし現在

今泉 おさむ

(演劇評論家)

## ① きづがわ『勲章の川』

今夏、「全日本演劇フェスティバルIN神戸」で、はぐるま「カンナの咲き乱れる果てに」を見た。いまや完全に風化した第二次世界大戦・太平洋戦争、そして中国・アジア諸国への侵略行為への告発。戦跡への歴訪、それは「戦友が眠っている」から、だが一兵卒として辛酸をなめたとしても、踏みじられたアジアの人々にとっては決して忘れられない歴史。それが加害者と被害者との決定的な違いである。それが如実に感じられた舞台であった。

この「勲章の川」は戦争末期、日本人が犯したもうひとつの戦争犯罪。中国・朝鮮人を強制連行し、過酷な労働に迫りやり、多くを死に至らしめた。これは結果起こった(鹿島組)による「花岡事件」を題材に描いた作品である。書

かれたのは17年前、学校公演用の書き下ろしである。

高校教師・庄司が地元で起こった「花岡事件」を授業の投げ込み教材にした。我々も戦争の加害者であること。それが自分たちの肉親・父母の関わることであると知って、高校生たちは・・・各々の家庭にどう波紋が起ったか。

一時代前の「戦争を知らない子供たち」は「侵略」戦争があったことは知っていた。しかし現在は「戦争」すら頭の中にならぬだろう。「歴史」になれば、すべて干乾びた過去でしかない。この高校生たちは、押し黙っている大人たちの偽瞞を暴こうとする。「戦争はかっこいい」「残虐行為なんか大人たちのやったこと、俺たちは知らない」。だが家族の問題となり、結局自分たちも直面せざるをえないことに気付く。この観客へのメッセージこそが、現在上演する価値があることを物語っている。重い内容を真つ向から取り組んだ劇団の真摯な姿勢が感じられる舞台である。

ただ描かれた大人たちすべてが真面目な人物で、庄司も和尚も出来た人物であり、授業を止めようとする校長でさえ苦悩する。となると対立がなくなり、日本人としての心情の問題となる。「私たちは有罪」ならばどうするのか、

それが見えてこない。これは対する高校生グループの演技がいかに弱いことにも原因する。内容をしっかりと咀嚼して「俺たちは関係ない」と言っているのか、ただ「俺たちは関係ない」と言っているのかとの違いは大きい。ここができていない。せめてもの活気・躍動感があれば、異なった印象も生まれてくるだろう。そこが未熟である。

6月の東北、上手の高みの地蔵、下手の2段組みの主要な成田家、この構成舞台は、照明と相まって非常に良い。成田一家の女性3人が、祖母(和田雅子)を筆頭に光っている。忘れることによつて免れようとする日本のオトウ、オカアたちの特質にいかにも迫り得るか、10月の再演に期待したい。

(6月29日・昼 クレオ大阪西)

## ② 関西芸術座『お母さん疲れたよ』

2年ぶりの地元劇団の「労演例会」、そして新作。劇団としては手慣れた田辺聖子作品であるが、これまでとは意味合いが異なる。「姥シリーズ」とは違う、「昭和」という激動の時代を生き抜いた「日本男児」と「大和撫子」の物語である。原作は新聞連載小説、文庫本で上下752ページ。大阪造兵廠の学徒動員で出合った昭和5年生まれの(昭吾)と(あぐり)。だが、その背後には幾十万という(昭吾・あぐり)が息づいていると言える内容である。

動員中の出会いと別れ、戦後の(うたごえ喫茶)での再会。法的には結婚は両性の合意によることになったとしても、世の中の混乱は二人を結び付けるほどの余裕はない。しかも、家族のしがらみを捨てきれない年代。ドラマの語り手は(昭吾)だが、戦後の混乱期を生き抜いていった年頃の女性たちへの鎮魂歌ともいえる。彼女たちに作者の愛おしいほどの思い入れがあることが感じられる。それは、動員女学生たちが愛唱し、あぐりの葬儀で「なよたけ会」の女性たちが歌う「花」の曲に象徴されている。

年代記の常として、大きくは7つの年、細かくは30を越す場割り、一応スムーズに進んでいる。それは新聞紙で表面を覆った基本装置が落ち着きを感じさせるからでもある。ただ、時代を現すスライドが不鮮明であったのは、我々世代には、時代の懐旧を感じ取れるが、一般的には説明のなさとともに、繁雑と感じられてもやむを得ない。

主役・溝田繁は39才から61才までのほとんど出ずっぱり役を戦中派の心情を吐露しつつ、やりお世話のはさずがである。久しぶりの舞台の川本美由紀も娘役から大人への落ち着きが見られ、かたくなではないが芯をしっかりと持った女性を好演している。だがそれよりも、浅尾夫人・梅田千絵が入団時から比べて成長著しいとみた。

「昭和」をどう描くか。ここに登場する人々にはさしたる事件は起こらない。だれにも起こり得る事象である。そ



の彼らの生き方を描くことによつて我々日本人の「昭和」がいったい何を意味したかが浮かび上がってくる。人間いかに生きるべきかと振りかぶることはできるが、多くの庶民はそれぞれに生きそれぞれに死ぬ。その小器用には生きられない男女の生き様の誠実さがいとしく感じられる。

現実の庶民生活が等身大に表現され、身近に感じられるのは、舞台上の飲食物などの（消え物）をすべて実物を使ったことの功も大である。それだけリアルな感覚が実感として導き出される。そして赤く染まった造兵廠の破壊し尽くされた空襲の跡、現在二人が憩うビジネスパーク・展望レストランの夜景が時の経過の切なさを見事に現していた。

（8月29日・夜 大阪・エルシアター）

（劇評にならない劇評）

### 劇団銅鑼『池袋モンパルナス』をみた

僕のおもい

中澤 研郎

（京浜協同劇団）

「池袋から長崎町にかけては、美術家と称される種族が住んでいる。それと並行的にダンサー、キネマ俳優など消費的な生活者に無頼派、カトリック僧侶など異色的な人物を配し、サラリーマン、学生などが氾濫している。…略…なかでも神経質をもつて売り物とする芸術家の生活におい

て、脳の働きと心臓のチツクタツクの状態が醸し出す不思議な雰囲気はあたかもパリの芸術街モンパルナスを彷彿させるものがある。遠く池袋の空が夜の光を反映して美しく見える頃、画家たちはパチリパチリとアトリエの電灯を消して長崎町から、池袋へ出かけていく。特別の用事があるわけではなく、ただ遠くの手がさしまねくまに、足がふらふらとその方向に向いていくのである。

池袋モンパルナスに夜が来た  
学生、無頼派、芸術家が街に  
出る

彼女のために、神経をつかへ

あまり太くもなく、細くもない

ありあはせの神経を…（小熊秀雄）

詩人、小熊秀雄が名づけたという「池袋モンパルナス」。大根畑や葦原を拓いて建てられた安下宿、安アトリエ集落。そこに集くう全く食えない若い前衛画家たち——鬨光、松本竣介、井上長三郎、鶴岡政男、寺田政明、古沢岩美らの生きざまに舞台は焦点をあてる。時代は昭和4年から敗戦まで（昭20）、15年戦争と全く重なる。原作は「さよなら日本——絵本作家・八島太郎と光子の亡命」で大宅壮一賞を受けた記録文学作家・宇佐美承氏の「池袋モンパルナス」

（大正デモクラシーの画家たち」の副題がつけられている）集英社文庫597頁。情報・資料提供者190名。主要参考文献約100。登場人物747。新聞、雑誌記事多数。数字だけ見てもまったく「半端」じゃない。自分の足で歩き、自分の目で確かめ、解析し、想像し…：すさまじい情熱、集中力、体力、書き切る意志…：に僕はうたれた。そして、この広大な鉱脈の中から、戦争の重圧下での鬨光や竣介らの人間の真実探求の苦悩を示し、絵と人間が一つになってしまった芸術家たちの姿を見せてくれた小関直人氏に僕の感動をどう伝えたいか。

劇評というのは、まず「あらずじ」から書くものらしいが、僕はここではそれをやらない。できない。知りたかつたらまず芝居をみる、台本を読み、原作を読み、そして彼らの画いた絵を見ろといいたい。数十行しか書けない「あらずじ」で何がわかるうか。

「戦争の重圧下」などと簡単に書いてしまったが、戦争札贅画を画かない画家たちには絵の具、カンパス等々の配給がない。展覧会への出品も許されない。第一食えない。そして刑務所が待っている。そんな中で鬨光は「眼のある風景」（昭11）「梢のある自画像」（昭19）などを描いている。「眼のある風景」は前景に暗褐色の死者の群れらしいかたまりを配し、その奥から緑色に光る眼が前景をとおしてじっとこちらを見ている。眼をかこむ彼の肉体系しい抽

象は前景よりもっと暗くて重いがそれはたしかに生きている。あの眼は何を見ているのか。「梢のある自画像」に至っては彼は強風に向かって必死に立っている。立っている肉体と眼鏡ごしでよく見えないらしい眼は、むしろ戦争の逆風に己の勝利を宣言しているようにも見える。松本竣介の「立てる像」（昭17）はどうだ。優しい体の線、気負いもなく前方を見つめている大きな眼は人間の営みをじっと見据えている。信頼でもなく絶望でもなく、それでいて見るものの目を自分の内部に向けさせていく絵だ。

鬨光が軍隊に召集される直前、松本竣介との間にこんな意味の会話が交わされる。

松本 鬨光さん。なぜ絵を描くんですか。

鬨光 わしから絵をとつたら何も残らんけえのう。だけえ描くんじゃ。お前にとつて絵は何だ。

松本 僕は自身です。あらゆる対象は僕の中にあるのです。僕は生きている画家なのです。

鬨光 生きとるって何じゃ。

松本 絵を描くことです。

鬨光 なして描く。

松本 わかりません。でも生きているから描くんです。今描き続けなければ、生きていない意味がないんです。

鬨光 何を描くのじゃ。

松本

今、いちばん描きたいもの、何にも縛られない、僕らが画家として生きていくという証です。真実です。僕の中にある真実を僕は描きます。本当のリアリズムは現実の中にあるのではなく、現実の中にあるのだと思います。豊光さんならわかってくれるはずですよ。

豊光

真実か。わかるでえ。

松本 愛すること、愛することによってしか美は生まれません。僕たちが例え何も完成できなかったにしても、正しい系譜を生きていくなら、やがて必ずそれがこの意思を完成してくれるはずですよ。

豊光

展覧会をやるう、むしろだけの展覧会を――。

この対話は今、芝居をしている僕らには、いや少なくとも僕にはグサツとくる。先が見えない、世紀末だ、混沌だなどと気易いかな。小熊ではないが、遠くから差し招く者に対して俺はどれだけ、自分の真実と情熱をもって答えたか。この芝居はこのように僕を撃った。

僕にとっては、若い頃みた「炎の人」(三好十郎)以上の作品に思えた。名作、名演出、名優を揃えたあの舞台がとて他人事に思えてきて仕方がなかった。

登場人物の個性がもう少し鮮明になること(だれがだれやらわからなくなってしまう難点——)もっと上手にやれと言う意味では決してない、装置まで抽象画にしてしまっ

た難点(彼らの絵もほしかったなあ)を除いて僕は万歳を叫ぶ。ともかく山田昭一演出をはじめ、関係者ご一同、ご苦労さまでした。

観劇後、僕は信濃デッサン館と無言館へ行ってきた。豊光、峻介、井上長三郎、藪田猛らの絵と会ってきた。無言館では戦死した画学生の遺書のような絵と向き合ってきた。芝居をみ、絵と向き合いながら、僕はまだ生きていく幸、よしやるぞ、できるかなという思いがこももした。歩き続けるしかないと思いつながら、今この原稿を書いた。

### 第6回公演『証言』

### 「劇団阿修羅」への応援歌

佐藤 逸平

(劇作家)

時間なんぞというものは、宇宙的法則に従って流れているものだから気分に変化するわけがないのに、今日、世紀末と称する言葉に象徴されるような諸現象が矢継ぎ早に起きていて、それに目も心も奪われてしまつて時の流れが、最近、とみにあわただしく感じられてしょうがない。

そんな時代に「これだけは忘れないでほしいんだ。他からは愚直と思われても、あえて人間存在の価値を、真実を、解き明かすために俺たちは芝居をしているんだ」そしてサーチンさながらに「ちえっ……せっかくの歌をぶちこわ

しやがった……馬鹿・野郎！」と決して声高ではなく、あ

わてる観客席の私たちにそつと語りかけてくる、それが男性7人の侍が組織する「劇団阿修羅」である。

その「劇団阿修羅」の公演を観たのが、第4回公演アーサー・ミラー作の「みんな我が子」以来、ゴリキーの「どんだ」そして今回の9月5日、北品川の六行会ホールでの夜公演と3度目になる。

今回上演の「証言」(原題は「恐怖」)は、社会的な地位も信用も得ている、アメリカ、ニューヨークに住む耳鼻咽喉科医師、パーキンス一家の1953年6月20日の1日のできごとを描いている。

横道にそれるが、この日の前日の6月19日には世界中の心ある人々の耳目を集めた事件のあった日で、このドラマの背景として欠かせない要素なので少々触れておきたい。

6月20日付けの朝日新聞の夕刊を繰ってみると「ロ夫妻死刑執行さる／きょう午前9時(日本時間)《筆者註IIアメリカ時間19日午後7時》の見出しの後に「19日夜シンシン刑務所で、原子力スパイ事件による、ローゼンバーグ夫妻の死刑が執行された云々——」のリードに続いて「最後の嘆願も拒否／大統領領事館にアライゼンハウアー」判決に介入せず／死刑執行に大統領領言明」「参加者1千名を検挙／パリでロ夫妻救援デモ」「5千の群衆が怒りの声／ニューヨーク」等々の記事が一面のかなりのスペースを

割いてロ夫妻の写真とともに掲載されている。

結論を先に言うとな罪事件であることが明らかであり、アインシュタインをはじめピカソやサルトルなどの知識人やローマ法王も加わつて世界的な規模でロ夫妻の助命嘆願運動が行われている最中に死刑が執行された。それが6月19日。ロ夫妻が、第二次世界大戦末期にアメリカの原子力機密をソビエトに売り渡したというスパイ行為ゆえの断罪とされている。

当時のアメリカはリベラルな思想が極度に迫害されリベラルな考えはすべて赤よばわりされて赤狩り、魔女狩りが猖獗を極めていた。チャップリンがアメリカから追放され、アーサー・ミラーが弾劾されるといった時代で、後にミラーは「坩堝」を書いたが、自由アメリカに自由は無く、数多くの映画演劇人が自由を奪われていった。裁判所も白か黒かの裁きをする場ではなく赤は黒であると弾劾抹殺していく場ではなかった。ロ夫妻はそんな時代の生け贄として政治的陰謀のもとに断罪されたのである。

本題に戻るう。このドラマは当然のことながら「ローゼンバーグ事件」を描こうとしたものではないが事件が劇的狀況のカセとして重要な役割を果たしている。

登場人物は「ラジオの声」を含めて男性陣6名——ブラズ2名の女優さんの客演——だから演出の松木圓氏を除けば劇団員総出演だ。また大道具は自前で——この装置が簡

素ながらシャープなつくりでしかも調度品は吟味されていて中産階級の趣が十分に感じとれる。窓越しのニューヨークの遠景も実にいい——もちろん中小劇団では当然のことなのだが、文字通り総員がフル回転である。

主人公パーキンスはローゼンバーグ夫妻とは知己の間柄であり、ある些細なことで事件の法廷で権力側の脅しに屈して偽証をしてしまう。20日の朝のラジオでロ夫妻の死を知ったパーキンスは苦悩の極に達するところから幕が開く。

原題は先に触れたように「恐怖」だが、今回は演出意図から「証言」と改題されている。が、舞台から伝わってくるものは主人公の情念としての恐怖だったことは否めない。しかし今日でも「偽証」が冤罪のかなりの部分を占めていることを思うと改題も頷けることであるし、わが身が権力によって抹殺されるかもしれないという恐怖ないしは今日の地位を失いたくないとする保身、あるいは家族を守ろうとするための偽証であったことに考えを及ぼしたときに「証言」は観念として浮き彫りにされてくる。

劇的感動は主人公の心理的陰影をどこまで鮮明に彫琢できるかにかかっている内容だけに、パーキンス役の川崎桂氏に心理的苦悩とともに演技的苦悩が感じられ好感が持たが、表現がやや単調に陥っていたことが惜しまれる。他の演技人は物語の起伏の乏しさを救って、義弟で神父のプロ役のをわり万造氏が破調の役作り。隣人で町内会長の

## 乱歩と人気漫画と

### 異なる原作への異なる挑戦

神沢 和明

(演劇評論家)

#### ① 劇団「潮流」 『続・夢幻乱歩館』

前作が詩の気分をもっていたのに対して、今回の続編は散文に出来あがったと感じた。前作でとりあげられた2つの短編では、その世界の醸し出す不可思議さ、グロテスクな不気味さが異次元の美を描き出し、そこでの事件は現実の衣装をまとった虚構であることを観客に意識させていた。今回の『蟲』の場合、不可思議さは主人公の青年、榎木愛造の心理にあり、それはある程度まで現実に取り得るものだ。前作の、月光に白く輝く鏡のようなビルの壁に現れて自殺に誘う自分の分身や、手足口目鼻すべてを失い、ただ性欲だけが残った元軍人の肉の塊は、存在しえないものが存在するかもしれないという嘘に我々を誘い込んだ。だが、愛した女性を完全に所有したいがために、その後をつけ、ついには殺害して自分の世界に彼女の存在を閉じてしまおうという心理には、現実性がつきまとい、彼の心理を描くことは、説明することになってしまふ。

フランクリン役の朽木俊氏がひょうひょうと演じて彩りを添える。他の諸氏もそれなりのキャラクターを創造している点に敬意を表したい。が、惜しむらくは主人公の心理的陰影の彫琢にどれほど関わっていたのか、言い方を換えると発信側か受信側かいずれに問題の所在があるかは別として伝わってくるものが、すべてそうだとはいわれないが希薄であったことが残念でならない。

それでも、今回は陰の声に終わった岡部氏とともに、をばり氏、客演の藤田氏らの口跡の明瞭さを高く評価したい。声質がよい上に口跡の鮮やかさは特筆できる。もちろん声質は生来のものが多分にあるのだが、悪声であっても口跡は別物だ。山本学、古くは森雅之がそうだった。

最近は少なくはなってきたものの、なりふり構わぬ絶叫芝居やますます盛んな早口芝居を観るにつけても、口跡の良さはこの劇団の特性と言ってもよいのではないか。

とまれ、時の流れに棹さすごとく、まだ未来が開けるであろうと希望に満ちていた時代に生まれた諸作品を意図して取り上げて上演を続ける「劇団阿修羅」が、共有体験者の青春の残照を掻き立てるノスタルジーに終わらせることでないもの、それをこれからも期待しているのである。

(埼玉県大宮市吉野町1-334)

初期作品にみえるように、乱歩は本来、論理性を好んだ作家だ。それは彼が筆名の由来としたエドガー・アラン・ポーの資質でもある。ポーはまた、論理で割り切れない恐怖と幻想を愛する人間であった。無知なる者の恐怖ではなく、理性の中での恐怖である。それがすっかり乱歩に当てはまる。ポーになくて乱歩にあったものは、性的なものへの強い関心だ。愛造青年は愛する女性を殺し、その女からの愛を永久に得られなくなることによって、マゾヒストの喜びを覚える。その死体を美しいまま残そうと望むのは、その美しさの下にいつまでも従っていたという願望。その歪んだ恋愛感情には、乱歩文学の美質である、異常性において正当となる真実が存在している。

乱歩論をしてしまったが、この作品はつまり、前作とは異なる乱歩世界のもう一面を描いたものである。そして演出者がとらえたように、異常な恋愛劇と言える作品だが、そうなるためには、主人公の「女を永久に自分のものとしてたい」という心理が、もつと切実に出る必要がある。彼の心理はむしろ、自分の内部のどす黒い欲望に気づく、自分探しに向いてしまう。たとえば女を殺すことを決意する自問自答の場面に、彼女を浮かび上がらせるなどして、彼女への求心性を強くしてはどうだったろうか。

詩人役の堂崎茂男は語り手だけでなく、主人公が自分の心理を語る相手としても登場する。その会話の中で、愛造

は殺人を決意するのだから、そのかす人物でもある。居所の分かりにくい立場で、演技力で存在感と文士の雰囲気を出してはいるが、おさまりが悪い。愛造役の岡田秀は、内向的な厭人症の青年を描こうと、いつもの叫ぶような声の調子を抑えて、出だしはまずまず気弱に見える。姿に異様さも感じさせる。進歩している。しかし、内にこもる、ということ、内に力む、と受け取っていたのか、主人公の悩みが大きくなるにつれて、声も感情づくりも苦しくなる。二重人格の人間は、別の人格に「話しかける」ものだ。作者が詩人によって内なる声の対話する相手を作ってくれているのに、その「もうひとつの自分」を使い損じている。殺される女優文江役の長澤邦恵は、愛造が憧れ惹かれながら、どうにも手が届かないという、華やかさや奔放さに欠けている。冒頭の劇中劇のサロメにしてから、妖しさも無軌道さもない。表情が固い。だからせっかくのヌードもゾクツとさせない。婆やの池下雅子と巡査の浮田孝明がさすがに「らしい」人物を（しかも好感をもてるように）造形していたが、他の役者は技術的にもまだまだ。

装置はブルースの紗幕を使って幻想的な雰囲気を出そうとした。二重に組んだ舞台はあまりにシンメトリーが強く、安定して、主人公の歪んだ心理状態を表すのに向かない気がする。原作通りとはいえず、土蔵が二重の上なのは落着かない。奥にほしい。回り盆の使用も、次に出てくる場面（車

の装置など）がまたシンメトリーで、驚きを与えない。主人公の恐怖・苛立ちの原因である、恋人の死体を徐々に蝕んでゆく「蟲」のうごめく音が、芝居の中から聞こえてほしかった。（9月5日 近鉄小劇場）

## ② 劇団コロロ 『家裁の人』

地方都市春河にある家庭裁判所。桑田判事と二人の調査員、渋谷と今西は、次々と持ち込まれる厄介な問題に、忙しく取り組んでいる。別居中の夫が一人息子を連れ去ったと怒る妻。幼いときに捨てた息子に扶養義務を申し立てる老母。兄に甘かった父親の死後、財産分与に不服を申し立てる弟。両親が離婚寸前で自分の居場所が見えないことを苛立って非行に走る少女。人間関係はひとつ間違えたら糸のようにもつれ、自分では解くことができなくなってしまう。そのもつれをほぐそうと、三人は誠実に調べてゆく。

原作漫画が雑誌に連載されていたとき、私は愛読者だった。物言わぬ植物を愛する心で、自分の本心をうまく語れない人間たちに対面してゆく桑田判事は、共感を呼ぶキャラクターである。家庭裁判所という設定も良かった。連載の終わりは学校教育に関わる話の主になっていったが、始めの頃は、家族の中の心のすれ違いを扱った事件が多かった。そしてほとんどの事件の底に親子関係があり、今回の

脚色でとりあげられた事件も、どれもそれをめぐるものである。ただし4つの事件を平行に描いたのでは、まとまりがつかなくなる。脚色者は、いさかう両親に家族の絆を見失って非行に走った少女が、自分を氣遣ってくれる人たちの心に触れて、自分の手で立場を作り出し両親から独立してゆく話を、芝居を貫く中心線とした。それによって、戯曲に筋が通っている。

気になった点は、桑田判事は原作では、まだ若く未完成で、審議される者たちともにあるような存在であったのが、舞台では出来あがった人物、裁く立場にいる人という印象が強かったことだ。この印象は（彼が舞台真ん中正面向きになる）審問の場面が何度も出てくることで、助長される。そうすると、彼が周りの者にも植物への関心をもたせ、声なきものを「慈しみ愛する」ことを通じて、自分や他人の隠された寂しさに無理なく気づかせるという、無自覚的な感化が、なにか、植物をたねにして人に論じている、という風に見えて、人物が小さくなった。

挿話を描くために場面数が多くなる。舞台の転換のための机や椅子の出し入れが多すぎて、舞台が煩雑に感じられた。また、脚本では「暖かさ」が底に流れているが、演出はその流れを切って冷たくしている、と感じた（作者が演出を兼ねているのだが）。子供がいくつかの事件のキーポイントになる。姿を出さずに声（劇団員が子供役で演じる）

とスポットだけで表わす。常套技巧で問題はないはずが、一人息子を連れ去った父親の事件で、意見を聞くために子供を呼ぶ、その登場を表わすスポットの使い方が大袈裟で、宗教劇でも見ているようだ。桑田の部屋を下手袖前に作ったのはいかにも窮屈（「誰が石を投げたのか」の食卓を思い出した）。悩む心と解決された状態とを音で説明しているが、悩みの部分の音が音量・頻度とも威圧的にすぎる。

演技者では、捨てた息子に扶養を要求することで、失った絆を取り戻そうとする老母役の三沢和子がうまく、利己的で嫌われ者のわがままと、年若い頼るものがない寂しさを現した。遺産相続をきっかけに、不満を言うことで逆に兄との関係を修復しようとする弟と戸惑う兄（兄が石井満、弟が田中孝史）は、複雑な感情がまだ表現不足。しかし、それらしい台詞にはなっている。桑田の坂口勉は、甲高い声と口調が真面目そうだが、聞く者を落ち着かせないのが難。渋谷の浅灘拓は、原作の「こわ持て」キャラクターを出そうとしたのだろうが、変に納まりかえった棒読み台詞にしか聞こえない。変化を加えようとするところ音程を変えたのは良いが、強調する場所が間違っている。台詞内容の研究を望む。リズムの変化も試してみても。若手たちは、これから、と言っておく。

（9月12日 近鉄小劇場）

戯曲

老人と赤いポスト

——一人芝居——

作・東川宗彦

六十を少し過ぎた老人が、とぼ、とぼ、とぼ、とぼ、とぼ、とぼ……歩いて来る。  
グリーンと背伸びをする。  
自分の首を二回転させる。反対にもう二回転させる。

両手を横に少し伸ばす、次にグリーンと伸ばす。

旧式の乳母車をひいて舞台を一周する。

段ボールを取り出し、赤いポストを組み立てる。

小さい折り畳み式の椅子を出して座る。

手紙を読む。

圭次郎 拜啓、今にも、雪の降り出しそうなお天気です。

圭次郎様（人差し指を顔と一緒に左、右、上、下、後ろと動かせる、そして、自分自身を指さす）お変わりあり

ませんか。一週間に一度は橋のシータ、マンションとベッドの掃除はしようと思っています。

けれども、これが、なかなか大変です、重労働です。

天気の良い日は布団を干すことにしているのですが、これもできる日は少ないです。

年をとると、つい怠け癖がつかますねえ、あなたはどうですか？（あちらこちら見回して）どうですか。

台所にやってきてファンヒータのスイッチを入れると猫が二匹、三匹、四匹、五匹、もやってきて、しつこく、おねだりをします。その声、態度はまるで脅しです。小生は猫が大嫌いなんです。

保健所に電話をして猫を持って行ってくれと頼みました。すると、ぬかすことがええ。猫条例はありません。犬条例はありますがねえ……はははは、は、は。

猫は飼い猫と野良猫の区別がつかえません。

そちらで、つかまえて、火曜日か、金曜日の午後を持ってきてください。

そもそも、これは、どこかの、可愛い、上品な、お嬢様がこの橋の北詰に捨てにきたのです。

愛とヒューマニズムとお慈悲の心で。

お陰でこちらは地獄と鬼の心です。

風が平穏で日差しのやわらかい日はベンチに寝ころんで、本を読んだりするので、最近猫が占領して、いやはやなんとも、あきれかえります

昔、我が輩は猫であるという小説を、とても、楽しく

読んだことがあるのですが……

時代が急激にすっかり、かわって……

人間も急激にすっかり、かわって……

世間の有様も……ギスギス……味気ない……

すさんだ風景になつてしまいました。

ついでに猫も……

我が輩の敵は猫であります。

猫の敵は我が輩であります。

世間の人間が、すっかり、私を、馬鹿者、のけ者、きらわれ者にするようになって久しいのですが、なぜか猫も私を馬鹿にするようになりました。

でもねえ、こうして、かろうじて、他人さまの介護も

うけずに、毎日を生活しております。

今朝も、冷凍してあるパンを電子レンジで五十秒チンをして、バターをぬって、公園の横の半坪の畑でとれた

サラダ菜、ニンジンこそえました。

コーヒー豆をひきました。ええかおりや。

また、猫がなきよる。

エサ、やるもんか。絶対にやるもんか。

コーヒーを飲みました、おいしい、猫がなく、腹が立つ。松の木にキツツキが来て、ものすごい勢いで、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、虫を取り始めました。八朝を半分にかけて枝にさしておくと……

……つがいのメジロが半分の八朝の上に並んで、なかよく、ついでにメジロが半分、メジロが半分……

現代の人間よりも、ずっと、ええ生き方してまんなア。

あしなが蜂が大きな巣をつくっています。

食事がようやく、おいしくなりました。

きょうはどんな一日になるでしょうか？

では、圭次郎様、お元気で……また、お便りいたします……敬具。差出人、小山圭次郎拜。

圭次郎は手紙の封をするところを舌で何回もなめる。ていねいに。でも、その必要はない、のり部分のラベルをはがして封をする。

ポストに投函する。

椅子に座って、湯タンポで手を暖め、郵便局員の収集

を待つ。

時々、立っていつては、むこうを見る。

ポストの横に書いてある収集時間を確かめる。

圭次郎 第二回目は8時30分頃と書いてある。もう、8時40分やないか。

許すことできない。

8時30分頃というのは8時25分から8時35分までのことをいう。前後に5分合計10分の誤差は許されるが前後に10分合計20分は、まことに、まことに、けしからん。高い郵便料金とりくさって。

SE 単車がだんだん近づいて来る。止まる。

圭次郎 それに反応する。ポストをあげようとするのを、しつこく、見る。

離れてくれといわれて、少し、離れる。  
でも、また、しつこく、見る。

SE ポストをあげる。

郵袋をかけかえる金属音。ポストを閉める、鍵をかける。

圭次郎 お若いの、郵便屋さん、話がある。

8時30分と書いてある。

遅すぎるやないか……う？……え？

郵便物が山のようにあるのに、人員が合理化、合理化、また、合理化……。

そんな、言い訳すんな、泣き言いうな。

今は、どこでも、合理化は仕方ない。

やりすぎや……それはそうやろ、お上のやりかたはいつもそうや。職場は戦場やということ忘れるな。

待て！待て……いくな。

忙しいのはわかる。

しかしじゃ、手紙を受け取るお客さんにとってみい、迷惑千万なことやないか。お前どないしてくれるね？

SE 怒って、単車を急発進させる。

圭次郎は排気ガスをふきかけられる。

圭次郎 怒りよったなア！

郵便局員は怒ることをわすれたらあかん。

いらいらしながら、歩き回る。

圭次郎 郵政観察局に電話したら、4時までには配達がこなかつたら、電話ください。厳しく、指導をしますと言いつつた。

もう、4時20分やないか。

配達がこんなことで、十分な、お客様サービスができてるとおもてるんか。

俺が配達をしていた頃は、万に一つ、こんなことはなかつた。

畜生、これでは、白猫ヤマトにまけてしまうぞ。  
どない、なつてるんや。

SE 単車が坂道を下って、近づく。

圭次郎 (手を差し出す) おそいなア。

遅かつたやないか。

……

……

遅かつた……遅かつた……遅かつた！

……

返事ぐらい、したらどないや？

昔は、よう、怒ったもんや。  
近頃の郵便局員は奴隷以下や……ふぬけや。  
凍えるような風の日も、焼けつくような、真夏の太陽のしたでも、排気ガスと、ほこりと、光化学スモッグとになやまされながら、小便をしたときに小便もできずに、走るんや、がんばるんや。  
怒ったか……ザマーみやがれ。  
まだ、少し、人間の心が残っていたか。  
あー、すうーとした。

楽しそうに、乳母車の中から大きな赤い風船を取り出して乳母車につける。  
鼻歌をうたいながら乳母車を押して舞台を一周。  
赤いポストをしまう。

天神祭りを踊る。

乳母車を押して来て、段ボールで郵便受けを作る。

また、横に椅子をおいて座る。

郵便配達を待つ。

圭次郎 配達、遅い。

圭次郎 (郵便外務員になって) 仕事…仕事…  
多すぎる。

(圭次郎) あんまり、遅いんで、監察局と郵便局に電話した。

ほんだら、郵便局長……すんません……すんません  
すんません……4時には、必ず、ゆきますと言うた。  
すぎてるやないか。

(郵便外務員) 現場の仕事の実体は、仕事している者が  
いちばん、よう、わかってる。

(圭次郎) あんたが悪いのか、局長が悪いのか?

(郵便外務員) もともと、できないことをできるように  
計画をたてているあの人らが……。

(圭次郎) いやー、両方とも、悪い。もう、民営化しよ  
う!

(郵便外務員) え?おっちゃん、そんなことしたら、首  
切り、ぎょーさんでる。

圭次郎 うーん……首なア。

……  
これからは、4時にこいよ。  
でないと、郵政省ばらばらにしてやるぞ。  
う?ここ?

河内音頭をおどる。

乳母車を押す。

乳母車の中から赤いポストを出す。

SE 天満橋の上の騒音。

左右をみてから、ローソンで買ってきた弁当をひらく。

缶ビールを飲む。

圭次郎 あー……うまい……俺は……生きている。

弁当を食べる。

圭次郎 450円で、こんな立派なお弁当……うまい  
……う……ま……い……。

生きていていうのは、ええもんやなア。

缶ビールを飲む。

SE 郵便収集の單車近づき、止まる。

天満橋北詰橋の下……なんか、文句あるのか?  
大阪市中央区天満橋2の2の2北詰、橋の下、宛名にま  
ちがいあるか?ない、よし、では、行け……。

SE 單車走り去る。

圭次郎 どうじゃ?郵便局員をいじめるのは……なんと……気  
持ちのええことか……これからも……どんどん……いじ  
めてやる。

これが俺の老後の人生の唯一の生き甲斐なんじゃから。  
(胸巻きのなかから郵便貯金通帳と簡易保険証書を取り  
出して) 郵便貯金250万円、簡易保険250万円、こ  
れがあると、なにがあっても、かがあっても、金で解決  
できるものなら、決着がつけられる……はず……で、あつ  
たのやが……。

……  
それでも、俺は痴呆老人でもない、寝たきり老人でも  
ない。

俺には人生最後の最後の楽しみがあるからなア。

乳母車の中から、黄色い風船をだしてつける。  
歩き回る。

圭次郎 (郵便外務員) おっさん 花見やあるまいし、こ  
んなところで弁当食うな。

(圭次郎) ここは天下の往来じゃ。桜の花を見て、弁当  
食おうが、ぼたんの花を見て缶ビール飲もうが、赤いポ  
スト見ながら弁当食おうが俺の勝手じゃ。

大体、このポストにしてからが道路を借りているのじゃ。  
(郵便外務員) おっさん、理屈言うのう。

ポストの周り、汚すなよ。

(圭次郎) なにを汚すもんか。きれいに、片づけて、毎  
日毎日帰っているわい。

このポスト、大気の汚れと、車のハネで汚れすぎてる。  
収集に来るとき、雑巾くらい持って来て、ふいたらどな  
いじゃ。それが、このポストを利用しているお客様への  
サービスいうもんぢがうか?

(郵便外務員) ポストの郵便物集めるのが俺の仕事や。  
掃除は俺の仕事やない。

(圭次郎) こら!おのれは、なんちゆうことぬかすんじ  
や!

国民の生活に密着した尊い仕事をさせてもろて、月給、  
ボーナス、期末手当、退職金、年金までもらうくせに、  
心得違いすんなよ。ポストの掃除くらい……そういう了  
見では郵政省解体やむをえん。

(郵便外務員) おっさん、なんぞ、郵便局に恨みでもあのか？

圭次郎、喉をつまらせる。おおげさに。

圭次郎 ある…ある…ある…あるんじや。

泣きながら弁当を食べる。  
泣きながら缶ビールを飲む。

圭次郎 兄やん、若い衆、聞いてくれるのか？

そうか、おおきに、おおきによ。

なにをかくそう、俺は18才から35才まで17年間。郵政局長表彰3回、郵務局長表彰2回もろて、自分でいうのも気がひけるが、それは、それは、優秀な郵便外務員あつたんや。

(缶ビールを飲む) 郵政マルセイって知ってるか？

聞いたことがあるってか？

国鉄マルセイもあつたんや。

国労は勝つたんや…けど…労働者は後々ひどい仕打ちをされたんや。郵政は負けたんや、けど…あとあと、ひどい仕打ちされたんや。俺らが勤めていた局には、従業員組合しかなかつたんや。

あの頃は、朝、出勤すると

“おはよう”

“おつす”

“やあ”

“おはようございます”

当たり前のことや、なごやかに、こだわりなく、挨拶してから、仕事についたもんや。

また、帰るときは、近所の立ちのみの居酒屋で、やいの、やいの、言いながら、

“ちよつと、兄ちゃん、あの人にコップ一杯持っていってんか………”

………

ベトナム戦争の終わりがけ頃かなア、あれは。

職場の中は真つ暗になつて。

労担が肩をたたきよる、肩をいからせて、郵便局の中を闊歩しよる。そのための人事異動がどんどんすすみよる、だれかが戦争中の憲兵のようや言うとなつた。

全運の方も、その頃はまだしっかりしとって、俄然、ライオンのように立ち上がった。俺はみじめであつた。

俺は、郵便局で郵便の仕事したいのや、労働運動はしたくないのや。郵便の仕事させてもろて、月給もろて、家の生活を支えて、それ、一本なんや。

結婚の話もまともりかけていて、声のハスキーな、情熱

それを、こつこつ、時代も変わったことやし、2年もかかって全通支部をつくつたんや。いや、復活をさせたんや。労使関係は良好で、普通の全通あつたんや。

時の政府の右傾化政策で、局の極秘命令で全郵政という組合をつくつてきた。

郵便局の中は蜂の巣をつつたような異常状態になつたんや。ヒソヒソ…コソコソ…局の手による呼び出し秘密会議があつちでも、こつちでも。出世のチャンス、パスにのりおくれるな！もう、職場は一転、戦場、修羅場と化した。

そんなある日、朝、出勤すると局の掲示板が全郵政の掲示板にかわつていて、全郵政の組合の部屋が玄関のそばにできていたんや。

俺も事の、あまりの、重大さに、びっくり仰天、全郵政加入申込書をかいたんや。あさはかでありました。

つくづく、考えてみると、日本には、憲法がある…労働

法もある…公務員法もある…法治国家なんや。

労働者…馬鹿にしとる。

………

朝鮮戦争の時、全通がつぶされて、組合がないようになつたんや。従業員組合しか。そこで、俺たちの時代に全通を復活させて、全員加入して、それは、それは、なごやかなええ職場の雰囲気であつたんや。

的な、だきごたえのある、ええけつした娘やった。

遅いやろ、郵便局員は月給安いよつて、としいかな、結婚できなんだのや。そういうわけもあつて、全郵政に加入したんやが、友達が皆そっぽむいてしても、朝の挨拶もしてくれん。

一日の仕事終わつて、さいなら、いうても、しらーつとして、酒も、のみにいけん。視線がこわいのや。

地獄や。

つらいでえ。

心も体も乱れて、生き地獄や。

………

課長代理がノイローゼになつてな。途中まで出勤するのやが………そこから郵便局まで、どないしても、こないしても、これん。ノイローゼの薬飲んで、だめで、とうとう、2年間入院や。あげくのはては、辞職や。

労演のサークルの世話していた若い郵便課員が庶務課に配転になつて、こころにもなくや、ええ友達やつたんや。

突然、蒸発してしても。行方不明なんや。家にもかえつてこん、職場にも出勤せん。こういう場合、残つてい

る有給休暇過ぎて、3ヶ月経つと首や。

そんな、こんな、いろんなことがあつて、全通が団結ガンパロウを着々と準備してなア。

官の方は、つまり局の方は局の方で、権力的に対決しよ



るし。

そんな時、労担が、俺に、落ちそうな全通の友達の主任に、全郵政に加入したら、直ちに、昇進させてやると、いうてこいと、いつもは、我々の身分では行けそうにもない料亭で、飲めや、食えやのおごりや。そいつと俺は先輩、後輩でもあるし、心許しあっていた仲間なんや。

若いもんが男になるための勉強、学習……あるやろ？あれ……あの方……  
なにが一人前、かが一人前というても、あれが一人前にならんことには。

……  
教育、教育、教育の荒廃というけど……  
受験教育と学問教育とはちがうんや、まして、雌雄のオスの……

知能の発達と体の発達と心の発達とはちがはくになることがある。男になるための学習、これほど、むづかしいものはない。この学習友達でもあつたのや。

今は、ものいわず、挨拶もしない仲、俺はその料亭に友達を呼び出して、話をしたけど、なんぼ、話しても、友達のいうことが正しくて、俺のいうことが間違いなんや。  
俺は全通にもどつたんや。

も努力せえ。

明るい職場になるように、まず、君がやりたまえ。え？う？

後輪のタイヤがパンクしたら前輪だけで動かん、業者の正常運務が出来なくなる。

……  
明るい職場やて、ちゃんちゃらおかしいわ。  
誰が、こんな、暗い、職場にしたんや。

……  
君が、まず、努力せえて……お前が管理者やろ……  
つい、むかむかっときてしても……カッとなつてしても……  
……それでも、落ち着け、落ち着け、自分にいきかせて、……  
局長さん！

俺は局長のネクタイをそつと持って、いや、ひっぱったかな？……郵便の仕分けの机の足を蹴った。  
局長の足やない……机の足。

……  
ほな、……俺は懲戒免職や。

……  
打ち首や。

……  
侍の世の中と違うんや。

……  
そしたら、こんどは、全郵政から総攻撃。官からも、あらゆる嫌がらせ。

配達の仕事の赤い自転車のタイヤに千枚とうしをさして、パンクさせよる。配達地図をかくしよる。

俺のロッカーに、つばをかけよる、たんをはきよる。自宅のガラスに石をなげつける。

……  
帰る時、郵便局から駅まで、つきまとうて、罵声をかける。

……  
その頃から、急に、局長が日に、3回も、局内を巡回するようになった。

……  
巡回をする局長の真似をする。

……  
圭次郎 俺たちはこそ、こそ、……ちちこまって、仕事する。

局長が去る。

……  
自分がほつとするときの真似。

……  
圭次郎 そいでな……おそる、おそる、直訴したんや。パンクさせよるつて。ほな局長（局長になって、さも、憎々しく）仲良く、仕事してもらえように、自分

……  
人間……一人の……一生の問題なんや……  
（泣きながら）虫けらとちがうんや。

……  
全通も全郵政も、郵産労も中立も、……ちやんと、仕事したいのや。

……  
だが、こんな喧嘩させたんや、暗い職場にさせたんや。

……  
ええ加減にさらせ！

……  
ネクタイ持っただけで、暴力か……  
……  
労務政策が暴力以上の暴力やないか！

……  
そのときの支部大会で……支部長が、これは、ひどすぎる……行政不服審査請求をしよう……  
……それで、駄目なら、裁判にしよう……やり抜こう……これくらいで、負けていたらあかん。君の決断しだいや言うてくれたんや。

……  
……けど、俺の親はお上にたてついたら、子々孫々にまで禍がおよぶ。辛抱せえ。じつと耐えろ。  
……自分の首を切られたのに、よう、闘いもせんかつた。

情けない男や。俺は。  
あかんア。  
あかんア。

俺の人生は、ゴミくずのように、なつていったんや。

いない！こら！  
郵便屋！

話くらい、聞いてくれや……身の上、いえと言うさか  
い……

今の郵便局員は、人の情け、いうもんも、わからんまで  
に、なつてしもたんか。

真面目に、ヘイ、ヘイ、はい、はい、言うて……ここにこ  
して……仕事するだけの、おとなしいロボットか。

郵便局を守るために、どれほどの先輩たちが、血みどろ、  
汗みどろの、涙みどろの苦勞をしてきたか、それを知つ  
てほしい！

国民というか、民衆というか、大衆というか、お客様と  
いうかサービスするために郵便局を……苦勞した  
のや……

そんな薄情な郵便局員なら、もう、ええ！郵政省解体し

SE 単車走り去る。

郵便受け箱から手紙を取り出す。

圭次郎 拝啓、桜の花が咲き、そして、散りました。はや  
若葉の風薫る、すがすがしい今日このごろです。

圭次郎様におかれましては、毎日、毎日、郵便外務員を  
いじめながら、ご機嫌よく、お暮らしのことと、お察し  
申しあげます。

あの郵政マルセイの頃は、つらい、つらい、日々では  
ありませんが、でも、人生が燃え上がって、生き甲斐の  
ある、闘いの季節でもありましたね。

この天満橋の橋の下から眺めておりましたが、昨今は、  
いずれも、深刻な、破滅現象であるのに、抵抗、闘いと  
いうものはありません。全くといっていいほど。それが  
かえって、不気味です。

苦悩と絶望と迷いの連続であるのに。

あのとき、私たちは、官の、一方的な、理不尽な、法  
律違反の労務政策に反抗して立ち上がったのです。

時間外にしか集会はできませんでしたから、公労法、  
公務員法で。町中を提灯デモして……

でも、あなたに、せひ、思い出していたきたいのは、

て株券にして売ってしまえ、砂漠のような世の中になれ  
！もう、とうに、なつてるな。

缶ビールを飲む。

手紙をポストに投函する。

よろよろ、歩く……  
乳母車を押す。

風の盆の踊りを踊る。

今度は、自宅の前の郵便受け箱の横。

圭次郎は、居眠りをしているが椅子から何回も落ちる。

圭次郎 まだ、配達きやがらん。

SE 単車来て、郵便受け箱に郵便物をいれる。

圭次郎 配達が遅いやないか！

こら！逃げるな！

郵便屋を追いかけ回す。

下の原君のことです。

私たちが全通とか全郵政とかいって激しい闘いの真っ最  
中におりましたが、彼は人妻との恋の真っ最中であつた  
のです。20年あまりも経っているのに、彼のことが頭か  
らはなれません。

ひよっとしたら、私の寿命が、もう、つきるので、人  
生のいちばん大事なことを思い起こしているのですよう  
か？

人間の三大苦勞は、お金と、病氣と、恋だそうですが  
……  
その中でも、恋の苦しみは、もつとも、つらい、おおき  
な苦しみだそうです。労働組合問題で大揺れするとき、昼  
の休憩時間、私と下の原君と、支部長と3人、卓球をし  
ていたのですが……  
昼食を食べて、小休止もしないで、卓球をやつていまし  
た。若いから、限りなく、体が動くものだから……  
下の原君は郵便局きつての男前で、性格もよく、仕事も  
抜群で前途洋々の好青年でした。

私は、どちらかというと、……労働運動も政治活動  
も嫌いで、そんな気持ちも意志もあまりない、ただ、郵  
便局の仕事がすきで、配達をすることに、  
無上の喜びを感じていたのです。

支部長は左翼のバリバリでしたが、組合員には何党を

支持しても、どんな宗教を信仰していても、おおらかでした。  
200名の組合をよくまとめておりました。  
ある時、急に、卓球の手をとめて、

圭次郎（下の原） 支部長、話があるね。

（支部長） 下の原さん……どんな話や？

（下の原） 圭次郎君、ちよつと、すまん。

支部長、俺、恋をしてしようたんや。

（支部長） そうか、組合のことと違うんか？恋か？すばらしいやないか！

（下の原） それが、ちよつと複雑で……

（支部長） そら、君、恋はいつでも、複雑で、ややこしいもんや。

（下の原） 死ぬほど、好きなんや。

（支部長） ええやないか！恋で死ねたら……にんげん……幸せなことないよ。交通事故よりも、戦争よりも、恋で死ねたら……もう、この上ない喜びやないか。

（圭次郎） せやけど、死んだらあかん。  
圭次郎 ようやつと、これだけのこといいました。私が書を配達に行った時、相手の奥さんの旦那さんが、うつむいていた私の顔の前に、出刃包丁をつきつけて、殺し

りますねえ……では、また。敬具、小山圭次郎拜。  
圭次郎、乳母車を押して、斜めに進む。  
狂言の進行を参考にして。  
ダンボールの赤いポストを取り出す。  
横に座る。

ポットからお湯を出してカップラーメンを作る。缶ビールを手に、ラーメンを食べる。

圭次郎 なんて……こない……うまいんやろなア。

………  
なんで……まだ……俺は……生きてるんやろなア。

缶ビールを飲む。

圭次郎 ビール……飲むために……生きてるのかな？

56 郵便収集の軽自動車に来て、止まる。

圭次郎 くら！郵便屋！今日は軽自動車か？  
人もかわつてるな？もつと、ていねいに郵便物を取り扱

てやる！

すると、奥さんが、この人と違います！  
そんなことがありました。

（支部長） 人間は、どうせ、死ぬね、一生のうちで、死ぬほどの恋愛、できたら……。

（下の原） それが……人妻なんや。

（支部長） 人妻か……うーん……恋に、定石はないしなア……仕方ないんちがうか。

（下の原） わかった！おおきに！支部長に話して、気持ち、すつきりした。決心できた！卓球やろ！

………  
圭次郎 それから、3人で、楽しい卓球をしましたね。

………  
三日、経って、下の原君は、下宿で、一人、自殺をしてみましたね。

一日、遅れて、相手の子供のある奥さんが、子供を、親元にあづけて、後追い自殺をしました。これ、心中や……。

あなたは、大好きな、大好きな郵便局を免職、しかも、懲戒……。

人生って、いったい……なんなんでしょうか。

郵便屋！若いとき、よく、こうよばれましたねえ。

郵便屋！この言葉には、なんともいえん、ええ響きがあ

え！俺の一生をかけた大事な、大事な手紙、はいつとるんじや。  
全通？全郵政か？郵産労？無所属か？  
………  
返事もできんのか？  
………  
だらしのない奴じや。

職場の中、えらい、暗いというやないか……  
民間も、リストラで、肩たたき、配転、出向、首切り、はやっている。さまよえる理想主義の世の中というそうやが、学校も会社も、いじめが横行しとる。  
郵政省も、大量の人員整理発表しよった。  
芥川龍之介の「クモの糸」いう小説読んだことあるか？  
ないのか、いっぺん、よんどけ。

職場の中、監察だけ、いばつておるといいうやないか。  
もう、江戸時代に逆戻りしたというやないか。室町、応仁の乱になるかもしれんぞ。  
自分で、しつかり、考えて……行動せえよう……

自分の道……選ぶんやぞお。  
もの言いたいときは、ほそほそ言うな、はつきり、言え、戦いたいときは、戦うこと忘れるな、おじけついたらあかんぞ。……戦いたくないときは……辛抱して、涙

ながしてあげ。

しっかり、やってるか？しっかり、生きろよ。  
仕事と職場、だいじになア。

おっさん、あほかって？

㊤ 軽自動車 走り去る

圭次郎 おっさんは、あはや……………。

おっさんは…ほんまに…あほな一生、すごしてもた。  
なんで、あのときに……………。

泣きながら、ラーメンを食べる。

泣きながら、缶ビールを飲む。

おんおん、泣きながら、乳母車を押す。

郵便受け箱を出して、その横に座る。

㊤ 鶯が啼いている。小鳥達が啼きながら飛んでいる。

圭次郎 鼻ひげをハサミでつむ。爪をつむ。

圭次郎 でもなア……………あのときは感激したなア。

㊤ 全連の歌。がんばろうの歌。

……………仕事が終わった時間外に、広い中庭に、各郵便局からの応援、地域の労組の応援で、赤旗が立ち並び、ひと、ひと、ひと、で、いっぱい労働者、ひと、ひと、ひとが車道まであふれて。

NHKの中央執行委員長が来てくれて

“日本が危ない！”

“日本が危ない！”

叫んでいたなア、

提灯行列のデモをやって……………町中を練り歩いて、最後に郵便局の周りをデモした。

警察が“解散しなさい！解散しなさい！さもなければ逮捕します！”大きな音量のマイクで連呼しているとき、そのときに、社会党の成田委員長が来てくれて……………万歳！万歳！の声が地の底から、わき上がるように叫んだ。すると、警察も、いっぺんに黙ってしもて……………

成田委員長の全盛の時やったなア……………いや、ちよっと、落ち目になっていたな。でも、

どんなわけで、こまってまんね？

……………言いたくないこと……………言えないこと……………口にだして……………言うたら……………気イ…すうーつとなることもある。

好きな男とかけおちして、売られて、だまされて、サラキン地獄……………好きな男、逃げて……………サラキンだけが、……………そうか……………ま……………酒でも、飲みなはれ、ウイスキー？

よっしゃ、いま、つくる。

ウイスキーを水割りにして、氷も割って入れる。レモンもおとす。

圭次郎 え？冷蔵庫？……………ひろてきた。テレビ？ひろてきた。洗濯機？ひろてきた。大型ゴミの日には、なんでも、すてである。金庫もすてである。俺には必要ない。電気？外灯のしたから、ひいてある。ただや。水？公園の水道でもらう、おけんたいや。ただや。

えらい文化生活してるてか？のみなはれ……………うまいでつか……………よかった。もう、いっぱい、……………もつと、ゆつくり、のみなはれ。アルチュウ？むりもないやろ。サラキンの金利高すぎる。

公定歩合0・5や、サラキンの金利30%。生活、破壊す

“君たちは正しい！”  
君たちは正しいのだ！”  
言うてくれた。

SE 鶯が啼く。

圭次郎 配達が、また、遅い。

心神喪失になっている裸足の女、前を行ったり、  
来たりする感じ。

圭次郎、それを、眺めている。

圭次郎 あらア……………はだしで……………若い女の子が……………  
あの……………あつ……………川へ落ちたら……………死にますよ。  
わかっているの？わかってまへんか？  
俺も、年とったさかい、昔のように、泳ぐことできん。  
俺も一緒に、溺れて、死ぬ。

……………え？一緒に死にまひよか？

……………お断りします……………あぶないなア……………猫、ぎ  
ようさん、いとる。猫とどないでつか？いらん……………猫、  
すきやない。おれもや。

るの当たり前や。

大蔵省……どないしとるんや。

ウイスキーの銭、ないよって、さわってええてか？

ただや……この酒は、高級バーのゴミ箱に、封したまますててあった。

そういうわけにいかんて、そんなん、みせるもんやない……。

圭次郎、興味もないことはないが、あらわにされて、逃げる。

圭次郎 泣かんでもええて、うん、いろ、しろい、魅力的や。けどな、おっちゃん、最近、さつぱり、役立たずなんや……みただけでも、みてくれて……。

たいしたものや。……ここへ、泊めてくれてか？困ることいなア。……。

あのな、ここに、郵便貯金250万ある。これでサラ

キン地獄、かたづけてきい。俺は、金のかからん生活してる。やる。やるがな。

嬉しいのか、そんなに、うれしいか？はんこもやる。俺は、はんこのいらん生活してる。みせんでええて、十分、天国にのぼった気持ちする。はよ、いき。いきなはれ。ウインクしてくれるんか。

また、明日が……あるわい。

……

顔 覚えたし……いじめて……やる。う？……いてる。なに……？（遠くの声聞き取るため、耳に手を補い）現場、めちやくちや、しんどいや……上部組織には、はらわた、にえくりかえることばかりや。

せやから、へらへら、漫画読んで、その場、その場をしのいでるんや。

全通の委員長、郵政大臣になってから、もう、無茶苦茶なんや。

気いのはれる日ない。猛烈ロボットや。おっさんの生活参考になるわ、ヒッピーや。

SE 単車遠く去る。

圭次郎 ヒッピーか、俺は……大したもんやな。

郵便受け箱から手紙を取り出して。

圭次郎 親愛なる圭次郎様 もう、そちらの公園では、ほとときすが啼いていることでしょう。

圭次郎、乳母車を押して、逃げ腰。

圭次郎 あの250万は、たしかに、おれが預金した。

せやけど、浮気をして、家を出た妻が、カードで、すっかり、引き出したあとの、もぬけのからの通帳や。

簡易保険証書も再発行、解約されたからや。

あの姉ちゃん、詐欺罪でおれを訴えるかなア？

SE 鶯が啼く。

圭次郎 また、遅い配達や……。

郵便受け箱を離れる。

SE 郵便受け箱に手紙を入れ、離れた場所においてあった単車で去る。

圭次郎 こら！遅いやないか！

圭次郎 追いかける。

圭次郎 ……

ほとときす

なきつるかたを

ながむれば

ただありあけの  
つきぞのこれる

……

ええ、うたですなえ。

今日は藤田君のことを書きます。

……藤田君のことも、どうしても、忘れることができないのです。

決起大会が炎のように燃え上がって、過ぎてしまうと、まるで、潮がひいていくように、全通組合員が、ぼろぼろ、落ちていつて、全郵政にうつっていきましたね。全郵政が組織組合員の過半数をとって、超勤協定をむすぶ権利の36協定権も移りました。

その頃から、長い、苦しい、にがい時代にはいりました。全通の活動家であった藤田君は、失望に、失望をかさね、カメラで、虫や、花や、風景を撮影することに、熱中してゆきました。

カメラもやりだすと、もつと、良いカメラ、もつと、良いカメラとエスカレートして……。

とうとう、郵便物の中に入っている、ほんとうは、郵

便物の中にお金を入れることは禁止されているのですが

.....  
そのお金に手をつけてしまいました。

そして、懲戒免職です。

藤田君は労山クラブにはいつて、登山に熱中が移りました。

私は、まだ、郵便局に未練たらたらで、よく、でかけていきました。藤田君と話をしたり、お酒を飲んだり.....

.....よく、つきあいをしておりました。

僕も君も、なんで、こんなことになったんやろなアといいながら、喫茶店でコーヒーを、よく飲みました。

.....彼はアルプスに登山した折りに、あとから、下山してきた仲間が、雪崩にまきこまれ、遭難してしまいました。彼は、止めるのも、聞かずに、一人で、助けにいきました。

二重遭難になってしまいました。

仲間が、雪の中から、彼を助けた時、彼の体は、まだ、暖かかったといっています。

.....  
なんで、こう、次々.....

泣きっ面に蜂となるんでしよう

.....  
いろんな、仕事、してきました。

.....多くの、苦勞、積み重ねて、日々を、しのいで来ました。

.....  
最近、.....少し.....わかってきました。

.....もう、どうにもならないのですが、遅すぎるのですが、

.....職場の中に、憲法が生きていないのです。

.....司法制度が、立派に、存在しています。しかし、

.....すべて、国民は勤勞の権利を有し、義務を負う。  
第27条。

.....すべて、国民は個人として尊重される、第13条。

.....この憲法が、国民に保障する自由および権利は、国民の  
不斷の努力によって、これを保障しなければならない。  
.....12条。

死ぬ前になって.....こんなこと知っても、あきまへ

んな.....なんの役にもたちまへんな。

.....  
どうか.....ポストにだけは、首をくくって死ぬなんてことしないでください。私は、それが心配で、心配でなりません。

.....あなたが、そういう最後にしたいと願っておられることが、ひしひしと、わかりますので.....  
くれぐれも、くれぐれも、御身お大切に。

.....また、お手紙、お出ししたいものです。

.....赤い風船をつけた乳母車を押す。

.....赤いポストの横に、道の上に座り込む。

.....赤いポストに縄をかける、縄の端を自分のくびにまく。

圭次郎 いま死ぬべきか？

.....もう、ちょっと、ビール、飲んでからにするべきか。

.....「たすけてほしくはないが」

.....  
風よ そんなに

.....  
ふいてくれるな

.....俺のころは、さみしさのどんどこ

.....助けてほしくはないが

.....おぼれかけている

.....太陽よ そんなに

.....照りつけるな

.....俺の体の 水分はもうすこし

.....助けてほしくはないが

.....息が切れそうだ

.....  
圭次郎 死んでみようか.....死んだらか.....

.....それとも、もう少し、生きてみたらか.....

.....幕

# 情報BOX

今後充実させていきたいコーナーです。  
情報を編集部までお寄せください。

半額でみられます

ロシア国立オムスクドラマ劇場の  
『三人姉妹』『砂の女』

ロシアオフィス企画制作（松下朗さんのプロデュース）。「ロシア国立オムスクドラマ劇場来日公演」を東京芸術座が協力しています。リアリズム演劇会議所属の劇団員は、一般『三人姉妹』7000円、『砂の女』5000円を半額で観られます。松下朗さんの英断価格です。申込みは東京芸術座（03-3997-4341）まで。

ただし、『砂の女』は、ロシア公演（モスクワ芸術座小ホール）と同じ条件での希望があり、1公演200席しかありません。人数限定あり、先着順受付です。（印南真人）

※一四頁及び裏表紙広告  
をご覧ください（編集部）

「名古屋演集50年史」を  
差し上げます。

1998年1月23日（金）は、名古屋演劇集団（略称劇団演集）の創立50周年記念日です。この記念日にむけて企画している仕事の一つに、劇団の50年史があります。これについては丸子礼二が執筆して、すでに一応の原稿は書き終わりました。次は印刷に回す段階なので、記念日までにはまず、できるつもりです。この本は諸般の事情から販売をしません。ご希望の方に差し上げる方針です。

そこでお願いです。名古屋演集50年史（仮称）をご希望の方は、左記まで、①お名前、②所属（なければ個人）、③住所または連絡先、④TEL・FAX・メールなどの番号、⑤希望冊数をお知らせ下さい。

（内容は名古屋の劇団演集の創立から現在まで、松原英治、若尾正也などの文章を適宜

引用しつつ、丸子個人の“思い出ばなし”をまじえたものです。資料としてもいくらからお役に立てたらと念願しています）  
\*連絡先：丸子礼二（本名は、平野二郎ですが郵便物も“丸子”で届きます）  
〒463 名古屋守山区元郷  
1-1101 大森東住宅12-303  
TEL 052-7998-2865  
FAX 052-7998-2092  
メールアドレス Hirano@bsnet.or.jp

「演劇によるまちづくりシンポジウム」を八雲村「しいの実シアター」で行います。

▼98年2月7日（土）・8日（日）の2日間、八雲村に拠点を持った劇団あしづえは「演劇文化をもっと暮らしの中に広めたい」との願いから、全国各地の演劇によるまちづくりの実態から学ぶチャンスとしてシンポジウムを企画しました。これはあしづえの他、村民の実行委員会で組織した「星降る里の演劇村計画」の主催です。  
司会 ふじたあさや（劇作家・演出家）

## 東京芸術座創立40周年記念戯曲公募

◇劇団東京芸術座では、広く人々の魂に、真実の愛と勇気を育てることのできるような戯曲、また新しい演劇への道をひらく独創的な戯曲を求めています。ぜひ意欲的な作品をお寄せください。

◇応募条件

未発表の創作戯曲に限ります。ただし、地域劇団サークルなどで上演されたものでもかまいません。

◇400字、100～150枚（ワープロ可）

○なお応募作品は返却しません。

○入選作品の上演権は劇団に属します。

佳作の場合優先上演権は劇団に属しますが、上演料については別途ご相談させていただきます。

◇賞金

入選……………100万円

佳作……………10万円

◇審査員（アイウエオ順）

小山内美江子・勝山俊介・菅井幸雄・高田正吾・津上 忠  
平石耕一・ふじたあさや・宮岸泰治・吉永仁郎

◇締切……………98年8月31日

東京芸術座

〒177 東京都練馬区下石神井4-19-11

電話 03-3997-4341

### 伝言板

貸します、譲ります  
探しています、など  
編集部までどうぞ。

◆お貸しします

・そろいの浴衣100枚

・とんび服（大正時代のもの）4着

・海軍の衣装5着

↓宇部市民劇場若者座

・ウエディングドレス4着

↓生活舞台

※いずれも貸料は無料です。クリーニング代と送料のみです。

パネラー 岩波 剛（演劇評論家）

” 土井美和子（演劇ジャーナリスト）

” 川村光夫（岩手・劇団どう座代表

” 團山土筆（島根・劇団あしづえ代表

基調講演 衛 紀生（演劇評論家） 他

せつかくの機会です。沢山の方々の

参加をお待ちしております。

※詳しくは、しいの実シアター、劇団あしづえ

までお気軽にお問い合わせください。資料をお送りいたします。

TEL 0852-54-2400

全り演 事務局だより

合同総会盛大に

今年の総会は東西合同で開催されました。フェスティバルを控えてのため約3時間の短い時間でしたが、コクのある総会でした。

『演劇会議』発行体制西会議に

これまでの3年間東会議で担当していましたが、本号より西会議が発行業務を引き継ぎます。あなたの劇団には『演劇会議マニエール』ちゃんと届いていますか。これを見れば「いつ」「どのように」送ればいいのかすぐわかります。ぜひ一読ください。

自立の会(京都)が加盟

また全り演の仲間が増えました。自立の会は創立から21年間、劇団員は現在11名。年間6〜7ステージをこなしており、これまでに上演した主な作品は、「しらい」、「おこんじょうるり」、「看護婦のおやじがんばる」、「きらくめく星座」、近松作品「堀河波の鼓」ほか。連絡先は、〒520 滋賀県大津市横木 1-10-17 谷田昌隆方

読者のページ

なぜ今、ロシア演劇プロデュース！

松下 朗

いま、この歳でなぜプロデュースをどける人が多い。特にプロの制作者からは「ロウさん、乱心。無謀な！」とハゲマシウをいただいて、これこそやりとげなければと考えています。制作者からみれば、絶対赤になるー採算がとれるわけがないと考えているのです。この不足分を理解あるスポンサーに求めてでもぜひ上演し、観てほしい思いが私に制作に踏み切らせました。今、日本の演劇事情は最悪だと考えています。冷えています。なぜ芝居をみなくなったのか、なぜ劇場はガラガラなのか、演劇人の責任云々の前に、単純明快、かつての芝居の魅力がなくなっているからだとい

したことになり、これで加盟集団は東が37、西が30、合計67集団、個人10名となります(今回から休会中の集団は除きました)。

考えています。これは演劇の危機とも言えるものではないでしょうか。芝居の醍醐味がなくなってしまうのです。

私は近年、ロシアでの仕事が多くなっていますが、ロシアの演劇の伝統と云ってしまえばそれまでですが、創り手に、芝居創りへの情熱がまだまだ燃え続けているように思えるのです。チェーホフ狂いの私は、日本でもモスクワでもいくつかの舞台をみてきました。チェーホフ戯曲のもつリズムに出会うことは稀でした。今回公演の三人姉妹はそこにチェーホフが生きている思いでした。

言葉がわからなくても、今のロシアにチェーホフが生きている。いつもそんな思いで、日本の演劇ファンはもとより、職業演劇人にこそぜひみてほしいと思っています。

宮オフィスからの心からのお願いです。

97年12月以降の公演&行事

●劇団通信の中から12月以降の公演や行事をまとめましたので、都合のつく方はぜひ観劇し合ってください。また、次号発行は4月ですので、そこへのせる情報BOXへの原稿もお待ちしております。(2月20日〆切)

演劇集団和歌山	12/3~4	和歌山県民文化会館	イーハトーボの劇列車	井上ひさし・作/橋本幸男・演出
劇団名芸	12/5~7	平針小劇場	夢舞台	栗木英章・作/片野耕治・演出
劇団やまなみ	12/6	甲府市総合市民会館	いのち燃えて	河野通方・作/梅津幸三・演出
京浜協同劇団	12/9	横浜青少年センター	金魚修羅記	黒沢参吉・作/細田寿郎・演出
演劇集団石るつ	12/12~13	深川江戸資料館小劇場	たのむ	里見 淳・作/内田 透・演出
"	"	"	和泉屋染物店	木下登太郎・作/内田 透・演出
関西芸術座	12/12~13	近鉄小劇場	ロミオとジュリエット	シェイクスピア・作/岩田直二・演出
劇団息吹	12/13	八尾オリスム小ホール	遺産らぶそでい	山下惣一・作/高橋正園・脚色/木田昌秀・演出
テアトル・ソノカタ	12/13	電気ホール	大地の子守歌	石山浩一郎・作/中村ジョー・演出
演劇集団石るつ	1/27	熊本市民会館		
劇団銅鑼	1/24	東京芸術劇場		
"	1/16~23	NYダニー・ケイ劇場	おこんじょうるり	さねとうあきら・作/境野修次・脚色
"	"	"	センボスギハアラ	平石耕一・作/山田昭一・平石耕一・演出
劇団あしぶえ	1/25	〈応援ツアーを募集中!〉詳細は劇団へどうぞ		
劇団河童	2/14~15	出雲市民会館	アラホーアテアル先生	平石耕一・作/園山土筆・演出
神戸職演連	2/14~15	芸術文化ホール	愛さずにはいられない	ジェームス三木・作
劇団はぐるま	2/20~23	アートビレッジセンター	遺産らぶそでい	山下惣一・作/高橋正園・脚色/三村省三・演出
劇団埼玉	2/26~3/1	御浪町ホール	月の岬	松田正隆・作/波田正子・演出
劇団はぐるま	3/15	桶川市民会館	田舎教師	田山花袋・作/柳俊郎・脚色/由布木一平・演出
劇団はぐるま	5/9~10	東京芸術劇場	新島の飛騨んじい	こばやしひろし・作/演出



# 全国リアリズム演劇会議 住所録

## 東 会 議

ブロック	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
北海道	劇団さつぼろ	063	札幌市西区宮の沢3条4-14-8	011-663-6259	011-663-8198
	劇団新劇場	065	札幌市東区伏古11条2-396-47	011-784-9908	
	ドラマシアターども	067	江別市高砂町37-90 安全智康方	011-384-4011	
	劇団弘演	036	弘前市品川町1 フラージュ内	0172-35-4670	
奥	劇団支木	030	青森市中央2-4-6	0177-77-4677	0177-77-4677
	黒石演劇研究会	036-03	黒石市乙徳兵衛町51 加賀谷方	0172-52-4097	
羽	劇団やませ	031	八戸市大字鯉町字下松苗場14-183 榎谷方	0178-33-3850	
	劇団未来半島	035	むつ市緑町26-2 (鮎丸二物産内 仁木方	0175-24-1189	
東北	劇団山形	990	山形市東青田町5-8-5	0236-32-4105	
	劇団だいごん座	997	鶴岡市青柳町42-32 たんぼぼ保育園内	0235-24-1688	
関	劇団仙台小劇場	980	仙台市青葉区五橋1-5-13 平和友好会館2F	022-264-2340	022-264-2340
	劇団群馬中芸	371-01	群馬県勢多郡富士見村赤城山大河原626-498 未来スタジオネ	0272-88-2700	
	劇団埼玉	362	上尾市日の出町4-508-1	048-777-4430	
	劇団久喜座	346	久喜市中央1-3-13 江原方	0480-21-0664	
東	青年劇場	160	東京都新宿区新宿2-9-20 間川ビル4F	03-3352-6922	03-3352-9418
	劇団銅鑼	174	東京都板橋区中台1-1-4	03-3937-1101	03-3937-1103
	東京芸術座	177	東京都練馬区下石神井4-19-11	03-3997-4341	03-3904-0151
	劇団展望	166	東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-3-32	03-3393-2739	

ブロック	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
関	演劇集団石るつ	134	東京都江戸川区西葛西3-15-8-701 境野修次方	03-3804-0507	
	演劇集団土くれ	105	東京都港区虎ノ門1-12-1 第1法規ビル 福田事務所内	03-3508-0104	03-3508-0140
	劇団阿修羅	157	東京都世田谷区南鳥山2-33-15 川崎方	03-3309-8633	
	京浜協同劇団	211	川崎市幸区古市場2-109	044-511-4951	044-533-6694
東	劇団蒼生樹	220	横浜市西区伊勢町3-133-824 濱田方	045-242-3584	045-242-3584
	三浦半島劇団海	238-01	三浦市南下浦町菊名56	0468-88-3142	
	劇団やまなみ	400	甲府市青沼1-8-5 梅津方	0552-33-9556	0552-33-9556
	劇団静芸	420	静岡市昭府町1-10-37	054-273-0604	
山	劇団からつかぜ	431-02	浜松市篠原町21505	0534-49-0937	
	劇団火の鳥	421-21	静岡市安倍口団地5-38-308 泉地守方	054-296-1297	
	岡崎演劇集団	444	岡崎市元次町3-10-3 浅井方	0564-21-2614	
	劇団名芸	463	名古屋市天白区平針1-1808	052-803-2922	
静			(急ぎ、小包類は 457 名古屋市南区汐田町11-8 (栗木) )	052-821-3691	
	名古屋演劇集団	451	名古屋市西区庄内通4-16-3	052-524-5975	
	劇団名古屋	456	名古屋市熱田区新尾頭町2-2-19	052-682-6014	
	劇団上野市民劇場	518	上野市丸の内・共同ビル3F	0595-23-5252	
中	劇団すがお	511	桑名市睦美ヶ丘1058	0594-31-4210	0594-31-4210
	劇団夜明け	508	中津川市北野丸山	0573-65-4937	
	劇団はぐるま	500	岐阜市西野町1-11	058-265-1852	
	劇団たけぶえ	915	武生市四郎丸2-2	0778-23-0147	0778-23-4095

## 西会議

	劇団名	〒	住 所	電 話	F A X
	関西芸術座	557	大阪市西成区岸ノ里東2-10-2	06-661-2112	06-661-2060
	劇団潮流	557	大阪市西成区松1-6-17 橋モータープール内	06-658-2315	06-656-4121
大	劇団未来	536	大阪市城東区成育1-4-25	06-939-5777	
	劇団きづかひ	551	大阪市大正区泉尾4-2-7	06-553-7991	
	劇団大阪	542	大阪市中央区谷町7-1-39 新谷町第2ビル103	06-768-9957	06-768-9957
	劇団コーロ	546	大阪市東住吉区公園南矢田2-4-7	06-695-6401	03-695-6405
	人形劇団クラルテ	559	大阪市住之江区区南加賀屋3-1-7	06-685-5601	06-686-3461
阪	大阪府職劇研	540	大阪市中央区大手前元町 大阪府職労第2書記局	06-941-3130	
	劇団息吹	578	東大阪市中野224-14	0729-64-4441	
	座わたち	572	寝屋川市東神田町22-21 安田方	0720-28-1349	
京	劇団京芸	612	京都市伏見区納所北城堀31-18	075-631-2609	075-631-2609
	人間座	606	京都市左京区下鴨東高木町11	075-721-4763	
都	人形劇団京芸	611	宇治市白川鍋倉山35-20	0774-21-4080	
	劇団自立の会	520	天津市横木1-10-17 谷田方	0775-23-1891	
和歌山	演劇集団和歌山	641	和歌山市和歌浦南1-1-14	0734-45-4537	
	劇団四紀会	650	神戸市中央区元町通2-9-1-612	078-392-2421	078-392-2422
神	劇団とろ	652	神戸市兵庫区大開通7-4-7 谷垣ビル4F	078-576-6488	
	神戸職演連	650	神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル	078-351-6969	
戸	劇団かすがい	660	尼崎市昭和通1-17-1 石和久ビル3F	06-489-8984	06-489-8984
	神戸トラマ館ボロ	650	神戸市中央区下山手通9-9-7 西藤ビル2F	078-361-9870	
中	劇団月曜会	730	広島市中区榎町4-27 岩井方	082-234-9656	
国	宇部市民劇団若者座	755	宇部市松山町4-10-24 東洋鍼灸院内 天羽方	0836-21-7468	

フロック	劇 団 名	〒	住 所	電 話	F A X
中	演劇サークルトラム	753	山口市大字吉敷2025	0839-20-2835	
国	劇団演劇街	753	山口市中国町1-3 やの舞台美術内	0839-24-0075	
山陰	劇団あしびえ	690-21	島根県八束郡八雲村平原481-1 シィの実シアター	0852-54-2400	0852-54-2411
四国	劇団こじか座	790	松山市木屋町4-35-1 酒井方	0899-24-3415	
九	福岡現代劇場	810	福岡市中央区薬院1-6-5-410	092-751-7982	
州	劇団生活舞台	815	福岡市南区長丘2-15-4-401 平原義行方	092-511-4866	
	劇団道化	818-01	太宰府市太宰府2629-10	092-922-0737	
	劇団テアトルハカタ	812	福岡市博多区上川端10-15 ローゼンション901	092-271-5090	092-282-4513

個人加盟	氏 名	〒	住 所	電 話	F A X
	桜井 裕子	921	金沢市山科3-6-10 早川方	0762-44-2802	
	大橋 喜一	210	川崎市幸区小向仲野町3-2-406	044-533-3779	
	岡田 和義	176	東京都練馬区羽沢2-12-8	03-3991-1723	
	こうじ谷 一郎	924	松任市若宮町2-4	0762-75-2755	
	大原 権子	215	川崎市麻生区万福寺2-14-5	044-966-8125	
	川島 柳一	270	松戸市金ヶ作57-57	0473-84-6207	
	小松 徹	663	西宮市宮前町8-8 ネオハイツ宮前町401	0798-36-8341	
	栗原 省	643-01	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	
	又川 邦義	560	豊中市堂ヶ池東町1-13-11-302	06-849-0758	
	阿部 好一	565	吹田市千里山西3-30-16	06-385-3330	
	宮階 延男	617	向日市鶴冠井町次の西5-18	075-933-3932	
	松永 英樹	753	山口市赤妻町1-67	0839-22-6071	
	東川 宗彦	581	八尾市服部川9-48	0729-41-0554	
	近野 正男	590-01	堺市若松台1-3-5-102	0722-91-6552	

友好劇団

劇団名	〒	住所	電話	FAX
アートステージくしろ	085	釧路市貝塚1-6-19 加藤たけはる方	0154-42-8009	
劇団新芸	047-02	小樽市銭函町3-23-162 鹿角優一方	0134-62-3254	
劇団河童	090	北見市幸町8-3-4 扇谷国男方	0157-24-3357	
劇団湖(うみ)	068-21	三笠市本郷町578-9 加藤元方	01267-2-3044	
釧路演集	085	釧路市寿2-5-1 中山知征方	0154-23-6551	
劇団ペルソナ	062	札幌市豊平区平岸4条12-8-4 秋本博行方	011-811-9036	
函館創芸	040	函館市川原町2-5 長谷川潔方	0138-53-7520	
劇団海鳴り	094	紋別市潮見町2-3-40 我孫子方	01582-3-3238	01582-3-3238
演劇集団未踏	121	東京都足立区梅島1-9-1	03-3880-0034	
演劇サークル麦の会	133	東京都江戸川区北小岩7-3-20	03-3659-8704	
川崎演劇塾	214	川崎市多摩区寺尾台2-8-1-12号504	044-951-9819	
劇団津演	514	津市大門31-28 仏教会館内 岸武雄方	0592-26-1089	
演劇研究所	420	静岡市秋山町2-1715	054-271-0177	
劇団はにわ	461	名古屋市東区矢田町3-9 7-ハイツリ-4矢田町401 下高原方		
演劇集団瞬(とき)	602	京都市上京区芦山寺通り千本東入ル北玄蕃町51-7 山脇方	075-414-8624	
演劇集団あり	683	米子市昭和町23-2 宮倉方	0859-33-9302	
劇団いこら	643-01	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-62-5675	

議長団	劇団名	〒	住所	電話	FAX
こばやしひろし	劇団はぐるま	501-01	岐阜市幸区東古市場9-21 (事務局長)	044-544-3737	044-544-3737
後藤 陽吉	青年劇場	184	岐阜市寺田852 円成寺	0582-51-0490	0582-52-3694
中野 健	劇団支木	030	小金井市貫井南町5-12-13	0423-81-1590	
仲 武司	関西芸術座	675-01	青森市中央2-4-6 劇団支木内	0177-77-4677	0177-77-4677
藤沢 薫	劇団京芸	615	加古川市平岡町土山953-8	078-944-5013	
梶 武史	劇団四紀会	673	京都市西京区榎原内短外町25-1-A403	075-391-5039	
猿渡 公一	福岡現代劇場	814	明石市東野町1-5-1009	078-911-1513	078-911-1513
事務局			福岡市早良区有田2-2-9	092-831-1696	
城谷 護	京浜協同劇団	211	川崎市幸区東古市場9-21 (事務局長)	044-544-3737	044-544-3737
浅野 真理子	劇団はぐるま	500	岐阜市西野町1-11 劇団はぐるま内	0582-65-1852	
熊本 一	劇団大阪	630-01	生駒市南田原1230-60 (事務局次長)	07437-8-2558	
田中 実	劇団息吹	581	八尾市山本町南7-6-7	0729-99-9437	
清原 正次	劇団大阪	570	守口市金下町1-12-13	06-993-3113	
編集委員					
早川 昭二	劇団銅鑼	168	東京都杉並区和泉1-9-12-201 (編集長)	03-3323-8943	
境野 修次	劇団集団石るつ	134	東京都江戸川区西葛西3-15-8-701	03-3804-0507	
石垣 政裕	仙台小劇場	981-11	仙台市太白区西中田5-23-1	022-241-1396	022-241-6138
山崎 三郎	劇団静芸	420	静岡市大岩2-19-10	054-245-5758	
栗原 省	劇団いこら	643-01	和歌山県有田郡吉備町庄684-32	0737-52-5963	0737-52-5963
赤松 比洋子	劇団きづがわ	663	西宮市高須町1-1-11-859 古川方	0798-45-3307	0798-45-3307
楠本 幸男	演劇集団和歌山	640	和歌山市加納271-14	0734-73-7589	

# 『演劇会議』発行の実務が西会議に移行するのにもならない、制作は(株)シイムに移ります。

## 「原稿の送付について」

専任の体制がないので原稿の送付先が変則的になりますが、よろしく願います。  
次号(4月号)の締切は2月20日です。  
戯曲などは作品ができたときにすぐ送ってください。また、劇評なども各劇団で依頼して上演が終わり次第送ってください。

①劇団通信および舞台写真は、(株)シイムに直送してください。  
〒547 大阪市平野区喜連西5-4-17  
TEL 06(707) 3833  
FAX 06(799) 3833

(株)シイム内「演劇会議」編集部

②戯曲については、早川昭二編集長または、栗原省へ送ってください。

③それ以外の原稿については、

東会議は東京連絡所 境野修次  
西会議は大阪連絡所 赤松比洋子

※それぞれの住所は131ページに掲載。

(編集部)

## ◆(株)シイムは

①社会に役立つ、社会的に意義のある仕事  
②企画・編集などの代理業務③高品質・低価格——を基本方針に、年間200件前後の出版物を制作しています。

大阪経法大「経済学論集」、日本住宅会議  
会報、全国児童協「けき」など定期雑誌や、  
人形劇団クラルテ「45年のあゆみ」、大阪証券労働組合「40年史」など多くの記念史のほか、新聞・ポスター・ビラ・チケットなども、劇団史や記念出版、公演のパンフ・ビラ・チケットなど、どうぞ遠慮なく相談ください。企画の段階からお手伝いします。

●書籍の出版も行っています。

老人介護手記集「共に生きる」

地上げ屋との闘い「この町に住みたい」

「糖尿病のある人生を生き抜いた人々」

「福祉広報紙入門」

「福祉まんがカット集」

住宅は人権・絵本「のんのクリスマス」

(担当者 石田 章)

## 編集後記

編集実務が、西会議に移行した。一歩でも、集団編集体制に近づけるか、私たちが全リ演の現状と実力が問われるところ。これまで以上に、本誌への感想・批判・投稿を期待するや切。

リアリズム・シリーズの反響が、徐々に広まっている模様。どしどし意見を。

中本先生、3回続投に感謝します。次号からも「全リ演」各集団の積極参加で、創造的刺激を喰い合いたいもの。

清洲すみ子のご逝去は衝撃でした。北林さんの追憶文が胸々と胸に迫りました。ご冥福を祈ります。(早川)

西会議へ発行体制が移行しての第1号。3年間の反省の上に立って。集団体制のさらなる充実と相互の情報伝達。各編集委員の連絡強化。各ブロック、地域情報の収集力強化など。全リ演全体の総合力で「演劇会議」を支えることが重要。その新たな第一歩が今号ではないでしょうか。少なくともいくつかの面で

改善があり、さらに多くの期待が寄せられるのであります。(境野)

40をすぎたからぶくと太りだし、かつてのスリムな体を取り戻そうとダイエット中。「演劇会議」の重荷も減量に役立てばいいのですが、来年からはできるだけ多くの加盟劇団の芝居を見て回りたいと思っています。(楠本)

総会のまとめや感想を書いていただく方を探して、神戸の演劇フェスティバルの会場を泳ぎまわったのは2ヶ月ほど前。それにしても、大八木さん、総会後にお願ひしたのに、本当によく書いてくださいました。感謝しております。東北Bの記事を何とかたくさん載せたいとあちこちに声をかけています。(石垣)

文化に関心のある人なら誰でもあれ、この雑誌はおもろいなア」と購入して読みたがるような本にしたい。そうすれば全リ演の皆さんも読むでしょう。ムリかな。(栗原)

神戸の総会で、断りを言う間もなくアツという間に編集委員になる羽



『ウエストサイドストーリー』 97.9.15 きびドーム公演  
中・高校生公募出演、栗原省 脚本・演出

## 表紙のことは

坂元聖子(劇団いこら)  
ニューヨークの下町、入り組んだ露路や運動場で繰り広げられるシャーク団とジェット団の対立抗争。人種差別や社会悪のルツボの中に咲いたマリアとトニーの恋一輪。現代社会の縮図のような舞台を魚眼レンズで凝縮してみました(10米×4・5米のドロップです)。

演劇会議 95号 1997年11月8日発行 定価 700円(送料240円)

編集長 早川昭二  
編集委員 境野修次 石垣政裕 山崎三郎 栗原省 赤松比洋子 楠本幸男  
発行所 〒673 明石市東野町1-5-1009 梶 武史 方 TEL/FAX 078-911-1513

誌代振込先(郵便振替)口座番号00200-4-78639  
全日本リアリズム演劇会議事務局(〒211 神奈川県川崎市幸区古市場2-109 京浜協同劇団・城谷護)